

---

# 界渡りの自由人～碧い星の物語り～

国見炯

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

界渡りの自由人〜碧い星の物語り〜

### 【Nコード】

N5037L

### 【作者名】

国見炯

### 【あらすじ】

界渡りの賢き者やら刻の賢者やら呼び名は色々。でも一番しつくりくるのは自由人。何度目かになる人生の転生先は碧い星。二度目なので子孫はいるんだけど、子孫とは敵対する国の王族に産まれました。

賢者としての才を発揮するのか平々凡々に生きるのかは悩み中の主人公・レイ（名前は略）。

今は10歳の女の子。とりあえずはシスコンの兄に可愛がられる日々です。

後は逆ハーっぽくなってきました。主人公が愛されてる？ + 最強な  
ので、嫌いな方は注意して下さい。本編完結しました。

## プロローグ

産まれては死ぬ。

それは自然の摂理。

しかし自分にはあてはまらない。

界渡りの賢き者やら刻の賢者やら、呼び名は色々あるけれど。

しみじみと言われた言葉は自由人。

まあ・・・有り余る魔力で生き死に選べちゃうけどね。

なんで自由に生きて、飽きたら肉体は星へ返して次の転生にGO。  
という事を繰り返して幾千年。

記憶もあるんで生まれ落ちた瞬間から出世街道天才児。

注意しないと異端児扱いだねー。

今度の星は、碧い星。

転生先は選べないからランダムで適当に。

ある程度の文明はあるようになったけど、まあ、色々な場所で産まれては死んでいった。

それも良い経験だけだね。

けれど碧い星は二回目だったりする。

二回目なんて自分の子孫がいるはずなんだけどね。どっかの国の王族で。

頼み込まれてなんとなく結婚した相手。

当然仰々しい呼び名は内緒にしてたからばれてはない所か、その事実自体認識されてないし。

その一族の子として産まれたら面白かったんだけど・・・どっちら今回は敵対する国の姫として産まれたらしい。

ちなみに、魂に刻まれた性が女なんで、何度産まれても性別は固定。

刻の賢者は故の人扱いだから、態々名乗らない予定。

崇め奉られるのも面倒だし。

今回は無力を装ってか弱いお姫様なんかやっっちゃおうかなー。

しかしあくまで予定は未定なのだ。

今回も容姿は銀髪に碧と翠のオッドアイ。

大体銀とか碧とか翠とか。三色辺りを髪と瞳でぐるぐるまわってる。

んで名前はレイフィニア・エレント・アニスメイル・キアレント  
ウライド・ファーサナリー。

本名は舌を噛みそうな程長ったらしくて面倒だから、略でレイ・  
エアキファーなんて名乗ってる。

「レイ。あんまり遠くに行っちゃ駄目だよ」

遠くから聞こえる過保護な兄の声。

第一王位継承者という名のただのシスコンお兄様。

「ライ兄様」

にっこりと微笑んで振り向いておく。

ああ・・・心底この顔が好きなのね。

ものすごく嬉しそうに微笑むライ　本名はライディアス・エレント・アニスメイル・キアレントウライド・ディーファル。

長・・・舌噛むね。あ、でも自分の魂に刻まれた名前も全然負けてないわ。真名じゃなくて、単に一番最初に生を受けた時の名前。

とりあえず、レイとして生を受けてから10年。

何歳ぐらいまで生きるかは未定。

何をするかも未定。

明確なのは、シスコン兄のせいで嫁には行き遅れるであろう事だけ。

まあ、そんな人生街道驀進中。だったりするわけです。





## ちょっと隣国まで小旅行

今の格好といえば、普通の格好。淡い水色のスカートに、髪は帽子の中へと納め兄に手を引かれながら歩いている。

顔を見られちゃばれそうだから、当然帽子を深く被って顔を隠す事も忘れない。

そして歩いている場所といえば、隣国エアル。

ちなみに、自国とは敵対国に認定されてる。隣国なのにな。

そこを護衛も付けずに第一王位継承者の兄と、姫が一人だという事で身内から溺愛されまくっている自分という重要人物が、手を繋いで歩いているのだから無防備もいい所。

なんていうか、溺愛だけど放任主義の両親。

これで私に何かあるものなら、即滅ぼすんだろくなあ。エアルを。

エアルは元々平和国家だったのよね。水の国って言われた癒し系。一回目に生まれた時は隣国とも仲良くやってたはずんだけどさー！  
なんて思っ事情を調べたら、その時の宰相が乗っ取っちゃったらしい……。

ああ。やっぱり私の子孫はのんびり屋さん。

そしてやっぱりか。腹黒宰相。  
仕事は出来る家系だから性質が悪いねっ。

んで、自分の目で直接確認したくなって兄様に相談したら、二人で旅行という運びになりました。

兄様は強いから、下手な護衛よりも性質が悪いんだけどさ。  
いざって時は私もいるし。

魔力は隠してあるからばれてはないけど、何かがあつた時は秘密裏に生まれてきた事を軽く後悔させられる自信はあつたりするわけね。

その気になったら滅ぼせちゃうわけよ。大国といつてもたかが一  
国。バランスが崩れるからやらないけどね。面倒だし。

その辺りはさておき、私と2人つきりでのんびり？と出来る旅行  
はいたく兄の機嫌を良くさせた。

ちらり、と視線を流してみると、殺人的な満面の笑みが、寧ろ神  
々しささえ感じてしまう。

殺人的といつても、美形故の、かな。

鮮やかな金糸に切れ長の瞳。

知性を称えた瞳は落ち着きを感じさせる深い藍<sup>アオ</sup>。

感情によって藍が朱<sup>アカ</sup>にかわるのは、血筋かな。私の場合は魂の力  
が強すぎて、その遺伝は出なかった。

「兄様」

つながれた手をちよつとだけ引つ張る。

このまま散歩気分歩くのもいいんだけど、やっぱり情報収集は必須だよー・・・なんて思ったけど、そこではたつと気づく。

「どつしたの？」

穏やかに声を降らせる兄様。

「どつやって情報収集しよう?? 私がいたら…出来ないよね？」

10歳だしね。情報を得られるような場所に入れるはずもなければ、怪しさ満載。寧ろ目を付けられて厄介事に巻き込まれるよね。

そんな当たり前の疑問を投げかけた私に、兄様はやっぱり笑みを崩さない。

「影に探らせてるから、大丈夫だよ。僕たちはゆっくりと市井見物でもしよ」

ね。と、数多の女性を勘違いさせてしまいそうな、蕩けそうな微笑を浮かべる兄様に、とりあえず頷いておく。

兄様の影を使うぐらいなら、自分の影を使った方が早いんじゃないかな? っていうのは愚問だ。

私の頼み事や私と過ごす時間以外に、王族のみが持てるという影を使ったのを見た事はないという宝の持ち腐れ。

そんな上司? は嫌じゃないかと、今度機会があったら聞いてみよう。

「レイ。これはどうかな??」

足を止めて兄様が手に取ったのは銀と藍の宝石がついたペンダント。

ト。可愛らしいデザインの、丁度今の私ぐらいの年齢に合いそうな感じの装飾品。

「可愛い」

それは本音。

自分が身に付けるのは別として。

「じゃ、これね」

ゼロは多目の装飾品をあっさりご購入。

おそらく、この店ではただ一つの本物。値段の桁も違うけど、袋には入れて貰わずに、私の首へとかけてくれる。

今の質素な装いだと、ちょっと浮くかも。

「似合うね。うん。可愛い」

レイの為に作られた装飾品だね。

職人さん、引き抜こっか。

なんて本気で言う兄様に、それはいいよ、と控えめに断ると、「可愛いのあったら、兄様がつけてくれるでしょ？」

その方が嬉しいな」

つまり、お抱えの職人さんがいた場合、兄様を通さないの自力でつける。

こうやってその都度購入する場合は、兄様を通すのでつけてもらう。

まあ、そんな意味を含ませたら、嬉しさの余り震える声をおさえつけ、そうだね、と小さくこたえた。

しかし、さほど金銭感覚の発達していない私たちは気づかなかつた。

あっさりと買ってしまった装飾品が、厄介な人間を呼び寄せるなんて事に。

明らかに、子供2人が買うには不似合いな値段。お供もない事も手伝い力モ認定。

そしてそれは突然だった。

多分力モ認定をした直後に動き出したんだと思うけどね。行動が早かったのよ。考えナシに。

「！」

後ろから走ってきた男は、私を抱え込むように身体を持ち上げて連れ去って。

痛さに顔を歪めたけれど、その際見えた兄様の表情かおが怖くて痛みを忘れた。

潜在能力は大人を軽く凌駕しても、身体はまだ成長しきっていない子供のもの。大人の男に抱え込まれたら、抵抗さえも難しくされるがまま。

「（なんて命知らずな・・・）」

兄様の影が、私たちを取り巻くように動いている。

邪魔をしないように、私の影には待機命令。

何処に連れ込もうと、既に追跡者がいるのだから筒抜けで・・・  
ああ、お馬鹿。

「（折角ののんびり隣国見学だったのに・・・）」

そんな事は後の祭りで、これから起こるであろう惨劇をどうやって防ごうか。

私の頭はそればかり考えてた。

## トラブルの後には四面楚歌

そろそろほんとーに身体が痛くなってきたんだよね。

だって、子供の身体だし。

無造作に抱え込まれて連れ去られたら、そりゃ痛いよね。

・・・その光景を兄様の影が逐一報告してるっぽいのがね、逆に怖いんだけどさ。

さてはて。私は基本は争いはNGな感じなんだよね。

だって、面倒だし。

隣の国に来てまで喧嘩なんかしたくないし。

って、隣国だからいいのか。闇に葬れば。

・・・しまった。本音が出た。

今回は穏やかに平和に暮らすが目標だから、その考え方はポイントとしてね。

平和的に平和的に平和的に。

呪文のようにそれを繰り返す。

兄様が平和的に解決してくれなさそうだから、とりあえずそれを食い止めなきゃいけない。

ああ、眉間にこれでもかかって程皺を寄せている

これぐらいの透視はばれずに出来ちゃっつけれども、そんなものは透視をしなくても予想範囲内だ。

平和的に平和的に平和的に………どうやって???

寧ろやるき満々の兄様をどう止めると?

私が止めたら、

レイは優しいね。とか。

そんな優しいレイにこんな仕打ちをするなんて……生きる価値ないよね。

なんて事を、これ以上ない程極上の笑みを浮かべて、淡々と死刑宣告の言葉を紡ぎそう。

平然と、さも当然とばかりに。

んな相手をどうやって止めると?



というか頭は良い家系なんだからさー。  
こういつゴロツキはなんとかしといてよ馬鹿宰相。

そんな私の本音が聞こえたかどうかは知らないけれど。

目前に立ちふさがる、影、一つ。

ちなみに、兄様の影じゃない。

兄様だったら立ちふさがる前に、私を取り戻してお姫様抱っこな  
んかを堪能してる。

まあ、王家の影ならわかるんだけどね。自分のじゃなくても。

なのでただの黒づくめの男だったりするわけだけれど・・・誰？  
随分とひよろつとした体型だけど・・・邪魔っ！

進路に塞ぐように立った黒づくめは、人質である私の事なんかこ  
れっぽっちも考慮せずに魔法を使ったのよ。

しかも防壁魔法。

巨大な壁を出現させた所を見ると、魔力はまあまあ。人にしては  
才能はあるんじゃない？って思うけどさ。

そこに追突したら、私も怪我するでしょ!？

考えろばああああああああああああああああ。

念を込めてたら、黒づくめの肩が揺れた。

ひよっとして、届いた？

無意識に魔力を放ってたかなあ。

まっ、いつか。

怖い何かに心臓を掴まれたのは黒づくめであって、私じゃない。

「レイ」

防壁に追突する瞬間、兄様の腕が私を優しく包み込む。

ちなみに、兄様の着地先は、私を抱えていた男の後頭部。

それと同時に魔法を駆使して私を浮遊させ、優しく抱きとめるのとは反比例するかのよう、男に対しては容赦のない一撃だった。

あ・・防壁と兄様の足の裏に挟まれた。

「ご臨終??」

そう思っ<sup>て</sup>見てたら、指先がピクリ、と動いた。

動けるなら大丈夫かな。

見た所、治癒術者もいるみたいだし。

誘拐なんてするぐらいだから信仰心なんて薄そうなのに、よくその魔力を纏えるなあ、なんてある意味関心してしまう。

誘拐犯を凝視していたら、兄様がそつと頬に手を触れ、優しく壊れ物を扱つかのように私の視線を上へと向けさせる。

「ごめんね。助けるのが遅くなって」

「ううん。ありがとうライ兄様。目立つのはイヤだったから、すごく嬉しい」

ぎゅつと、兄様の胸の辺りの衣を掴んで、身体を摺り寄せる。

「兄様・・・行く? ね。兄様と歩きたいな。時間の許す限りになつちゃうけど…」

つまり、こんなボケナス・・・もとい、誘拐犯は無視して、二人の時間を楽しみましょうって事ね。

「そっだね。」

「じゃ、行くっか」

黒づくめはスルー。

余計な防壁を張っちゃった黒づくめの存在は、私からも兄様からも存在を抹消されていた。

だって、ねえ。

人質の安否を考えない魔法の使い方、命の恩人様、なんて思わないし。

「ちょっと待てー！ー！ー！！！」

無視したら、黒づくめが後ろの方で叫んでる。

男の子の声。

兄様と同じぐらい??

「兄様」

「どうしたの？」

「ん」

「大丈夫だよ。僕がいるからね」

何が大丈夫なんだろう。

そして、やっぱりスルーしたいのね。

待てと言われても無視し続けたら、黒づくめが回り込んできた。

「命のお・・・」

「レイが怪我する所だったよ。あんな幼稚な防壁で恩人扱いはしたくないね」

兄様が男の言葉を遮り、言い切る。

まあ、あんな力技でいいなら、兄様は瞬時に私を取り戻せてるね。「対象者指定して、捕縛系の魔法の方がまだ使えるね。というわけで」

何がというわけなんだろう？

心の中で突っ込みを入れてみる。

「もう話しかけないでね。さあ、行こう」

無駄な時間を過ごしちゃったね。

と、爽やか過ぎる笑みを浮かべるお兄様……。

既に、眼中から外された男の拳は固く握り締められ、震えている。怒っちゃったかな？

「じゃー恩人じゃなくていいから、名前を名乗れ！」

ちなみに……俺はこの国の王子、シーファールルガス・ラザメント・デーダ・ラーディアシーズだ」

……先手を打ってきた。

しかもしぶとい。

名乗れ、で名乗るわけがない兄様と私。

ちなみに、なんて言葉を付け足して、自分から名乗っちゃいましたよ。

王子。そう。王子ね。

腹黒宰相の子孫なわけね。

瞳の色がダークブルー。宰相と同じだわ。

ちらり、と兄様を見てみると、面倒だなあ、なんていう表情かおをしてる。

疑ってないんだね。

目の前の男の子が王子様って事を。

「王子様がたかが通りすがりの観光客を気にする必要はないよ。じや、僕たちはこれでさようなら」

名乗る気はないみたい。

話しながらも私に癒しを施しながら、影に退路を確保させてる。

やっぱり・・・面倒だよな。

私も同感よ。実際面倒だし。

そんな事を考えてたら・・・

ふいに、昔の事を思い出した。

ダークブルーの眼差しを真っ直ぐに向けてきた、宰相の事。

アナタヲサガシダシテミセル。

身体を、星に返す時・・・傍目から見れば死ぬ間際の時。

そんな事を言われた。

もう死ぬんだよ？なんて思いながら、私はそれを軽く流した。

魂が離れる時で、その言葉の意味を考える余裕もなかったけどね。

ちよびつとだけ、背筋が寒くなる。

昔の事を思い出したからかな？

今更その言葉の意味が気になつたからかな？

私は兄様の胸に顔を埋めたまま、この状況をやり過ごす事だけに集中するのだった。

## 四面楚歌のその後は

昔々、とある国に世界で一番美しいと称される貴族の娘がおりました。

日々送られてくる贈り物の数々。

余りの膨大な量に、娘は眉間に皺を寄せたまま徐に花束を手に取り、それを使用人へと手渡すと。

「乾燥させてポプリにして、詰めて売りましょう」

寄付先は孤児院ね。

と、娘は容赦なく贈り物を形を変えて売っぱらっていきました。

そのサッパリとした行動と言動に惚れた殿下が、野薔薇を摘んでプロポーズをしに行った時、娘の容姿に驚きました。

「こんな顔をしていたんですね」

「……顔も知らずにプロポーズですか？」

「はい。俺は貴方の顔以外に惚れこんだからきたのです」



「何気に失礼な……うん。でも面白いですね」

そうして、娘と殿下の交際が始まりました。

ある日、殿下の側近中の側近である宰相候補の青年と会う機会がありました。

その青年は娘を見ると一言、

「性格が悪そうな顔だな」

と、これまた失礼な事を平気で口にしたのです。

「貴方だけには言われたくないと思います」

だがしかし、決して娘は負けていませんでした。

宰相に間髪いれずに言い返すと、世界で一番美しいと称された笑みを浮かべ、

「腹黒のむっつりっぴい顔ね。近づかないで。それだけで妊娠しちゃいそう」

青年だけに聞こえる声ではっきりと言い放ちました。

それが、宰相と娘の出会いでした。

遠い昔の記憶に触れながら、私は考えてた。

意味がわからないと。

だって、こんな出会いでどうして私を探し出してみせる、なんて死んじゃう時に言うのかな？ってね。相変わらず意味不明な宰相だよね。

まあ、常にあんな感じだったんだけどさ。

昔の記憶を呼び覚ましてると、背筋が寒くなる事なんてこれっぽちもないって事に気付いた私は、伏せていた顔を上げようとした。

が、兄様に止められる。

それで気付いたけど、シーファなんとかが私の顔を見ようとしたのね。

見せる気がまったくない兄様と、見たいシーファなんとか。

取り合えず兄様の思う通り、上げようとした顔をもう一度兄様の胸へと埋めた。

「顔ぐらい見せる」

「寝言は寝てから言つてよ」

シーファ 面倒だからこれから略ね に対応したのは兄様。

兄様が私の顔を男に見せるわけがないのにね。とは思ったけど、そこまで親切じゃない私は取り合えず事の成り行きを見守つておく。

静かな声で言葉の応酬があつた、というよりやり続けているけど・  
・飽きるよね。段々と喉も渴いてきたし。

顔を上げないまま兄様に下ろしてもらい、そのまま背へと隠れる。  
この辺りは以心伝心になつてきた感じ？

態々言葉にしなくても兄様はわかってくれる。その分、こっちも  
兄様の思考を読まなきゃダメだけど。

「その娘の顔を見せる！」

「イヤだつて言ってるだろ？ いい加減その少ない脳みそに刻み込  
んでよ。面倒くさい」

「俺を馬鹿にするな！ 王子だぞ！」

「二言目には王子王子つて、それしか能がないの？  
個人の實力で相手と論議を交わせないなんて可哀想に」

「いっ」

「また考えなしの防壁でも張る？ 木っ端微塵に砕いてあげるよ」

「シスコンがっつ！！！！」

兄様の言葉に頭に血が上ったシーファ。

ああ。やっぱりお馬鹿さん。

兄様にそれは禁句なのよ？

「シスコンの何処が悪い？ 50文字以内に纏めて言ってみてよ。家族を大事にする事を直ぐにそういう言葉で表す無能がいるけれど・・・この国の王子もそうだとは憐れだね。それとも他に本命がいるのかな？」

こっとなったら止まらない。

シスコンの何処がダメなのか、というのを永遠に語り続ける。

相手を納得させるといふより、相手が疲れ果てても尚且つトドメをさせるまで語るのだ。それには付き合いたくない私は影に頼み、飲み物を買ってきてもらおう。

ついでに兄様の分も。

語るのに集中してて飲まないだろうけど。

散歩に行きたいけど、兄様を心配かけちゃうし。

その背で私を隠している兄様を見上げ、そんな事を思う。

すると、シーファが首にかけてあった首飾りの装飾を一つ掴むと、それを地面へと叩き付けた。

「！」

兄様の自動防御が発動されるけど、それよりも早く距離を詰め、私の腕を取り引っ張り上げる。

私も油断はしてなかったはずだけど……まさか捕らえられるとは予想外。

私を腕に抱えた状態じゃ、兄様はシーファに何も出来ない。

自動防御を解除すると、兄様は射殺せそうな眼差しをシーファへと向けた。

そしてプレスレットにはめ込んである宝石を何個か取りだし、それを手で弄び始める。

殺る気だ・・・間違いなく。

流石にそれは外交問題になるから、止めといた方がいいと思うの  
ね。

ただでさえ緊張状態なのに。

何がしたいんだろ？っていう眼差しを、私を抱えてるシーファに  
向けてみた。

離してもらわないとね。

抱えられてる体勢も苦しいし。

すると、シーファは真っ直ぐに私を見ていたかと思うと、

「綺麗だ・・・俺と結婚を前提に付き合ってほしい」

と、これまた爆弾発言をかましてくれたのよ。

流石に、兄様の顔は見れなかったのね。

だって、怖いし。

「知らない人とはお付き合いできません。ごめんなさい。離して下さい」

兄様の方は見ないままお断り。

少しだけ私を抱きしめるシーファの腕に力が入ったけど、気付かないふりをした。

まったく離す気がないのね・・・仕方ない。

断っても離さないシーファに、私は影を使った。

いつもいつも、兄様の影に仕事をとられる私の影。影の所為じゃないんだけどね。

そんな私の影に、久しぶりになるお願いをする。

誰にも怪我させず、私を離脱させて、と。

私の力の影響を受ける、私の影。

ある意味最強な存在。

次の瞬間、私はシーファからも兄様からも離れた場所に、影に守られるように立っていた。

ついでに、兄様の兵器である宝石も回収してもらい、私の両手で包み込む。

「兄様、穩便にしてね。お願い」

私のお願いに、兄様は複雑そうな表情を浮かべた。  
殺る気だったのはわかってるんだけどね。

「わかったよ。じゃあ・・・今日は帰ろう」

啞然とした表情のまま、固まったかのように動けないシーファを一切見ずに兄様は言う。見たらきつと、魔法を発動しちゃうんだろ  
うね。

「うん。帰る」

兄様に近づき、私の影にお願いする。

転移。

私の影だけが使える特殊魔法。



ちらり、とシーファに視線を流してみると、まだ固まったまま。

……あれ？

ひよつとして……

影を束ねている白兔ハクトに視線を向けてみるけど……逸らされた。

この時点で決定。

魔法を籠めた針を刺したね？ シーファに。

動きを止める魔法だから時間が経てば大丈夫だけど。

まあ、いつか。

兄様に抱えられたまま、影が準備した転移の陣へと入る。淡い光が私たちを包み込み、自国へと送ってくれる。

陣に入ってから目を瞬くほどの時間だろうか。

私たちの姿は掻き消えた。

その余韻さえも残さずに、影も一緒に。

一人残されたシーファは、魔法によって自由のきかない口をゆっくりと動かす。

「……やっぱり、そうだったか。お前たちも、王族だったか」

私たちは知らなかった。

シーファが、私たちの正体を感じていた事に。

まあ、仮に知ってても、無視したけどね。

兄様も私も。

関わり合いになりたくないし。

なかつたんだけど。

これから関わる事になるなんて、私も兄様もまったく考えていなかった。

## 嵐の前の静けさ

転移という呪文でエアルを脱出してから一週間。

とりあえず現在は平和を満喫してたりするんだけど、どうにもこ  
うにも嫌な予感の消えない私は、周りに誰もいない事を確認してか  
らソファアへと身体を深く沈ませ、

「白兔」

私の影の名を呼んだ。

音も無く、気配もなく現れる白兔。

「どうしました？」

私だけの場に立つ場合、私の影は黒の色彩を脱ぎ捨てる。

影は魔法で黒く見せているだけなのでその魔法を解くだけなんだ  
けど、私の影は素顔を見せたがらないのだ。私以外には、ただどね。

「黒兔コウトから連絡あった？」

エアルで情報収集をしてもらう為にもう一度旅立ってもらったん  
だけど、ある程度纏めるまで私の耳には入ってこない。

だから、聞いてみるんだけどね。

「ありましたよ。姫さんへの手紙も預かってるけど、それは黒兔へ

の褒美条件が整ったら渡しますね」

「褒美条件って……」

「有意義な情報を一つ得る毎に、一通姫さんに渡してあげる、という条件です」

あつさりと言われてしまった言葉に、私の口からは苦笑が漏れる。「相変わらずかわった条件だね」

いつもそう。私の影たちは、任務にこんな条件をつけるのだ。

前は私の声を魔石に録音してた。のを、褒美にしてた気がする。回収しようとしたら、頑張ったのに！褒美なのに！と泣かれて諦めたんだけど……そんなものを褒美にされたこっちも実は泣きたいんだけどさ。

「で、姫さんの知りたがってる情報といえは……エアルの王子がなーんか企んでますねー。姫さんに一目惚れしてるっぽいんで、頑張ってるみたいですよ」

「頑張らなくていいのに」

「そうそう。うちの国は絶対政略結婚なんかさせるはずない変わりの国なのに、未だにそれを理解出来てないみたいですね。まあ、無駄な足掻きはさせとけばいいんじゃないですか？ いざって時は叩けばいいし」

「……………」

私の影は、実力行使が好き。

うん。手っ取り早いのはいいよね。ムダがなくて。

「で、その為に緑兎リョクトや黄兎キトが動いてるんで、姫さんは大船に乗ったつもりで安心しちゃって下さいね」

私と契約関係にある私の影の知識は相当なもので、すごく強いのは知ってる。

これでも刻の賢者と呼ばれた私の力とリンクしてるもの。だから弱いはずはないんだけどね。

「緑兎と黄兎が動いてるって事は…エアルを陣で覆ったの？」

2人は連携が得意だから、よく一緒に行動はしてるんだけどさ。それ、初耳だよ？とちよっと批難じみた視線を送ってみるけど、軽く流された。

白兎は、ものすごく良い性格をしてる。

出会った時はそうでもなかったんだけど、影になってから段々とこんな感じになってきた。

……素質はあったのかも。元々。

「だって、俺らの主になーに失礼な事してやがんだこの野郎？って感じで、即死魔方阵を使わないだけでも俺たちって良心的だなあ、なんて思っちゃったりしてるんですけどね。そう思いませんか？」

私に聞くな。

と、今度は有無を言わさない視線を向けてみた。

すると、白兎は蕩けそうな笑みを浮かべ、私に包みを渡してくる。

「？」

「俺たちからのです。」

姫さんは沢山持つてて、欲しい物は大体手に入っちゃうんで迷ったんですけど…

お守りが必要だなんて思ったんで、持ってて下さい」

感触からして石。

お守りって事は護符なのかな？

「開けてもいい？」

目の前に立っている白兔に聞いてみると、白兔は勿論と言わんばかりに頷く。

じゃあ、開けるね。

と、リボンを解いて包みをあけてみる。

折角もらった包みだから、綺麗に綺麗に折りたたんでテーブルの上へと置くと、やっぱり嬉しそうに笑う白兔が見えた。

「護符石…」

ペンダントになったやつ。

結構精巧な出来だけど、市販品じゃまず無理な印が彫られてる。

「手作り？」

右手の平に乗せたまま尋ねてみると、頷かれた。

これ、結構大変なんじゃないかなあ。

石も貴重品みたいだし。買えば高いし、採りに行くのには命の危険がある場所だし、時間も掛かる。

「先日のアレは、やっぱり面白くなかったんですよ。だから、持って下さい」

どちらかという命令形？

有無を言わない口調に、私の口からは苦笑が漏れていた。

「兄様がやいちゃうからここでは付けられないけど……持ち歩くね」

それで十分なのか、白兔は静かに頷いた。かと思うと、直ぐに顔を上げて懐から手紙を取り出し、それを私へと手渡す。

「黒兔から？」

姫様へ。と、黒兔らしく几帳面な文字で書かれた手紙。

私に送る事を考え、真っ白な便箋ではなく、風景が書かれたお手紙セツト。

ちなみに、黒兔の手作り。

「ご褒美じゃなかったの？」

手紙を渡すという事は、有力な情報を得たのね。

影同士は特殊な通信方法を使えるようにしてるから、場所も距離も関係なくリアルタイムで情報の受け渡しができる。

ちなみに、私の影は映像まで受け渡し可能という何でも有り。諜報専門じゃないけれど、多分どこの国でも欲しがってる人材だと思う。

教えてないから、誰も知らないけど。

「有力な情報を受け取ったので、ご褒美です。黒兎のヤツが紙から手作りをした力作なので、手触りから堪能してやって下さい」

「紙からなんだ」

堪能つて・・・確かに手触りはいいけれど。

和紙まで手作り出来るんだ。

器用だなあ、なんて思ったけれど、手紙は後回し。

情報は？と聞いてみると、白兎は笑顔のまま眉間に皺を寄せるといふ器用な事をやってみせた。

「姫さん。座りっぱなしは疲れるでしょ？」

飲み物入れてくるので、ちよつと身体をほぐしといて下さいね」

そう言うと、白兎は真っ黒に姿を変えて、この部屋から消える。

厨房に飲み物を取りに行ったんだろうけど…

白兎の眉間の皺を思い出し、私自身も眉間に皺を寄せた。

あれは、面倒な情報が入ったに違いない。

感情を表に出している印象を受ける白兎だけど、実際は素直じゃない性格で重要な事は表には出さないんだけど、今のは不快な皺の刻み方をした。

で、多分そういう不快さを露にするって事は、探ってた情報と照らしあわなくても一つしかなくて。



「私関連かあ」

そう。

私の影はやっぱり私の影だけあって、私に害が及んだ瞬間は剣呑さを隠そうとはせずに、しっかりと相手を敵と認識する。

前回のプロポーズから相当溜まってるとは思ってたんだけど、気をつけないと攻めちゃうかも。と危惧しながらも、私は言われた通りに身体を動かしながら白兔を待ってたの。

自分の影たちは独断行動が好きっていうのをすっかりと失念していた私。

裏でちゃっかりと兄様と提携を結んでいたなんて、今の私は知るはずもなく。

「姫さんが困るような事はしないから、俺たちを信じて？ ね」

と、飲み物を渡すと同時にそんな事を言っつて、情報は渡さなかった白兔。

「無理はしないようにね」

なんだかんだ言っつて影に甘い私は、まあいつか。でその情報を受け取らなかつたんだけどね。

数日後、私はそれをちょっとだけ後悔する事になるけど。

それは、後の話し。

番外編く刻の賢者とシロウサギ・1 (前書き)

注意

レイと白兔の出会い編です。

白兔が明るいです？兄ちゃんじゃありません。寧ろ暗いです。壊れ気味です。

短文+改行が多めです。

番外編く刻の賢者とシロウサギ・1

手を伸ばした所で、掴めるモノなんて存在しない。

壊す事だけしか能が無くて、当たり前のように血溜まりの中に立っていた。

まるで、そこが自分の居場所だと言わんばかりに。

それが俺の当たり前。

血が目立たないように、色彩はいつも黒。

黒はいい。

赤が、目立たないから。

肉を斬る感触も慣れたもので、今ではもう、命を切ってる気すら  
しない。

このまま自分は壊れていくのだ。

いや、もう壊れているんだろっ。

世界には、色がない。

俺の瞳が映す世界は、モノクロ。

血の赤でさえ、今は、もう、見えない。

「お兄さん、ちょっといいかなあ？」

幼い声が、耳に届いた。

・・・？

何で声が？

俺の耳はもう、聞こえないはずなのに。

「最近この界隈で悪名高い殺人鬼さん。聞こえてる？」

「聞こえてる」

俺の……声？

そうか。こんな声をしてたのか。

「その実力と精神力を生かしてね……私の影をやってみない？」

「……………」

「私の影。守護者？　なんていうか便利屋さんっていう気もするんだけどね。」

「下手すると私の力と接続出来なくて廃人まっしぐらになっちゃうかもしれないという、スリリングな体験してみない？」

「……………」

コイツハバカカ？

思った事が表に出ていたのか、声の主は俺の目の前へと降りてきた

親の保護の下、苦勞も何もなくて育ってきたような貴族の子供が、



そこにいた。

俺は無意識に、手に馴染みすぎたナイフを投げつけた。

魔力で操る鎖つきのナイフ。  
投げた所で困るわけではない。

いつものように、モノクロの血溜まりが、出来るだけ。

「あ。いいナイフ。持ち主が好きなのね。でもねえ……」

喧嘩を売っちゃいけない相手もいるんだよ？

子供は、目の前の少女は、笑った。

碧と翠の瞳を面白そうに細めて、笑ったんだ……

瞬間、ナイフは砕け散る。

俺を支え続けたナイフは、跡形もなく、消え去ったかに見えた。

「怯えなくて大丈夫よ？」

頑張れば受け止められる人にしか声かけないから。

無差別に影なんていらぬし。ひよつとしたら私の知識と少しだけリンクしちゃうかもだから、増やせないのよね」

少女の形をした何かが、笑う。

「お前は……なんだ？」

俺は、恐怖を覚えた。

死ぬとか、そんな恐怖じゃない。

絶対的強者に。

人間よりも高位的存在に。

踏み潰される恐さ。

「レイちゃんって呼んで。様付けなんていらないよ?」

「.....」

「私の影の代償としては、人間外の知識と力。はおまけで...そうね...  
...温かいご飯と一緒に食べて、寂しかったらこっそり同じ布  
団で眠りましょ?」

兄様がヤキモチを焼いちゃうから、内緒ね。と、少女は笑う。

「何を言っ...」

「私と一緒に色々な景色を見て、お話をしましょ？  
私の影だから、綺麗な事ばかりじゃないけれどね」

さっきから、何を言ってるんだ？

意味がわからない。

「迷ってるみたいだから考えておいて。

私はそろそろ戻らなきゃいけない。

でも、また来るから………今度は本体でね」

少女の姿は、掻き消えるようにして空気に溶けた。

俺は意味がわからず、ただ汗ばむ手の平を隠すように握りこぶしを作っていた。

これが、俺と姫さんの、出会い。



**番外編く刻の賢者とシロウサギ・2（前書き）**

**注意**

1 に続き暗いです。

白兎がおかしくて、レイは何千年も生きた刻の賢者として会話をしている感じです。

相変わらずの短文 + 改行の多さです。

番外編く刻の賢者とシロウサギ・2

あれから、何日経っただろうか…？

おかしいな。

時間感覚なんて、なくなっていたはずの俺が、時間を気にするなんて。

これを言葉にするなら、驚きなんだろうけど、俺の表情は動かない。

ただ殺すだけの生に、感情も何も全てイラナイ。

モノクロの世界。

音の無い世界。

どうして俺は、生きてるんだろっ？？

死にたくないから、ナイフを振るうわけじゃない。

痛覚なんて、もう存在しない俺は、死んだ事すらわからずに死ぬ  
だろっ。

たったそれだけ。

なのに俺はまだ生きてる。

他が弱いから、とか、俺が強いから、とかじゃない。

俺の中に弱いとか強いとか、そんなモノは存在しない。

はずだった。のに。



なのに……

アレは、絶対的強者、だった。

震えた。

存在に。

全てが。

恐かった。

私の影の代償としては、人間外の知識と力。はおまけで…：そう  
ね…：…：温かいご飯と一緒に食べて、寂しかったらこっそり同  
じ布団で眠りましょ？

「ご飯？って、なんだっけ？？」

眠る？

イミガワカラナイ。

モノクロの世界。  
色の無い世界。

俺も、消えてしまえばいいのに。

そうすれば、きっと色が戻る。

色。

その時、俺の目の前に、月が降りてきた。

「こんにちは。今日は本体で登場したけど、どうっ？」

「……」

俺は無言のまま目の前の少女に視線を落とした。

俺よりも遥かに小さい目の前の子供。それなのに大きく見える。

ああ……銀だ。

モノクロの世界のようで、モノクロじゃない。

「考えてくれたみたいだね？ で。どうする？」

目の前の少女は、俺が断るなんて思っていないのかもしれない。

それとも、どちらでもいい、という事だろうか？

相変わらず笑みを浮かべたまま、俺を真っ直ぐに見てくる。

.....。

久しぶりに、人と視線が合わさった気がする。

「すごく痩せちゃってるね.....殺す時に出る微弱な生気じゃ、飢えるだけだよ」

「.....」

「そうすると始めはスープかなあ。胃に優しいものじゃないかね」

「お前を殺せば、俺は楽になれそうな気がする」

口から出ていた。

会話なんてかみ合っていない。でもこれが、今の俺の本音。

目の前の殺せそうに無い少女を殺そうとすれば、俺は楽になれる気がする。

もう考えなくて済みそうだから。

だから、楽になれるんだ。

「殺せるんなら、どーぞ。飢えが少しの間収まったから、だから何？ 尚更酷くなりそうな気がするけど……ああ。でも大前提が成り立たないね。」

私は、殺せないもの」

少女の言葉はあっていると想う。

俺は、殺せない。

「殺してほしいんでしょう？」

そう…殺して欲しい。

「何で欲しい相手を殺さなきゃならないの？ 馬鹿らしい。」

私は貴方の色が気に入ったの。だから殺さないし、そういうなら  
実力行使で契約をしちゃうよ？それでもいいかなあ」

少女の眉間に、皺が寄る。

不機嫌カオそうな、表情。

もっと歪ませたら、面白いだろうか？

壊れた心の奥底から、壊れた思考が湧き上がる。

欲求なんてモノが、まだ、俺の心の中にあつたのか……  
それは驚きだが、別にどうでもいい。

ナイフは砕けたけど、俺にはまだある。

俺を欲しいという少女。

少女の手で、壊させてみたい。

俺は、魔力で真空を作り出し、それを放つ。

物心がつく前、これで一つの街を消失させた。

殴られた。

罵られた。

恐怖された。

そして、俺は殺した。

「私は貴方よりも強いもの。だから、壊されないし、恐がらない、  
貴方を壊したりもしない。」

あ、でも契約時に耐えられなくて死んじゃうのは別ね。それは私  
の見る目がなかったっていう事で、流させてもらっけど」「

契約。

何度も聞く。

その言葉を呟き反復していると、真空波が、少女に呑み込まれ消



えた。

「ゴチソウサマ。大概私も人外ね。ねえ、そんな相手を見ると、貴方は人間でしかないよね。ただの可愛い少年……青年かな？」

やっぱり、少女の形をした何かが俺の目の前で笑ってる。

そして徐に、ゆっくりとした動作で少女は俺に手を伸ばし、俺の意識はそこで途切れた。

黒の世界。

もう、モノクロですらない。

真っ黒に、塗りつぶされただけ。

番外編く刻の賢者とシロウサギ・3 (前書き)

1・2程暗くはないです。

物騒な言葉は出ますが、別の意味でほのぼのしてきました。

番外編く刻の賢者とシロウサギ・3

目を開けたら、見知らぬ場所にいた。

見知らぬ場所ならまだ可愛いのかもれない。

一面真っ白の世界。

正常な人間なら、気が狂うだろう。それ程に視界には白色しか入ってこない。

色の無い世界。

「.....」

分かりやすい気配を感じ、俺はそちらに視線を向けた。  
ひよこひよここと何かを頭にかぶせて、匍匐前進をする少女。

本当に、イミガワカラナイ。

「・・・・・・・・・・」

何をやっている？と、反射的に言葉を紡ぎそうになるが、俺は何も言わずにただ押し黙った。

勝ち負けなんて関係ないのに、聞いたら負けるような気がした。ただ、それだけ。

「・・・・・・・・・・？」

匍匐前進をする少女の横で、同じく匍匐前進らしきものをする白い塊。

「……………あ。おはよー」

小声で話す少女に視線を向けたが、すぐに逸らした。返事を返す理由はない。

「……………うさちゃん。行ってきてー」

「ー!？」

少女の隣で匍匐前進らしきものを披露していた白い塊。それは、  
兎の形をしていた。

サイズは規格外。

飛び掛られて分かったが、山の奥地に生息する親熊ぐらいのサイ  
ズはあるんじゃないだろうか。

《挨拶ー！！》

俺の目の前で兎らしき形をしたモノは、器用にくるっと一回転し  
たかと思うと前足を地面へとつけ、その勢いそのまま俺目掛けて砂を  
かけるかのように後足を放つ。

「!?!」

鋭すぎる一撃に、俺は無様に避け、地面へと腰をついた。

ツウ、と頬から流れる赤。

《薄皮ー！！》

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

頬に触れると、薄皮一枚。

本当に紙一重で避けれたらしい。が、目の前の兎もどきはそれが  
不満そうに牙を露にする。

その牙、兎じゃないだろう。

海の生物みたいに尖りすぎた歯は、陸の生き物では考えられない。

「仲良くなれたみたいで良かった」

何処をどう見たら、仲がよく見える？

その目は節穴か？

「このうさちゃんは、貴方の魔力が結晶化した存在なの。

だから、これは貴方自身といっても過言じゃないの。

とりあえず私との契約は成されたから、暫くはうさちゃんと一緒に自身の中にある契約の証の魔力と向き合って。

そうすれば答えは用意されてるから。

料理はうさちゃんが出来るから、しっかりと食べるように」

「お前は何を言っている？」

意識を失う前に言っていた実力行使。本当にしたらしい。

ある意味宣言通りなのだが、それよりも気になる言葉を言われた気がする。

この目の前の、胸を張っている、凶暴な兎っぽい形をしたまったく別の生物が、俺自身？

ふわっとした毛並みを惜しむ事無く披露し、上から俺を見下ろす  
コレが……

俺自身だと!?

一言文句を言おうと顔を上げるが、そこに、少女の姿はなかった。

白い空間に、俺と、兎……

いつものように殺そう。

それが、いい。

俺の前に、魔力の渦が出来る。

この空間が壊れようが、どうでもいい。

俺が死のうが、どうでもいい。

意味がわからない。

壊してしまえ。

兎らしき生物は、赤色だった目を翠へと変化させると、俺が放った魔力を　　喰った。

キュッポン。と音をたて、ゲプ…という音を残して。

喰らった……

そうしたら、俺でも気付く変化があった。

綺麗な毛並みが、更に光り輝くように艶を増した。

《俺はシロウサギ》

すると、唐突に目の前に何かが名乗りだした。



兎？

俺にコレを兎扱いしろ？と？？

《寂しがりやなシロウサギ》

……。

《弱いお前が俺のご主人候補というのは非常に不満だが、仕方ない。  
試してやるぞ》

殺す。

絶対に殺す。

こいつを殺して、あの少女も殺す。

俺が死ぬまで、街中の人間も殺してやる。

わけのわからない鬱々とする感情を全て、殺す事だけに集中させた。

エモノはない、が関係ない。

俺の中にあるらしい魔力で作ればいい。

俺に与えた力で、お前を殺す。

「はは……」

そうすれば、俺は解放されるはずだ。

この、わけのわからない感情からッッ……！！

《このたわけー！！》

目の前の兎もどきから、拳が飛んできた。

光速の拳に殴られ、俺の身体は宙を舞う、

放物線を描きながら、俺の身体は地面へと叩きつけられた。

ぐしゃ、と、嫌な音が耳に入ってくる。

《主様が顔を出す前に、指導してやるわ。  
そのたわけが少しでも治るようにな》

意識を失う直前、俺の耳には兎もどきの戯言が聞こえたような気がした。

が、それは俺の気のせいではなかったという事が、起きた瞬間に理解出来た。

俺の目の前に置かれたソレ。

情操教育と書かれた本と、絵本が山積みになっている。

文字なんか読めなかったはずの俺。それなのに、当たり前のように俺の頭の中には文字に関する知識が存在している。

これが、契約か。

《主様の頭脳明晰さを理解させるのも、お前をそれ相当のレベルまで引き上げなきゃならん。面倒だが、叩き込む。》

お前がこの空間を自力で破れるようになるまで続くからな。覚悟

しとけ》

これは、あの少女の目の前にいた兎もどきと同じ生物か？

まったく違う生き物に見えるのは俺だけか？

これが俺だと？

本当に冗談じゃない！！！！

《お前の顔ほど冗談じゃない》

テメエ……やっぱりすぐ死ぬ！！！！

ナイフを作り出し、俺は目の前に白い塊へと容赦な放つ　　が、  
喰われた。

………刃物まで喰うのかコイツはっっ！！！！

《その理由は自身と向き合えばわかるだろう。しかしやっぱり面倒  
だな。

眠らせて睡眠学習で叩き込むか》

「この………兎野郎が………」

全部丸ごと聞こえてるんだよッッ。

その日俺は、意識を保っていらなくなる程魔力を使い、力の限り兎もどきを仕留めようとした。

だが、それは兎もどきの毛艶を輝かせるだけだと理解できたのは、パンを口に詰め込まれ意識を取り戻した時だった。

「……………」

《柔らかいだろう。美味いだろう。お前の臍物は契約の成立で正常以上になった。温かなご飯を食べる事を感謝しながら役に立て》

「死ね」

これ程までに何かの死を願ったのは初めてだった。

## 番外編く刻の賢者とシロウサギ・4

日々ズタボロにされ、文字を読まされ理解するまで何度も尋ねられ、考えさせられた。契約者の素質に影響されるらしく、俺でも解るほど、この世界に関してわからないものはほぼなくなった…気がした。

強さも桁違いで、兎に使っていて気付いたけど、魔力も前に比べたらほぼ無尽蔵。

前は魔法の影響で立っていられなかったものが、平然と立つ所かたて続けに魔法が使えるようになった。

だが、この世界には、俺と兎もどきだけ。

俺は、あの小さな 殺せそうで殺せない少女を主だなんて思えない。  
ない。

俺の魔力から産まれたらしいアレは、日々賛辞の言葉を送っている。俺と同一だなんて思えない行動パターンと言動。

ふざけてる。

「なんであんなガキに」

器用に野菜を千切っている兎の隣で、俺は鍋をかき混ぜながらぼやく。

《お前も素直じゃないな。主様程賢く、強く、そして悲しい存在はいないというのに。まあ、それはさておき…主様をガキ呼ばわりは許さん。次はサイノカワラの刑だからな》

サイノカワラの刑ってなんだよ。

《石をある一定の高さまで積み上げるまで続く刑だ。当然、俺が壊しに行くがな》

やっぱり、この兎は性格が悪い。

ここ数日で嫌という程わかった俺は、これ以上は言わずに黙っておく。

とはいっても、この兎には俺の思考が読めるらしく、口にして言わなくても遠慮なく鉄拳が飛んでくる。

「……今の」

俺と兎が並ぶ場所から少し離れた所に、何かが降りた。

何か、といっても今の俺が間違えるはずがない。

あの、少女の気配。



あの兎の言葉を借りるなら、主という所か。  
俺は絶対に認めないけどな。

例え、人を凌駕する人外の力を持った存在だといっても。

俺は、認めない。

《お前は相変わらず素直じゃない》

隣で、兎が余計な事を言う。

《お前が、その力を破棄しないという事が、既に答えだ》

相変わらず意味不明な事を言う兎だ。

やっぱり今ここで殺……

その言葉を、最後まで思う事すら許されなかった。

脳に響く衝撃。

クラツと脳天が揺れ、平衡感覚が失われる。

《鍋をかき混ぜる手を休めるな。主様に食べてもらうんだからな》

「だったら人を殴るなツツ!!!」

俺はなんとか足を踏ん張り、鍋をかき混ぜ続ける。

ここで手を離そうものなら、兎が俺に対して腹のたつ事を平気で言うのはわかりきった事実。

それを、態々聞きたいとは思わない。

「あ、やっぱり仲良くなつたね」

真っ白の日傘をくるくると回しながら、軽い足取り近付いてくる少女。

ここ最近、俺の世界には色が戻ってきた。

その状態で改めて少女を見ると、その色彩は鮮やかな一言だった。

銀に碧に翠。

人の美醜に興味はなかったが、少女は綺麗な部類になるんだろうか。

《当たり前だ。まったく……主様の美しさもわからんとは、その目は節穴以前だな》

俺の思考を読んでいるのか、相変わらず兎が隣で煩い。

「うん。血色が良くなった」

だが、少女は気にせず嬉しそうに笑う。  
何がそんなに嬉しいのか。俺にはよくわからない。

「魔力の馴染み方もいいみたいだね。どう？ 人外になっちゃった気分は？」

「……」

人外、と平然とそれを口にする少女。

契約とやらで俺に宿った力は、相手の素質に影響される力。  
今の俺が人外という事は、目の前の少女は既に人の領域にいない  
という事と同義。

この少女と対峙していると、俺がちっぽけなただの人間に見える。

別に、比べて安心するわけじゃない。

ただ、そう思っただけ。

「そろそろ。今日の本題でね……名前どっするっ？」

「……」



くなくなった。

寧ろ、こいつ等が人の心を当たり前のように読むように、俺の染み付いた動作は殺す事だ。

それなのに、今の俺は少女の言葉をただ黙って聞いていた。

信じられない。

「貴方の魔力で作った存在がシロウサギちゃんだっただから、貴方は白兔<sup>ハクト</sup>ね。可愛いでしょ」

……俺が、この兔もどきと同じ名前だと？

やっぱり、当初の目的通り俺の命が尽きるまで殺しつくすか。

「貴方の魔力は白色だった。綺麗な、真っ白。名前の響きも綺麗でしょ？」

「……………」

「私は好きな響き」

「……………」

「ああ……でも」

「……………」

「怖かったら、契約解除してもいいよ。そういう制約はつけていないから、貴方次第で契約は解除出来るよ」

少女の、突然の言葉。

それでも少女は笑ってる。

笑顔の種類は、いつも同じ。

「お前は……俺以上に無表情なんだな」

俺の口から、そんな言葉が飛び出た。

無意識に、紡いでた。

少女の変わらない笑顔。

何を話しても変わらない。

いつも、同じ表情。

何故今、俺はこんな事に気づいたんだろうか……

相変わらず、意味がわからない。

番外編く刻の賢者とシロウサギ・5 (前書き)

白兔の独白っぽいです。



番外編く刻の賢者とシロウサギ・5

別に、気付いたからって何がどうなるわけでもない。

目の前の少女の表情は相変わらず笑みのまま。

隣の兎は相変わらず腹のたつ表情のまま。

何かが劇的になんか変わるわけがない　　のに。

俺はどうして、少女に対して戸惑っているのだろう。

十数年生きてきた感情がこの数日モで変化するはずがない。

例え俺の世界に色が戻ったとしても、俺が変わるはずが無い。

そう。

世界は何も変わらないと、俺は思いたい。

「ねえ…白兔」

少女の声が耳に心地よく響く。

「お前は、俺に何をした？」

でも、俺は応えない。

一方的に言葉を投げつける。

この、意味が解らないモノが契約の影響だということのか。  
契約を破棄すれば、俺は元に戻るのか？

「契約をしただけ。力と知恵は人外。後はご飯は美味しく食べれた  
？」

少女は、あえて俺を見ないのか、視線は兎の方を向いて言葉を紡  
ぐ。

会話をしているはずなのに、どこかかみ合わない会話。  
俺が、よくやる事。

見ているようで見ていない。  
認識しているようで、していない。

世界はモノクロで、ただ、時間だけが流れるだけ。

「別に……俺はただ果てるだけだ」

少女の問いには一切答えない。  
少女もそれについては何も言わない。

別に、気まぐれだろう？

お互いがこんなありえない時間を過ごした事がその証拠。

俺が殺そうとしないなんて。

少女が俺を見ようとしなないなんて。

ありえないだろう？

「捨てるなら、ちょうだい。捨てるぐらいなら、私と生きない？」

淡々とした少女の声が白の空間に響き渡る。

いつもはうるさい程何かを話す兎は口を噤んだまま。

俺の出方を見ているだけ。

いつの間にか目の前の鍋は消えていて、居住スペースも消えていて。

そこにいるのは俺と少女だけ。

兎の存在はわかる。見えないだけで、居るって事ぐらいわかる。

それがどんな意味を持つのか。

今の俺にはわかってしまう。

こんな短期間で劇的に何かかわるわけがない。

例えば俺の中が変わったとしても、今まで生きてきた精神までもがかわるわけがない。

少女もそれをわかっているのか、兎と同様口を噤み、俺に背を向けた。

一切、少女の表情を伺う事が出来ない。

俺から、見る事も叶わない。

少女が、俺を視界に映す事もない。

どうして俺は今、それを寂しいと感じるのだろうか………？

この数日の生活の変化できっと、俺の心は完全に壊れたのかもしれない。

だから今、寂しいなんて思うのだろうか。

それでも、俺はそれを認めたくなくて、少女から視線を逸らしたまま唇を噛み締めた。

それを認めてしまったら、認める前の俺にはもう二度と戻れないという確信があつて、失いたくないという恐怖が生まれる。

わかっているからこそ、俺は足掻こうとした。

「ねえ、白兔。

とりあえず、お試し期間っていう事で、私の影をやってみない？」

相変わらず顔の見せない少女の声が、俺の耳に届く。

ここで俺がそれを突っぱねれば、俺と少女の繋がりには完全に途切れるだろう。

あの生意気で煩い兎も、俺の中に戻るだけ。

いつものように、拒否すればいい。

そうすれば、俺の日常が帰ってくる。



のに。

俺は震えてガチガチと鳴る歯を噛み締めようと力を籠めるが、その震えは全身へと広がり力を籠める事さえ叶わない。

思っている事を口にするだけなのに、俺自身がそれを拒否するよ  
うに言葉を紡ぐ事を拒絶する。

「白兔」

少女が、目の前で俺を見上げる。

初めて綺麗だと思った、存在が、その瞳に俺を映しこむ。

全身に広がる震えは段々と痺れをかわり、立っていらなくなつた俺はその場へと座りこもつとした。

まるで、糸の切れた操り人形のように。

そんな俺を、少女が抱きとめる。

小さな少女が俺を支えきれぬわけもなく、一緒に地面へと崩れ落ちるが、俺は腕を地面へと突き出し、逆の腕で少女を抱え込んだまま俺の上へと少女を逃がす。

俺の下になれば、少女が怪我をするかもしれない。

ああ。それは嫌だなあ。

「大丈夫？」

小さな温もりが俺の腕の中に在る。

殺そうとしても殺せなくて、俺より強くて、俺を置いていかない存在がいる。

「白兔…？」

「俺はまだ……そんな名前じゃない」

声を、絞り出した。

でも、それは拒絶の響きはなく、少女はそっと微笑んだ。

奥底で、兔が笑った気がする。

素直じゃないと

…笑った。

番外編く刻の賢者とシロウサギ・6 (前書き)

白兔番外編終了です。  
纏め的なお話しです。

番外編く刻の賢者とシロウサギ・6

少女は、本当に子供だった。

5歳。通りで小さいはずだ。

「貴方も十分小さいでしょ」

少女が笑いながら言う。

小さい？

小さいのか？

「俺はどれぐらいだ？」

俺は何年生きてるのか。俺自身がわからない。

「ん〜と…12歳だね。産まれた日は七月…の、七日」

少女の瞳が俺を射抜くように視線を走らせたかと思うと、俺でさえわからない事を口にする。

魂に刻まれた情報を見ているのはわかるが…本当にわかるんだなとある意味感心した眼差しを向けた。

少女の名は、レイフィニア・エレント・アニスメイル・キアレン  
トウライド・ファーサナリー。

隣国の、姫君。

隣国の姫がどうして俺を知っていたと思うが、影に出来そうな人物の存在はわかるらしい。

魂の波長が合うという理由みたいだが、俺にはよくわからない。

「見えるの。これはもう感覚だから、口では説明し難いんだけどね」

.....

ソレは、俺も少しわかる。

契約をして、少女の魂と接続したからだろうか？

でもそれは多分。

時間が経てば経つ程に実感し、自覚するんだろうな。

でも今は。

白兔と呼ばれる事を拒み、少女を名で呼ぶ事もせず、具現した鬼には文句を言われる日々。

会話になる事が心地よくて、もう少しだけ今の時間を続けたいと、  
物心がついてから初めて他人に甘えてみる。

年下の少女。

でも、本当は俺より年上の少女。

俺と、一緒に生きてくれる人。

刻の賢者と呼ばれる存在と契約してから、5年という歳月が流れた。

「姫さん」

俺は、少女の事を姫さん、と呼ぶようになった。

兎が俺の中に還ってきてから3年。それが馴染んだ頃から俺はそ



う呼ぶようになったけど、兎からも姫さんからも特に意見は出ていない。

だが、3年前に俺の中に還ったはずの兎は、ちゃっかりと召喚獣として表に出るようになった。相変わらず俺の分身らしいが、未だにその自覚はない。お互い様だ。

目の前の姫さんは相変わらず着飾ってた。前は本人の趣味かと思っていたけど、どうやら姫さんを着飾るのは身内の趣味らしい。姫さん自身はシンプルな動きやすい格好が好きみたいだけど、ひらひらも似合ってますよー、って言ったら、姫さんの頬が微かに膨れた。心からの言葉なのに、どうやら俺に褒められるのはまだ慣れないらしい。

言い続けて3年。未だに慣れない姫さんは結構照れ屋だ。

「兄様が好きなのよね。この顔とひらひら。本当に好きなのよ」

そっぽを向きながら素っ気無く。

「いいんじゃないですか。似合ってますよ。ホントに。姫さんは可愛い格好も似合いますね」

満面の笑みで言い切る。

「……まあ……うん。可愛いけどさ。白兎の今の性格も」

姫さんの苦笑い。

でも、これは苦笑いに見せてるだけで、本当は嬉しいって思っただけ。これ、これは苦笑いに見せてるだけで、本当は嬉しいって思っただけ。5年前の俺からは想像つかない変わりよう。

5年前の俺からは想像つかない変わりよう。

その変化が、姫さんには嬉しいって……流石にわかってるよ。

それに、今の俺ならわかる。

あのシロウサギと俺は、確かに繋がった部分があるのだと。

風で乱れた姫さんの髪を梳かしながら、俺は姫さんとの会話を楽しむ。

俺の前には姫さんがいて、横には他の影たちがいる。

その影の名前については色々と思う事はあるが……まあ、仲はいんじゃないかとは思ってる。ある意味、俺たち影は人にはなれなかった存在。

姫さんと会って、俺たち影は人になった。

「それより、今度隣国に行くんですよね。その時も俺たちは大人しく？」

「うん。兄様がなんでもやりたがるから、とりあえず待機でお願いね」

「了解」

最終的には姫さんのお願いは聞くけどね。

まあ、本当は面白くはない。

一体いつの間に俺はこんなにも姫さん馬鹿になったのか。

そう思ってるのは俺だけじゃなく、黒兎が俺の横へと立つのでい

つも通り翻訳して姫さんに伝える。

「……………」

「でも、最終的には俺たちを頼ってくれると嬉しい。ま、俺も同じ意見ですけどね」

黒兎はあまり声を発しない。

それは、出会った時からかわらない。

「姫様姫様、僕も黒兎と同じだよ？」

「最終的には俺たちを頼ってね？ 自分で解決しちゃ駄目だよ」

黄兎と緑兎もそれに続く。

当たり前になった、穏やかな毎日。

本当に、いつのまにこれが俺の日常になったんだろつな。

俺の眼に暗い影が宿ると同時に、黒兎が俺の頭を小突く。

「あ？」

「……………」

「あー。ったく、わかってるって」

ちらつと姫さんの方を見たら、笑ってた。  
黒兔に小突かれてる俺を見て。嬉しそうに。

……………。

まあ、今の俺は、姫さんが笑ってくれればいいけどね。

それが俺の幸せで、俺の日常。

## ある意味運命の相手・1

知識はあってもね、全能な存在じゃない。

それぐらいは自覚してる。

だって、知識だけあってもそれらが人に当てはまるわけじゃないから。

生きてきた年数だけは長いけど、生き続けてしまえるから、どうか、人とは距離を置いたりなんかしてね。

本当は影という存在だって、作ろうと思えば作れたし。

それなのに、今までは王族に生まれなかったから契約なんかしなかった。

でも、レイとして産まれて。

なんとなく。

影を探した。

このままだと兄様が勝手に探して影にしちゃう可能性もあったんだけど、そんな相手とは魂の契約なんかしないから、私の素性がばれるという事はないけど。

うん。

手放せなくなりそうだね。

ちよつと怖い。

白兎たちがいる生活にすっかりと慣れちゃった私は、この身体を返して生まれ変わった後の心配までしちゃってね。

そうだったら、流石に契約は切らなきゃダメだろうし。

私自身、何処に生まれ変わるか　なんてわからないし。

そんな事を考えてたら、妙な圧迫感を感じて顔を上げてみた。

「……………」

黒兎の痛いぐらいの眼差し。とりあえず笑みを浮かべてみる。

白兎相手だと、こんな表情を浮かべたら迷わず小突きにいくんだけど、流石に私にそれはやらない。

ん。

でも撫で回し攻撃がきた。

そつくるようにしたのね。

いつもは優しく優しく撫でるといふより触れるんだけど、結構グ  
リグリとした感じ。

わかったわかった。こんな愛想笑いなんて浮かべないから、と私  
はいつもの表情に戻した。

黒兎は手を離れたけど、何処か名残惜しそうな視線を向けてくる。

…気に入ったの？と思ったけど、それは聞かずに本題へと移る。

「ねえ、黒兎。白兎は何処に行ったの？」

んーん。黒兎で不満なわけじゃないの。ただ、エアルの王子様が  
なーんか企んでる最中にね、白兎が私の傍から離れる事が疑問なだ  
け」

白兎は、私馬鹿だと思う。

契約したての頃は考えられなかったけど、何か吹っ切れた後は  
見事に私を猫可愛がりするようになった。

それは、気のせいじゃないはず。

その白兎が今の状況でいないのが、不自然に感じちゃうだけ。

「……………」

首を傾げた後、にっこりと笑みを浮かべる黒兎。

「言う気がまったくないのね。黒兎……貴方も、気に入らなかったの？」

シーファの事。

尋ねてみたら、迷わず頷かれた。

しかも、姫様、何を今更言ってるんですか？愚問ですよ。と、目で語られた。

「声を出しても大丈夫よ」

今は、私しか居ないし。

「……………」

黒兎は困ったように視線をさ迷わせたけど、その後は私をじっとみたまま、滅多に発しない音を出した。

「姫様。俺たちの、姫様。俺たち、アレは、いらないますよ」

わーい。

シーファの事がアレ扱いになっちゃった。

まあ、気にしないけど。



「その辺りは国の関係だからなんとも言えないけど。声、少し掠れてる。後で薬湯を作るから飲んでね。」

あ、先に喉飴ね。はい、口開けて」

結婚とか、そんな事はあんまり重点置いてないから、興味ないのよね。

だから黒兎が気にするほど、私には重要な問題じゃないけど……うん。言わないでおこうと決めた私は、素直に口を開けた黒兎に、喉飴を贈呈する。

舌の上に置くように飴を口の中へと放り込むと、黒兎の顔が綻んだ。

「うん。ミントの味」

ミントが好きな黒兎専用喉飴。袋を渡すと、お礼を言っ受取る。

「私に黒兎の声は効かないから、遠慮しないでね」

その際、お願いも忘れない。

黒兎は声の事で色々あったから、滅多な事では声を出さなくなっちゃってる。

前に怖いって言ってたけど、今では筆談で慣れちゃったのかも。無理強いはしたくないから、あくまでお願いだけだね。

「……大丈夫。姫様と話すのは好きだ」

「うん。ありがとう」

黒兎と出会って4年。白兎と同じく随分慣れてくれた感じ。

……って、白兎の行方を聞いたのに脱線しちゃった。  
でも答えなさそうだよな。

どうしようかと頭を悩ませたけど、ちょっとセコイ聞き方をする  
事に決めた。

「白兎は、今この国にいる？」

それに対しては、頷く黒兎。

「じゃあ……シーファは自分の国にいる？」

「……………」

無言。

ああ、いないんだね。

私に嘘はつかない私の影たち。

先日から感じてる嫌な予感と、白兎が言った言葉。

そこから何となく。なんとなくね。ふと思っちゃった言葉を口に

してみた。

「ねえ、黒兎。白兎が私の影武者をやっちゃったりしてないよね？」

目を細めて、微笑まれた。

「流石は俺たちの姫様」

言葉のおまけ付きで。

何やっちゃってるのかな。

怒らないけど、そんな面白い事は教えてよ。

そんな批難めいた眼差しを向けてみたけど、黒兎はまったく効果がなく、寧ろ笑みを濃くされた。

「姫様。アレとは、会わなくていい」

「んー。壁に激突しそうになった事、怒ってる？ それとも抱き上げられた事？ 告白された事？ 断ったら強く腕を回された事？」

「全部。姫様じゃなくて、アレに」

あー。全部なんだ。そっか。

相変わらず、私の影たちは過保護だと思いつつ、しょうがないからおとなしく黒兎の煎れてくれた紅茶で喉を潤す。

苺の紅茶。

甘酸っぱい感じが、好き。

「ねえ、黒兎。黄兎と緑兎は？」

一応確認の意味も込めて聞いてみた。

「陣を組んでる」

.....

それはちよつと、と、表情が強張る。

あの2人の陣は、効果は様々あるけれど。

小さな効果で良いなら一人の方が効率がいい。

2人が陣を作成するっていうと、大掛かりなものが多いのよ。

私が言うのもなんだけど、結構破壊的な陣も多くてね。

それは私の得意とする攻撃系魔方陣の影響を受けたからなんだけ  
ど。

強張った私の頬に、黒兎が優しく手をあてゆっくりと撫でる。

「姫様は、何も心配しなくていい。俺たちが、勝手にやっってる。やりたいんだ」

心配は別の意味の心配でね。

行動を束縛するつもりもないんだけどさ。

「姫様がアレを好きなら、止めるけど。アレより俺たちの方が大事だったら、止めない。止めたくない」

あ。

と、声にならない声をあげた。

こうなった黒兎は、止まらない。

私が本当に止めない限り、止まる気は無い。

「怪我はさせないでね。精神的にも負わせちゃダメだからね。それを踏まえた上の程ほどだったら……いいよ」

うん。勿論シーファより、皆の方が大事だよ。

だから、皆もムリしちゃダメだよ、と言葉を紡いだけど。

けどね。

この段階になって、私は漸く白兔の思惑に気付いた。  
遅いって反省したくなっただけど、まあ、仕方ないかと切り替える。

黒兔のこれに、私はある意味弱い。

今回の場合、白兔の姫さん大好き攻撃や、黄兔の甘えん坊攻撃や、  
緑兔の引っ張り攻撃よりも、黒兔のコレの方が効果がある気がする。  
だって、言葉に詰まるもの。

黒兔はそんな思惑なんかなくて、白兔のチョイスだというのは知  
ってるけど。

やられた感じがする。

そんな中、突然大きな音が鳴り響いた。

耳がキーンとなる程の大きな、音。

大きすぎて、それが声だとわかったのは耳の痛さが収まり始めた  
頃。

俺は、レイフィニア・エレント・アニスメイル・キアレントウラ  
イド・ファーサナリーを嫁にするっっ！！！！！

惚れたから、結婚を申し込む！！！！

影武者なんかで、俺が諦めると思っつなよっつっ！……！！

「邪魔な、執念だな。白兔の影武者がばれるなんて」

上の方で舌打ちが聞こえたけど、とりあえずそれはスルー。

でもね。執念っていうのはちょっと同感。

どうやったら私を知らない人間が、白兔の演技を見破れるのよ。

始めっから私が表に出てた方が穏便に済んだのかな？なんて考えが過ぎるけど、即座に否定した。

なんか、私が表に出ても穏便に済まない気がするし、尚更酷くなりそう。

「姫様。やって、いい？」

黒兔の物騒な言葉。

「ダメ」

ああ。どうしよう。

黒兎にストップをかけたけど……黒兎同様他の三人や兄様の表情を思い浮かべ、私の口からはただ、溜息が漏れる。

どちらかというところ、シーファよりもそっちの方が問題になりそう。

眉間に皺を寄せ、私は改めて実感していた。

あの宰相の血族は碌なのがないと。

心底思ってた。



## ある意味運命の相手・2

魂に刻み込まれた存在があった。

きつかけは、先祖が残した日記。

その先祖は、元々はこの国に使えた宰相だった。国王とは親友という存在らしく、彼を支えるのに不満はなく、生きがいさえ思っていたらしい。

だが、先祖は、生きがいだったはずの国王の血筋を引きずり落とした。

彼の代でそれは叶わなかったが、彼の孫に当たる彼に似た存在は、彼が残した計画を忠実に実行し、この国の国王となった。

ただ、彼の孫の手記にはこう書いてある。

奪ったというより、譲られたようだ、と。

その言葉が示す通り、国民から何の不满もない国王の血筋から、自分の先祖へと国のトップが替わった時に混乱はなかったらしい。今の自分には想像さえつかない。

孫が彼から何を聞いていたのか。

それは、彼の血筋にあたる自分にもわからない。

ただ、彼の日記には、とある女性の事が書かれていた。  
女に狂ったといえはそれまでだが、彼の日記に書かれた女性は印  
象的だった。

銀と、翠と、碧の色彩を持つ存在。

本来の爪と牙を隠して、艶やかに微笑む。

彼女は、還ってくる。

彼女がわかるように、迷わないように標をたてておこう。

その為に、国を、手に入れる。

それは彼の決意だったのか。  
その彼の決意は、自分の胸にストーンと落ちてきた。

銀と翠と碧。

見失わないように。

見落とさないように。

彼の変わりに、自分が彼女を手に入れよう。

彼女が本当に還ってくるなんて保証はないのに、それなのに確信していた。

彼女は還ってくるよ。

そして、見つけた。

それなのに、彼女への道のりは果てしなく遠い。

「で、その王子様なんの用かな？ 特に外交の申し入れもなかったように思うけど」

微笑んでいるのは兄様。

人当たりの良さそうな笑顔に見せかけといて、内心はそれとは正反対。寧ろ極寒の地の如く吹雪が吹いていると思う。それにシーフアも気づいているのか、兄様の笑顔には取り合わずに悠然と笑みを浮かべて見せた。

「まさかあの時の魔法を笠にきてここまで来るとは思わなかったけど、まったくもって歓迎なんかしてないよ？」

あのふざけた言葉も何？ 僕の可愛い妹を嫁に欲しいだなんてそんな身の程知らずも良い所の厚顔無恥な己を恥じるためにさっさと国に帰ればいいのに。

帰れないなら送ってあげようか？ 影が遠慮なく返品してくれるけど寧ろそれがいいよね。そうしょっか」

兄様の長台詞。

ちなみに、私はというとこの場でソファに腰をおろしてるわけでもなんでもなく、黒兎に連れてきてもらって、隠れてみていたりする。

シーフアの執念を感じ取った黒兎は本当に嫌がったんだけど、せめて見るだけでも、という私の願いには逆らえず、妥協した結果がこれだった。

今の体勢はというと、黒兎に抱えられるように隠し部屋で寛ぎつつ、水晶にこの光景を映してティータイムを楽しみながら見ていたりするんだけどね。

黒兎が私を抱える理由は簡単。私の気配を消す為に覆い隠すように抱きしめてる。

部屋が快適温度なので、その辺りは気にならないけど、シーフアが何かを言う度に黒兎の機嫌は急降下。

兄様の隣で私の真似をしてる白兎の機嫌も最悪的。

この分でいくと、黄兎と緑兎の機嫌も似たようなものだろうと思う。

で、極めつけは兄様の長台詞。アレは、相当きてる証拠なのね。

既に、外交を穩便に済ませようなんていう気は更々無い。兄様の言葉と同時に、黄兔と緑兔が転送陣を展開してるから、強制退去させる気満々なのよ。

私はある意味身動きがとれない状態だから事の成り行きは見守るだけで、シーファを助ける気はないけど。

なんだろう。

部屋に置いてある水晶。この部屋の水晶との対になってるやつね。それをじーっと見てる気がする。

「…姫様。やっぱりアレ、記憶消そう」

あ、黒兔も気付いていた。つまり私の勘違いではないんだけど、黒兔の妥協に私はついつい頭を撫で撫でとしていた。

前は問答無用で消そう、の一言だったしね。

「良い子良い子」

「……姫様。どうせなら、俺が撫でたい」

「ん。そうだね」

聞いているようで聞いていない私の言葉に、黒兔は軽く息を落とすけど、諦めてくれたみたいで私のされるがままになっている。

黒兔の膝の上で方向転換して、黒兔を撫でているから結構距離は近いけど、いつもの事なので気にせず撫でていると、水晶の端が光ったような気がして視線を水晶に戻した。

「…何、あれ？」

シーファが何かをしたのはわかるけど、肝心のシーンを見てないからいまいちよくわからず、黒兔に聞いてみる。

「無詠唱。探查。でも、ここは弾いた」

「……執念だよな」

この部屋の存在はわからないはずなのに、と、肩を竦める私。黒兔は色々と思う事があり過ぎて逆に言葉がないみたい。

口を固く閉ざし、水晶に映るシーファを射殺しそうな眼差しで見

つめるだけ。

他の影の様子が気になった私は、とりあえず他の水晶で映してみただけど……黒兎と似たような表情を浮かべて物騒な呪文を唱え始めてた。

私や私の影は、大体無詠唱で呪文は発動出来ちゃう。陣を組む時は魔力の流れをコントロールするだけだからやっぱり無詠唱。

でも、時々、ちゃんと呪文を唱える時がある。

それは、針の穴に糸を通すようなコントロールを重視する時で、いつもは初級の魔法をぶっ放す程度なだけど……見た所、略さずしっかりと対個人用の上級……ううん。最上級の呪文を歌でも歌うかのように口ずさんでいた。

ああ。結構ヤバイ。

どうしよう。なんてちょっと困っていると、シーファの向かい側で兄様が不敵に笑ったのがわかった。

「兄様??」

「変質者だね。そんな事をやってると嫌われてしまうよ？」

ああ、もう嫌われてるから姿を現さないんだよね。ごめんごめん。可哀想に。初恋だった？初恋は実らないって言われるけど、実らない所か嫌われてその姿を見る事さえ叶わないなんて……悲しすぎて涙が出ちゃうよね」

兄様の笑顔が、輝いて見えました。

「じゃ、今回はおとなしく帰ろっか？」

そんなにしつこく追いかけると、ただでさえ嫌われているのに更に逃げられてしまうよ？ ひよっとしたら遠くの国へ嫁いじゃうかも。

そうだったら…どうしよう？ 原因になった相手を僕は許せないかもね」

綺麗過ぎる兄様の微笑み。

これには、流石のシーファも圧され気味。けれど見ていて気付いたけど、圧されてるけど負けてはないのよね。  
やっぱりしぶとい。

「俺は会って連絡交換するまで帰らない！ これは俺個人の問題であって国は関係ないけど…：…そうだな」

ここで、シーファが言葉を区切る。

なんだろう？ この後の言葉が気になった私は、黒兎の膝の上から水晶に近づくと為に身体を乗り出すようにシーファの言葉を待った。

「でも、今の俺の国は滅ぼしたくないだろ？」

元々の血脈の行方を知ってるのは、俺だけだし」

「やられたっ」

シーファの言葉に私は叫んでいた。

絶対、私の正体に気付いてる。これは、確定。

「黄兎、緑兎、詠唱を止めて戻ってきて。白兎は…：任せるね」



白兔に伝え、私は自室の奥へと籠る。

その後、私が見ていなかった場所で白兔は、私の姿で悠然と微笑むと、

「姫さんを付け狙う変質者は性質が悪いと思ってたけど……脅迫ね。ふうん……」

淡々と白兔の口から紡がれる言葉。

詳しく事情を知らない兄様は、黙って白兔の言葉を聞いている。

私に出会う前の。ううん。それ以上に無機質な表情を浮かべ白兔は私の姿ではなく、本来の姿でシーファに对峙すると、もう一度口をゆっくりと開いた。

「どっしてくれようか」

部屋の気温が一気に下がり、尋常じゃない圧迫感を感じさせる白兔に、シーファは足を一步前へと踏み出す。

「望むところだ」

シーファも負けてはいなかった。

どうしてそこで負けないのか。

圧倒的な実力差に折れないのか。

きっと宰相が何かを残したんだと思うけど、あの腹黒宰相の考える事なんて、今の私にわかるはずもなかった。

ある意味運命の相手・3

「母様。母様。大好き」

「私も大好き」

「僕もだよー。大好き！」

子に恵まれ、沢山の子供に囲まれながら一緒に生きてきた。  
乳母に任せるなんて事はせず、全部自分で育てた。

フォローは沢山してもらったけど、それでも子供を手放す気なんて全然なくて、それは当時の旦那も協力してくれた。

その子たちの子孫。が、まだ生きている。

宰相は殺さずに生かしておいたらしい。

「死んでるとは思ってなかったけどね。だって、あれでも一応血に忠誠を誓ってたから」

「ふうん。でもさー。国を乗っ取っちゃったんでしょ？ それなのに殺さないの？」

黄兔の言葉に、私は黒兔に調べてもらった資料の一文を指差し、「これ、血なまぐさい事が一切ないの。多分裏で何かあったと思うのね」

死亡者0名も文字を改めて見る。

調べれば調べる程、どうして子孫が国を手放したのかわからない。そして血に忠誠を誓っていたはずの宰相が、何故乗っ取りを計ったのかも解らない。

寧ろそろそろ面倒だから、力づくでやっちゃいたいなあ、なんて下から皆を見上げてみると、迷わず頷かれた。

気持ちは、私と大差ないみたい。

「姫様。黄兔と俺の封印の一部解いちゃって。そうすればこの星全体を覆う事が出来るし。いつきに探査かけてやった方が楽だろ」

「そうだねー。僕と緑兔の魔法の方が適してるよ。黒兔には補佐してもらうけど…白兔は姫様から離さない方がいいかも。所構わず衝撃波を放ちそうな感じだよ？」

緑兔と黄兔のアドバースに、私は悩みつつも頷いた。

だって、本当に撃ちそうなんだもの。見つけるまではおとなしくしてもらって…後は兄様たちに私の説明をして。

って事を考えてたら気が重くなって、つい溜息なんかをもらしちやったら影たちが一斉に私に視線を浴びせた。

あ…うん。心配かけるよね。この状況で溜息は。

悪気はないんだけど。でもね。ちよっと面倒だなって思う私がいるのも事実で。

今すぐ旅立ってしまったらかな？

なんて、少しだけ考えてた。

「姫様。俺たちは、姫様とずっと一緒」

「そうそう。魂の絆だよ？」

「離してあげないよー」

私の思考に反応して、三人が次々に言葉を紡ぐ。それは、私が不安に思っていた事の一つ。

例え、この器でなかったとしても、ずっと一緒。  
不老を受け入れるって事。

口で言う程簡単ではない事実だったけど、私は嬉しくて無意識に  
笑みを浮かべていた。

それが、レイの笑みなのか、私本来の笑みなのかわからないけど、  
嬉しかった事だけは本当。

「とりあえずはアレをなんとかして、穩便には済ますよ。」

姫様、レイ様の兄様を気に入っているでしょ？ だから、面倒が  
らないで。まだ…ね」

黄兎の笑みに、私は頷いて見せた。

そうだね。私もそう思う。

私は、兄様の事が結構好き。シスコンだなあって思うけど、それ  
が原因で行き遅れたって私は気にしないもの。

「白兎」。シーファは客室に放り込んで、兄様と来てくれる？」

思い立っただらすぐ行動。このままで行くと遅かれ早かれ兄様たちに私の魂の正体はばれるだろうから、シーファから言われる前に報告ね。

白兔に繋がった状態で、兄様やシーファの状況を確認する。

うん。シーファは問答無用で客室へ。ベットのの上に転移しただけでも今の白兔にとっては良心的って言えるかもしれない。そしてそのまま兄様の足元に陣を出現させ、向かう場所はこの部屋。

私の目の前のソファー！。

白兔の視界がぼやけ、目を瞬いてみると目の前には私の顔。ここで視界を自分のものへとなおし、改めて兄様と向き直る。

何か色々と思うところがあるような表情。どこから説明しようかになって思っていたら、ソファーに深めに身体を預けた兄様が先に口を開いた。

「レイはさ…前世の記憶とかある？」

戸惑いながら、でも確信に満ちた表情と声。白兔に確認してみけど、シーファからはそんな話は一切出てないみたい。

兄様が自力で考えたんだろうけど…さすが兄様。

「うん。ある」

嘘はつかずに、素直に言葉を紡ぐ。

本当は前世なんて可愛い記憶じゃないけれど、その辺りはどうやって説明しようかまだ迷ってる。

「そっか。その前世関係者なんだね。あの王子様は。今のレイには関係がないのに、何をどうやって引きずって、しかも人質までとったのかなあ…本当に性質が悪いね」

「…あれ？」

なんかあっさりし過ぎてる兄様に、逆に私が戸惑う。

だって、これって結構普通の人間にとって衝撃なんじゃないのかな？

私の影を見てたらわかるでしょ？ 影が人外なら、主はそれ以上だって。そんな前世を持つ存在を不気味に思わないのかな？ なんて疑問がたくさん浮かぶ。

「俺の大好きなレイはレイだよ。見た目も中身も大好きなんだから、前世の記憶があるうとその前が何であろうと桁外れの力であろうとも、そんな事は些細だよ」

「……」

兄様ってすごい。些細な事で済ませちゃった。

ちょっと見縊っていたのかな？

シスコンだから私が好きだったんじゃないかなかったのね。

「所で、名前とかある？ レイの魂の」

「うん。あるよ。刻の賢者って呼ばれてる」

ここまできたら、包み隠さずご報告。

やっぱり、兄様の表情は変わらない所か、今まで以上に愛しそう



な眼差しを向けられた。

なんだろう？ このかなり度を越えた眼差しは…？

兄妹愛が振り切っちゃったのかな？

振り切った先に何があるのかなんて知らないけど。

「流石俺のレイ。かつこいいね」

「ん。ありがとう」

褒められたと思った私は、お礼の言葉を口にしたけど 影たちが凄く微妙な表情をしたのを見逃さなかった。なんとも形容しがたい、なんとも言い難い表情。

何？って問いかけようとしたら、それより先に兄様に抱きしめられる。

「レイ。早く解決して、また、いつもの日常に戻ろうね」

相変わらず兄様は微笑んで、やっぱり私の影たちは無言のまま姿を消した。

ある意味運命の相手・4

今日は静かだった。

本当に、久しぶりに、平和だった。

兄様が私と一緒にご飯を食べて、一緒に本を読んで、一緒に魔法の勉強なんかをしたりして。

まるでシーファと会う前の日常に戻ったかのように、穏やかな日だった。

「あの王子様の切り札が、切り札じゃなくなっただんですよ」

満面の笑みで教えてくれたのは白兔。

宰相が残した私への対抗策が全て、私の子孫に破られたみたい。

「へえ」

なんて素っ気無く答えてみると、白兔がおやつ準備をしながら口を開いた。

「黄兔と緑兔の陣を発動させるまでもなく、相手から接触してきたみたいですねー。どうも、あの王子様や宰相様の計画を逆手にとったみたいですよ」

機嫌よさそうに何種類ものクッキーを並べた皿をテーブルの上へと置き、それだけでは飽き足らずに一口サイズのケーキを並べた皿も置く。

後は軽食とかなんとか。

「皆、一緒に食べるんだよね」

最近慌しかったから、影たちとご飯が食べれてないのよね。

それは寂しいから聞いてみたら、勿論、という答えが返ってきた。じゃあいつか、と、私は白兔のお手伝いをしながら紅茶の準備を始める。今日の紅茶は何にしようかな。何かおめでたい気がするから、あのお茶が良いかも。

と、私は慣れた手つきで秘蔵の茶葉を出す。

「姫さん気合入ってるね」

「うん。なんかおめでとう、ありがとっっていう気がするから」

「そっか」

お湯を注ぐと、温まった茶葉が開いて花がお湯の中を自由に動き回る。そんなお茶。味もシンプルで美味しくて、こっぴつ甘いお菓子の子の時はいいよねって思う。

「そうそう、これは黒兎の新作ですよ」

八等分に切り分けられたホール。生クリームが綺麗にデコレーションされていて、ケーキを飾るのは季節のフルーツたち。

その隣を陣取るように並べられた手の平サイズのタルト。気合十分な黒兎の新作に私の目は釘付けになってしまう。

甘いものはね、好きなのよ。

「黒兎は本当に器用だよね」

寧ろ極められるんじゃない？

なんて目を向ければ、照れくさそうに黒兎が控えめに微笑む。

うーん。可愛い。影たちの中で一番身長が高くて、体格がガツシリしている黒兎だけど、なんとなく一番可愛く見えるのよね。

一般的には黄兎が一番美少年っていう感じで可愛いらしいけど、黄兎の背後には黒いモノが見えるからかな？

純粹さや天然さじゃなくて、計算づくって感じの仕草。だから、天然な黒兎が一番可愛いつて思っちゃうけど、影たちはそれぞれ可愛い所があつて…と、惚気そうな私の思考を白兎が歯止めをかけた。

「姫さん。一番可愛くてかつこよくて俺が大好きなのは、姫さんだよ」

「かつこいいもなんだ」

「うん。かつこいいよ」

白兔の蕩けそうな笑みに、私は疑問が一杯で素直に頷く事が出来ないでいる。

褒められているんだけろうけど、なんだろう？

一応今の私は10歳の美少女っていう認識だったんだけどね。そうか、自分じゃ気がつかないだけで結構凛々しいのかもしれない。んー。認識の違いって結構大きいかもと、私はそんな事を思った。白兔たちは苦笑してたけど。

美味しいご飯にデザートに大好きなお茶を飲んで満足な私のお腹ぼんぼん、とさするようにお腹を叩いていると、少し先の柱に佇む黒い影に気づいた。

シーファだ。

油断したかなあ、と思ったけど、明日帰るとかいう話しだからいつか、と切り替える。

思えば、こうして対峙したのはエアルで初めて会った時以来。あの時も兄様が間に入って、シーファと私の会話はたかが知れている。

シーファからしてみると、待ち望んだ瞬間なのかもしれない。

「どうしました？ 客室は別のフロアですよ？」

可愛く首を少し傾げ、口元に手をあて言葉を紡いでみる。

「随分と焦らすんだな。俺の先祖にもそんな感じだったか？」

さて、随分わかつちやつてるみたいだけど、どうしようか。

呼べば兄様や影たちが駆けつけてくれるのは知ってるけど、保留ね。

皆優しくて過保護で、甘やかしてくれるから。

嬉しいけどね。

10歳にしては大人びた表情を浮かべ、改めてシーファに向き直る。

「先祖つて宰相の事でしょ？ 当時の私の旦那様の臣下だったけれど、喧嘩友達でもあったね。私の認識はそうだけど、別視点では違った？」

力のある存在に惹かれる、っていう人間たちを沢山見てきた。

私が刻の賢者を名乗っていた頃、連日連夜人間たちが押し寄せてきた。穏やかな気分になって帰ってもらったけど、私の側近たちは

いい顔してなかったね。

今思えば、だけど。

「ああ。違ったみたいだな。俺も彼から直に聞いたわけじゃないから詳しい事は話さない…が、俺がアンタに惚れた事に先祖は関係ないさ」

瞳の奥に宿る光には真摯なものと、後は僅かな狂気が宿っている。紛れもない執着の色に、私は逸らすことなくシーファを見つめた。

「そう？　今の私は10歳の子供だよ。まったく…唯のロリコンに見えちゃうよ」

兄様とは兄妹だからとりあえずセーフで。

「漸く見つけたんだ。抑えなんか効くはずないだろ？　それに、手に入れないと搔っ攫われそうだしな」

既に開き直っているのか、シーファに迷いはない。

「でも帰るんでしょ。私の子孫たちを抑える為に…ね」

シーファにとって予想外の出来事だったんだろうね。その表情は苦虫でも噛み潰したかのように眉間にこれでもかという程皺を寄せ、力任せに頭を掻いている。ただでさえ癖っ毛のシーファの髪が、それによって更に様々な方向へと髪が飛ぶが、私が気にするはずもない。

「ああ。まったく…とんだ切り札だ。お前に執着したのは、俺の血筋だけじゃなかったみたいだな」

あれ？

今意味ありげな、気になる事を言われた気がする。

そう思っただけが顔を上げると、シーファが舌を出していた。

「教えてやらん。俺の事でも気にしてる」

「教えてやらんって、どうせすぐ接触してくるんでしょ？」

理由が向こうから寄ってくるなら、私は何もしないよって呆れながらに呟くと、シーファもそうだな、と力なく頷垂れた。相当参っているらしいシーファだけど、私は甘い顔はしないでおく。だって懐かれたら面倒だし。

「これで甘やかすようなら直ぐ飽きたんだがな」

シーファの小さな呟き。

どうやら逆効果らしい私の態度。

「お前の態度は俺の血筋のツボなんだよ」

付け足された言葉に、私は言葉を失った。

あのムツツリ宰相も、ツボだなんて思ってたのかな？

あー……無理。想像出来ない。

私はさっさきと思考を放棄すると、気になっている話題を続ける。



「子孫と遊びにくるなら、歓迎してあげるよ」

そう。子孫とね？

「ああ。このままだと来る事になりそうだ。それまでにあのシスコ  
ンと過保護集団をなんとかしとけよ」

狂気は宿ったままだったけど、何処となく落ち着いた感じのする  
シーファ。

シスコンはもちろん兄様で、過保護集団は私の影たちだろうけど。

「無理。私が離れられないもの」

微笑んでおいた。

二度目の碧い星。

子孫といい宰相の血筋といい、私の魂に絡みついた執着はまだ、

解けない。

## 久しぶりの邂逅・1

その日の私は、夢を見てた。

この星の、過去の事。

「ねえ奥さん。無理しちゃダメだよ？ 身体が弱いんだから」

「大丈夫よ。これぐらい。土いじりだって好きだし、物作りだってもっと沢山したいし」

ベットの上、私は背にクッションを置いてもらって楽な姿勢で旦那と話してた。

旦那がこういうのには理由がある。

夏の暑い陽射しの中、ちよっと頑張ったら倒れたのだ。

魂とは違い脆弱な身体。でも、それは刻の賢者の魂の所為じゃない。この身体は産まれ付き身体が弱く、本当は産まれられないんじゃないかなと思ってた。

私の魂が宿ったおかげ、というのは言いすぎかもしれないけれど、それでもっているのは多分気のせいではないはず。

今の環境は結構好きだから、魔力は使わず身体に負担は掛けずをもっとうにのんびりと過ごしてる。使ったらそのまま死んじゃいそうだし。

それでも、多分あんまり生きれないんだろうなあって思うけどね。

「うん。わかった。寝てるから」

きゆううん、と。捨て犬よろしくとばかりに潤んだ瞳でジツと見られ、私はあっさりと折れた。

物語に出てくる金髪の綺麗な王子様、ではない私の旦那。十分綺麗、というよりかっこいいけどね。髪質はくせつ毛で肩にかかる髪を無造作に束ねてる。色は色素の薄い茶色に黄金色の瞳。無駄な筋肉が一切ないのか細く優男に見えてしまっけど、その力強さはマツチヨには劣らない所かマツチヨを陵駕すると思う。

この固そうなツンツンとはねた髪を触ると驚く程柔らかくて、この手触りが好きでよく触ってた。

照れる所か抱きしめ返して甘い言葉を囁く旦那は、生粋の誑しだと私は思っちゃっけどね。

「ねえ…なんか失礼な事考えてない？」

「うん。考えてないよ？ まったくこれっぽっちも考えておりませんとも。」

そんな事より、ちゃんと寝てるからあの子たちの様子見てきて。はりきってたから心配なの」

「そんな事って……いや、見に行くけどね。奥さんに似て無鉄砲な所がある子たちだからさ」

「貴方似よ？」

遠慮なく言うと、肩を落として部屋を出て行く旦那。

だって、無鉄砲は私じゃないもの。

はあ…今日はホントにちょっと疲れてるかも。

冷やした布が気持ちいいなあ。

でも子供たちと遊びたいなあ。

可愛い。旦那に似ててくせつ毛で茶色に黄金の色彩で。

私に似た所はまったくくないのは当たり前だね。

この外見は私の魂に刻まれた私だけのモノ。誰も受け継ぐ事は出来ない。

ちやぷちやぷと、机の上に置いてあった桶の水で布をひたし、適度に絞って額の上にのせる。

ちよっと寝ようかなあ……。

「寝るから出てっしてくれない？」

相変わらず失礼な。

皇太后の寝室に魔法で侵入するとは。

宰相の魔法には防壁は発動しない設定だから、入りたい放題なの

は知ってるけど。それに態々魔法でこなくても扉から入ってくればいいのに。

全て表情に出してた所為か、宰相がやっぱり眉間に皺を寄せて私のベットへと近付いてきた。

「相変わらず可愛げのない女だな」

そんな事を言いつつ、眼差しには不安や心配が含まれてて調子が狂う。

「熱が高いな」

「そうみたいね」

伸ばされた指先が私の頬や額を掠める。

私と宰相の体温が同じくらいだから、熱いとわかるのよね。

「前より痩せたな。最近食も少ないと聞いた。死ぬ気か？」

ストレートな宰相。

まあ、正直そんな所は嫌いじゃない。

「さあ？ 頑張つて生きてるけど、心臓は他の人よりもたないかもね」

かも、じゃなくて、もたないけどね。

「15歳…か」

唐突な話題転換。私の子供たちの話し。

「大きくなつたね」

私の子供たち。一生懸命学んで学んで、下の子なんて医学の道に進んでしまった。上の子は王になるって決めてるみたいだけど、協定は結ばれてるっぽいよね。

どんな内容かは流石に知らないけど。

私の体の弱さが関係してるかも。なんて思ってる。

「お前に似なくて良かったな」

宰相は捨て台詞を残して、魔法で部屋を出て行った。

一体何しに来たんだか。

それに、嫌味にならないし。

私に似てたら嫌よ？ こんな自由人は私だけで十分だし。

「ふぁ……無茶、してないかなあ」

子供2人と迎えに行った旦那。

両方とも無鉄砲だから、やっぱり心配だったけど睡魔には勝てず、私の意識は沈んでいく。

十分幸せ。  
十分生きた。

そろそろ、この身体を開放してもいいのかなあ、なんて寂しい事を思いながら。

眠りへと誘われる。

「レイ。起きて。風邪ひいちゃうよ?」

「……………」

起こしてくれた声の主は兄様。

ん。そうだった。今の私はレイちゃんだった。

寝ぼけながら目を擦っていると、兄様の手がそれを優しく止めて濡れた布を目元へとあててくれる。

気持ちいいなあ。



「部屋に行こうか？ 眠たいなら眠った方がいいよ。ね。レイ」  
頭を撫でられ、混濁した私の意識は更に引きずり込まれる。  
夢なのか現実なのか。

鮮明すぎて境界線がおぼろげになるんだけど、眠たくてまあ、いつか。なんて気分になってくる。

このまどろみが気持ちよくてね。

「……」

無言のまま頷くと、兄様に抱き上げられ歩く振動が伝わってきた。

んー。眠い。寝てしまおう。

そう決めた私の脳に、声が響いてくる。

兄様には聞こえない心話。これは、私の血を引いた存在だけが出来る、私への連絡方法。とは言っても無差別じゃなくて、居所がわからなかったり顔を知らなかったりすると使えない。まあ、影は例外だけだ。

つまり、こうして声が響くって事は私の子孫が私の居場所と顔を確認した証拠。

シーファを軽く手の平の上で転がしているイメージに、なんとなく私の血筋の印象が変わってきた気がする。

前の旦那がのんびり屋さんだったから、おっとりさんなイメージだったけどね。でも、よくよく考えてみると、後手に回るって事だけはなかったのよね。

私にはいつもののんびりと後手後手って感じだったから気にしなかったけど。

眠らないで。それは過去だよ。境界線は保って。逢いに行くから

波紋を広げるようにゆっくりと私の中に響く声。

俺たちを見て？ 過去じゃない、今の俺たちを

なんかおかしな事を言われてる気がする。

過去は過去で今じゃない。

でもその言われ方はまるで……過去も今も同じ存在だといわれている気がして、私は半分眠りについてた脳を覚醒させた。

「（起きたよ。会って、いつ頃逢いにくるの？）」

兄様の腕の中で身動きを一つ。

眠ってるって思ってくれてるのか、私を揺らさないようにゆっくりと運ぶ。

直ぐ。そう、直ぐだよ。だから、もう少し待ってて。ね、奥さん？

別の声が脳裏に響く。

けれど私はその言葉に啞然として啞然として……

はい??

ちよつと待った。奥さんって……いやいやいや。だって既に鬼籍の人でしょ?

白兔ー、黒兔ー、黄兔ー、緑兔ー。聞こえるー?

私の脳の一部を読み取って。直ぐ! で調べて。お願い。

この思考は響かせず、私だけの中に留めておく。

姫さん? どうした?? 相当慌ててるっていうか、また何かあったのか?

白兔の心配そうな声。寧ろ心配を通り越して、私を翳らせる存在を全て消すと決めた決意の声。

そういう相手じゃないけれど、今の私はちよつとパニック状態に

陥ってたかも。

この身体で生まれ、影を作って早数年。

前よりも完璧じゃなくなった私は、前よりも動揺するようになった。

「レイ。甘えていいよ。寧ろ甘えて。お願い」

私の動揺を感じ取ったのか、兄様が足を止めて私をジッと見ながら優しく頭を撫でる。片腕で私を持ち上げられ、尚且つ私が楽な体勢を維持出来るって事は見かけに反して力持ち。

「小さな手。小さな身体。小さなレイ。  
急いで大人にならなくていいんだよ」

私の正体を知ってるのに、兄様は私を子ども扱いする。

それが心地よくて、くすぐったくて。

私は動揺して震える指先で兄様の衣服を掴んだ。

やっぱり、前よりも弱くなった気がする。

それはきつと、気のせいじゃないはず…

## 久しぶりの邂逅・2

白兔から渡された調査結果。

私の影たちが秘密裏に動いた時は、誰にも気づかれぬ。それは、この短期間で出会った私の過去の関係者たちも例外ではなくて……

「でも…答えてくれそうだな。聞けばさ」

私の子孫たちのデータの詳細が書かれた紙を机の上へと置くと、立ち上がり背伸びをしながら白兔へと向き直った。

白兔の表情から、その感情を伺う事は出来ない。意識的に無表情にしているんだなあってわかるんだけどね。

「白兔」

うにっとなら顔を引っ張ってみた。

「姫さん??」

それでもまだ無表情を貫こうとする白兔に、

「私たちの前でそれはダメ。なんか面白くない」

と、言葉を漏らした私を抱き上げ、白兔の表情が蕩けるような笑みへとかわる。

「ひーめさん。何？ 俺を喜ばせたいの?? 可愛い事言っちゃって」

先ほどの無表情とは一転、甘やかすような声音と満面の笑み。別に喜ばせる気もないんだけど…

「あはは。無意識ね。うん。姫さんらしいなあ。って事でさっき

の言葉ですけど、俺も思いますよ。教えるんじゃないですか」

「そつだよね。教えそつだよねえ」

先日 of 心話 of 件から影たちに動いてもらつたんだけど、やっぱり私 of 元旦那が転生したつばいんだよね。そうなると、私が聞けばあつさり教えてくれそうなんだよねあ。どうして転生したのか、とか。何かその他色々な疑問とか。

「姫さん of 子孫があ of バカ of 行動を逆手にとつて じゃなくて、元々手 of 平 of 上で踊つてたんですよねー。そう思つとほんのちよつとは可哀想ですね」

晴れ晴れとした表情で言い切る白兎 of 言葉には、説得力 of 欠片もない。

寧ろ、このままシーファがボ口雑巾 of ように利用されて吸い取られて捨てられたとしても、まったく気にしないと思つ。私 of 影たちは。



「所で、シーファの事はアレ、とか。バカ、とかで通じるの?」

私以外名前を言わないよね。シーファの。

「ゴロムでも通じますよ」

「……」

やっぱり清らしいほどの満面の笑みの白兔。

「まあ、大体はアレ、ですけどね」

「…そっか」

兄様に至っては既に存在そのものを抹消している節があるから、

それに比べたらマシっていうのかな。

それとも兄様の態度と比べるのが間違ってるかな。

なんて眉間に皺を寄せると、いつの間にか私の隣に立っていた黒兎に抱き上げられる。なんていうか、黒兎は抱き上げるという行動が標準装備よね。主に私限定だけど。

「姫様。姫様は眉間の皺も可愛い。でも、ダメ」

「……うん。気をつける」

なんていうかさー。

シーファの件があってから前よりベタ甘になったって言うかねー。

ちょっと照れながら黒兎の肩に手を置いて、私は身を乗り出すように白兎を見た。

照れてる私を面白がってるのか、笑みの種類が変わった気がする…

私は一回、わざとらしく咳払いをすると、

「まあ…うん。私が関係者には激甘だから、とり合えず相手の出方を伺う後手後手だけどいい？」

最終的に、元とはいえ旦那さんに危害を加える気なんてないし。

寧ろ私の魂の血筋ではないけれど、自分が産んだ子だから愛着はあるのよね。

「了解。姫さんが甘いのは知ってるから、今更ですよ」

「そうだな。だから、俺たちは、きびしく」

一心了解してくれた二人。

どうしてだろう。なんか腑に落ちないのは…??

とり合えず深く考える事を放棄した私は、黒兎が用意してくれたお茶とお菓子に舌鼓を打つ。うん。いつもの日常。

そんな時、やっぱりというかなんというか、心話が入ったのね。

私の態度で気付いた二人は、残りの2人にも連絡を取って様子を伺ってる。

3日後辺りはどう???

直接脳に届いた言葉はこれ。

まったく、相変わらず挨拶をしない人だな、なんて思いながら私

は今週の予定を思い浮かべた後、了承の返事を返した。

うん。その日は開いてるから大丈夫。

こう見えても、色々な事に手を伸ばしてる私は結構忙しい。私自身は自由でも、周りの人間はそうはいかないからやっぱり私が合わせとね。すると予定なんかはあつという間に埋まっちゃう。

じゃ、3日後。シーファも連れて行くから、部屋準備しといてね。俺とシーファは同室でいいから

「(わかった。一室用意しとくね)」

こうやって話すと、調べるまでもなく私の元旦那樣っていうのがよくわかる。

性格はそのまま。そして私にはやっぱり気を許してるみたい。

「もう終わったよ」

警戒を続ける白兎と黒兎の頭を撫でた後、兄様の執務室へと足をのばしてみる。

3日後っていつのは伝えなきゃダメだし。

それに休憩をとってないだろうしね。お茶の準備をして、それも忘れずに持っていく。まあ、持っていくのは白兎なんだけどさ。

「姫さんはさ…元旦那に会ったらどうする？」

身体に闇を纏わせ、私の隣を歩く白兎。この闇は目くらし効果のあるもので、他者の目からはポットが浮いているようにしか見えなないと思う。

でも、口から漏れたのは不安げな声。

「会ったらどうするって…話すよ。話さなきゃ始まらないし。ちなみに、嫁に行くとかそういうのはまだわからないから」

多分、不安はこれ。

まったく…皆して私が10歳っていうの忘れてるんじゃない？

まだお嬢さんを貰う気も、嫁に貰われる気もないから。

「そっか。姫さんにはまだ早いよね」

「うん。早いよ」

白兔は時々、言葉が混じる。

敬語っぽく話したり話さなかったり。

本当は敬語っぽいのは意識してるんだけどね。だから敬語が抜けてるって事は、結構悩んでるって事で…

「置いてかないから大丈夫。私は、私の影たちが大好き」

多分、一番ね。

口には出さない本音だけど。

「そっか…うん。良かった。俺も姫さんが大好きだ」

なんていうか、子離れ出来てない親と、親離れ出来てない子供みたい。

どちらかというと、親は私だけど。



影たちに恋人が出来た時。

私はどういう態度をとっちゃうんだろう。

「（なんか…面白くなさそうだし）」

今から覚悟しといた方がいいのかな。なんて。

私はちょっと本気で考えてた。

### 久しぶりの邂逅・3

約束の日。

元旦那と、元旦那の右腕の子孫と会う日。

「名前も同じだね」

なんて、調査報告書に視線を落としながら、シミジミと呟く私。  
これから会う元旦那の名前はリーウエル。ちなみに、前も同じ名前。まるで計ったとしか思えないけれど、たかが名前、正直どうでもいいとばかりに私は両足をソファアームへと投げ出した。

行儀は悪いけど、自室だし。

今は一人だし。

まあ、問題ないでしょ、とばかりに私は思考の渦へと立ち向かう。

久しぶりの一人。

考え事には適した陽気。

冷静な私が、私を見つめる。

絡まった思考の糸を解しながら私は私の中心部へと近付き、あっさりと放棄した。

記憶を持って生まれた、という事を考えてたんだけどね。

どう考えても一般人には無理。じゃあ、何で?? と疑問を重ねていくと、10歳の私にはまだまだ早い感じなのね。

魂は数千歳だろうなんて野暮な突っ込みは軽く流してね。しょう

がない。だって精神は肉体に引っ張られるし。

「レイ。百面相してないでそろそろ行くよ?」

コンコン、と扉をノックした後に聞こえる兄様の声。

見てるわけではないのに、どうして百面相してるって分かったんだろ  
う……兄様って時々こんな事があるのよね、なんて無意識に左腕を  
擦りながら、私は扉の鍵を開けた。

見上げて見たものといえば、相変わらず眩しい程の兄様の笑顔。

兄様は、シーファが帰ってから肌が綺麗になってきた。よっぽどス  
トレスだったのね。ちなみに、影同様シーファの事をアレと呼んで  
いるらしい。

アレ扱いでも呼んでいるだけマシなのかなあ、なんてどうでもい  
い事を考えながら、差し出された兄様の左手に、自分の右手を重ね  
合わせた。

手をつないで、一緒に歩いてく。

向かう先は、転送門を潜った先にある応接室。今私が居た部屋は、  
ある一部しか立ち入れない場所にある。影は入れるけどね。考え事  
をするのはそこが静かだからよく行くけど、兄様はそんな私の沈黙  
をあっさりと打ち破る。

これはもう慣れだよな、なんて兄様を見上げてみた。すると、兄  
様の優しい眼差しと視線がかち合う。

どうやら見てたらしい。よく私の手を引いて歩けるなあ、なんて  
関心していると、兄様が冗談っぽく右手の人差し指を口にあて、

「千里眼を持っているんだよ」

なんて笑ってる。

正直、私は笑えなかった。

だって、本当っぽいしね。

そんな事を考えてる、なんて分かってるくせに、兄様は何も言わずに笑みを浮かべているだけ。

流石私の正体に動じなかった人。その神経は半端じゃない。なんて思ってたなら、あつという間に来客が待っている応接室の前に着いていた。

引っ張られているだけだから楽なんだけどね。

兄様に手を繋がれ、足を踏み入れた先にいた人物といえば ……

シーファと、リーウエル若かりし頃。

私のリーウエルのイメージは四十数歳のおっさん。今は二十歳未満。昔、私と会う前ぐらいかも、なんて思う。

「…あれ？ 静か??」

この面子で感動の対面があるわけがなく、かといって誰も言葉を発しないこの状況に漸く気づいた私は、一番近くにいた兄様を見上げた。

が、ちよびつと後悔したのね。

最近では珍しくない、すばらしい程の笑顔を浮かべたまま、リーウエルから視線は外さない。

でも、シーファ以上にめげないリーウエルはその視線を真っ向から受け止め、尚且つ笑みで返した。

こちらも、兄様に負けずの女性にもてそうな笑み。

「やっぱり、性質が悪い虫だったね」

小さな声。

でも、はつきりとよく通る声。

「虫…ね。流石……やっぱり番人は一筋縄じゃいかないか」

番人？ 何それ？？

気になる言葉を聞いたけど、今私の目の前に見えるものといえば、兄様の背中。

「ロリコンがロリコンを連れてきたみたいだね。過去がどうだったか知らないけれど、レイはレイとして生きてるんだよ？ わかっているかな？？」

つまりそれは、元旦那であろうと、今の私には関わるなって事だよね。

「はっはっ。そこなくちゃ面白くない。もう知ってるとは思いますが、俺はリーウエル・デヴァイデス。生まれ変わる前は…まあ、今更言うまでも無いだろ。」

今回は只の顔合わせだ。やっぱり直に会わなきゃな。なあ、レイ？  
色っぽい流し目、というのはきつとこつという事を言うんだと思う。

「ロリコンのストーカー気質か。これは本人の魂に刻まれた病気だね」

私に背を向けながら毒を吐く兄様。  
うん。血筋って言わなかったのは、なんとか分かったよ。理由。  
血筋だと、私も関係あるものね。私の子孫だから。

それにしてもあの騒がしいシーファが何も言わないのは珍しいと、  
兄様の背からちよつとだけ見てみると……

何かを考え込むように2人のやりとりを眺めていた。

……手のひらの上で踊らされるのは、もうイヤなのかな。

まあ、私だったらイヤだけど。

あの眼差しは、喉元に食らいつく直前っていう感じの獰猛さ。その  
辺りは、宰相に似てるかもね。やっぱ血筋だね。

すると、シーファが音をたてながらソファから立ち上がったか  
と思うと、リーウエルと兄様の顔を交互に眺めた。

「それぐらいでいいだろ？ そのシスコン兄君の言う通り、今の  
レイと過去を一緒に考えない方がいい。最終的にレイに気に  
入られたヤツの勝ちって事だろ？」

取り合えず一息つきたいんだが、いいか？」

華奢に見えるシーファだったけど、立ち上がったらリーウエルと  
同じくらいだった。多分筋肉の付き方が違うんだろうけど。

元旦那は相変わらず身体は鍛えてるんだろうなっていう、無駄の  
ない筋肉のつけ方をしてる。それと比べ宰相は魔術師系。筋肉が付  
きにくい体質らしく、鍛えても細いままだって言ってたっけ。

驚きで思考が脱線しちゃった私は、取りあえず予想外の発言をし  
てくれたシーファを横目で確認しながら、残りの2人の様子も伺う。  
瞳に写るのは、驚いたような兄様とリーウエル。

シーファがそんな事を言うのは予想外だったのか、2人とも目を瞬きながらシーファを見ていた。

自分を見つめる視線に気付いたシーファは呆れたように、

「撒き餌にされたんだ。少しは考えるようにもなるさ」

心の奥底から言葉を紡ぐ。

こう見ると、兄様と同じ年に見えるシーファ。前がちょっと幼かったのね、といえばそれまでだけど。

兄様は背に隠した私を見た後、ハア…と深いため息を落とすと、妥協した。珍しく。

「そうだね。取りあえず部屋に案内しよう。三人で…いや、四人でじっくりと話す事がありそうだしね」

訂正された兄様の言葉。

兄様と、リーウエルと、シーファで三人。もう一人は？

なんて首を傾げたら、私の背後に白兔の気配。

「俺ですよ」

珍しく影は纏わず、白兔は三人に対してこれまた珍しい笑みを浮かべていた。物騒な、ではなく、微笑に近い笑み。

「黄兔、緑兔、姫さんを頼む」

白兔の言葉と同時に、私の両脇に現れる黄兔と緑兔。

「姫様ごめんね」

「転移する」

左右の肩に手を置かれ、視界がぶれだす。

どうやらじっくり話す内容は、私には秘密らしい。

「実力行使はしないようにね。白兔が勝つから。」

まあ、それ以前に実力行使は、私がお仕置きするからね。花園の花ね、とっても繊細なの」

つまり、ここで攻撃系の魔力を放つたら、余波で影響を受けてしまうのね。

「転移で遠くに行くから影響は受けない　なんて言い訳は聞かないからね？」

消える直前、釘をさす事は忘れない。

その時の私の表情が10歳のレイのモノだったのか、それとも魂に刻まれた存在のモノだったのか。

意識していない私はわからなかったけど。

四人の顔面が蒼白になるのだけはわかった。



4人がいる部屋から、黄兔と緑兔に連れてこられた場所は私の研究所。どうやらここなら暇を潰せるだろうという気遣いに、大人になったね　なんて私は2人の頭を撫でた。

やっぱり人間不信というか、すれていた時代を知ってるから感慨深いというかね。2人はソレに気づいたのか、何処となく頬を膨らませながら少しいじけてる。

白兔や黒兔よりはどうしても幼さが目立つ2人。2人は気にしているらしいけど、それで十分だと私は思う。寧ろ、あの2人のような成長は遂げなくていいわけよ。個性万歳って感じでね。

「いじけなーい。拗ねないの。黄兔と緑兔の好きな所の一つだよ？」  
って言ったら、途端に2人の表情が崩れた。

勿論、笑みで。

「姫様が僕たちを好きっていうのは知ってるよ？　知ってるんだけど…さ」  
「何かがあれば白兔や黒兔の方が頼りになるから…うん。なんていうかさあ」

言いよどむ2人を、ギュッと抱きしめた。

あー可愛い。

やっぱり私の影が一番可愛い。

私情丸出しの結論を私が出した頃、抱きしめられていた緑兎が控えめに私の背中を叩く。

「嬉しいけど…この体勢だと姫様が頑張っちゃっただろ」

確かに、今の私は背伸びをして一生懸命短い手を伸ばして2人を抱きしめてる。つま先に全体重を掛けている所為か、プルプルと足が震えてきたりもするんだけどね。なんか可愛いからギュツとしたかったというかね。

「頑張らなくていいよ。俺たちが抱きしめるから」

「そうそう。僕たちがギュツとするからさ。お願い。ギュツとさせて?」

身長差で私を見下ろす形になっている2人に懇願され、私はコクリ、と1回頷く。寧ろ影たちに抱きしめられるのに依存なんかあるわけがなく、断りをいれる必要もないなんて思っているんだけど…。

「姫様は無防備すぎ。白兎に怒られちゃうよ?」

「俺たちが一緒に謝るからいいけどな」

相変わらずの2人。

影たちの中でもこの2人は一緒に行動する事が多い。仲良しさんで互いが互いを心配しちゃうから、引き離す気も無いんだけど…やっぱり時々私に餓えるらしい。

白兎の今回の配置も多分、2人のこの発作のような餓えを見越し

ての事なんだろうと思う。でなければ、黒兎が私と一緒にいるはずだから。

私も他の影も大好きだけど、大体は2人で世界を巡ってる。土産話を聞くのは私のちよつとした楽しみで、嬉しい事の一つ。

でもやつぱり、こうして一緒に居てくれる瞬間も嬉しくて、私は勢い良く2人の言葉に頷いた。

「そうだね。3人で謝ろっか」

既に怒られる事前提なの！？なんて白兎の驚く声が聞こえてきそうだけど。実際言いそうだけど。

まあ、仕方ない。

悪巧みを企んでしまう様な3人を、お目付け役がない状態で放置する方も悪い。って開き直って笑ってみた。

すると、黄兎が頷き、緑兎もそれに続くように頷く。

どうやら私の思考がわかったらしい。

「とりあえず姫様さ。暇つぶしに何か作らない??」

「そうだよな。姫様が大好きな癖にほつといてるあの4人……にさ、悪戯出来る物造ろっよ!」

ナイスアイディアとばかりに瞳を輝かせる黄兎。

悪戯道具には賛成なのか、隣で緑兎の瞳が面白そうに細められた。

最近、こんな表情をするようになってきた。

ちよつと前までは輝かせるだけだったんだけどね。今ではいかにも悪巧みしてますって顔をするようになった。白兎に比べれば全然なんだけどさ。

まあ、これも成長かな？　なんて他の人が聞いたら首を横に振り  
そんな事を考えながら、私は研究所に置いてある材料を眺めた。

ここ暫く研究所に籠るような事はしてない。

つまり、そんな面白いモノを作れる材料があるかな？　なんて色  
々と見て回れば、明らかに自分が置いたモノ以外の何かが積み重ね  
られていた。

チラリ、と2人を伺うと。

「お土産だよ」

「そうそう。土産。この辺りじゃ見かけない材料だったから」

横目で伺っただけの材料の山。

でも、貴重なモノが沢山あったのはわかった。

世界巡り旅行の最中に、本当に色々な場所に立ち寄ったのは知っ  
てただけど、ちゃんと採取もしてたのね、って関心しながら私は  
その内の一つを手を取った。

「それねー。今では失われた技術で作ったんだって。誰も使えない  
から、壊れてるって言われたんだよ」

「見た目が面白いからって他のオマケで貰ってきた」

「誰も使えないから　　ね。溜める魔力が足りないだけなのに」

輝きを失った元宝石らしき玉が埋め込まれている筒状のモノ。一  
見すると笛のように思えるが、笛の必需品の穴は横に何も開いてい  
ない。

息を吹き込んだとしても、空気が通り抜けるだけの筒に見えるモ  
ノ。

今とは違い、純度の高すぎた魔石は力を失い、透明の石のようになっっている。これに魔力を注ぎ込めば、色とりどりの光を放つ事を私は知っているけど、今の人たちは知らないんだろうね。

「魔力を注いでもいいんだけど、それだと破壊に特化しちゃうから…薬品でも作っちゃおう？」

これの使い方は至って単純。魔力を注いで溜めておいて使用する。薬品を球体にしたものを筒に押し込み、少量の魔力を注ぎ込む。すると、逆側から飛び出た球体は弾け、空気を伝い対象者に触れる。すると、薬品の効果通りの症状が現れる。

応用が利いちやうコレは、使い方さえ知っていれば重宝するんだけど、知らなきゃガラクタだね、ってしみじみと手のひらの道具を見つめてた。

「姫様。僕、あの薬作りたい！」

「俺はアレ、かな？ 二つの薬を一つに纏めちゃえばいいか」

さらり、と悪戯の域を軽く越えた発言をする2人の言葉に頷きながら、私は黄兔と緑兔に必要な材料名を告げて準備してもらおう。

その間に私は機材の準備をして、準備が整い次第作れるように場所を整えておく。

それと同時に、用心の為というかなんとか、強制解除用の薬品の準備を始めた。

やっぱり薬品の効果は薬品で消した方が無難だし。

「姫様！。材料揃ったよ」

「俺も揃った」

小さめの箆の上に山盛りにされた材料たち。これを煮詰めて効果をつけて…

「あ、魔力石忘れてた」

久しぶり過ぎて肝心のモノを忘れてたと、私は棚からケースを取り出し、純度の高いものを選んだ後、壺の中へと投げ入れた。瞬間、ポワン、と煙をあげながら魔力石が水へと溶け込む。

これも不純物のない水なんだけどね、今は魔力石が溶けて色が少しついでる。綺麗な空色。

魔力石が青だったから、その影響。

「後はそっちの壺に入れてくれる？」

魔力石を溶け込ませた壺を確認しながら、2人の姿を確認せずにお問い合わせをする。

「「わかったー」」

機嫌がよさそうだなって思ったけど、それは悪戯の準備をしているからだろうって思ってた。

ただ、その悪戯の対象はあの4人だけじゃなくて。

2人が企んでいる可愛い悪戯の内容には気づかず、私は薬品作りを完全に任せきっていた。

まあ、やっぱり可愛いからいつか　っていうのは私の超がつく本音なんだけどね。

久しぶりの邂逅・5

過保護な私の関係者。

過保護で、大切にしてくれてるって事は重々承知しているけれどね。

でもね。

素を出し始めたら、守られるだけじゃ物足りないのは私の本音。

「流石にね。この星が生まれるより前に産まれてるしね」

そんな私の独り言に、近くに居た黄兔と緑兔が反応を返してくれる。

「あの過保護集団でしょ？ 僕も姫様は大好きーで護りたいけどさ。でも、姫様の気持ちは結構わかるかも」

「そうだよなあ。過保護だよなあ。まあ、姫様の实力を知ってる白兔でも過保護だから、リンクしてない奴らはもっとかもだよなあ」

黄兔と緑兔の言葉に、そうかなあ、なんて呟いてみる。

確かに白兔も過保護だけど…

「姫様は当たり前になっちゃってるからね」

と、言いよどむ私に、2人は同時に言葉を発した。はっきりきっぱりと。

「初めはね、白兔も慣れなかったんだよ？ 距離があったっていうかね」



「僕からすると、それが想像つかないけどね」

黒兎の後に影になった2人は、既に過保護になった白兎しか見えないんだよね。黒兎ですら知らないし。

とりあえず2人が作った球体を詰めながら、物思いにふける。

昔を懐かしんでみれば、ここ数年の事とは思えない程昔に感じるけれど、出会ってから然程経っていない事実私からは苦笑しか漏れない。

何千年も生きてるのに、この5年間はそれに匹敵するんじゃないかって思うほど充実してる。

まあ、昔の私はこういう悪戯はしなかったから、それを考えると成長っていうよりは、子供返りしてるかなあ、なんていう気もするんだけど。

ふと視線を感じて顔をあげてみると、目の前には満面の笑顔の黄兎。

ついついにつこり、なんて笑みを返したら、黄兎も笑みを濃くして私の手の中に納まっていた道具を右手で掴む。

「ん？」

「僕か緑兎がやるよ。姫様は居るだけで視線を浴びるから」

「そうだな。俺たちがやった方がスムーズだよな」

2人に言われて断る理由もないから、私は頷きながら別室の話が終わるのを待つ。結構経った気がするけれど、まだ話しは終わらないみたい。

一体いつまで続くんだろう。寧ろ何をそんなに話す事があるんだろう？

私の疑問は尽きる事なく溢れてくるけれど、きつと聞いた所で私の知りたい答えが返ってくるとは思えず、内心で思うだけに留めておく。

兄様に聞いても、白兔に聞いてもきつと言われる事は似た通ったか。多分、話し合いが終わった後に私と顔を合わせても、内容を私に感づかせるような真似もしないだろうと思う。

まず始めに　大丈夫。何も心配はいらないよ。なんて言って兄様が微笑んで。

次に白兔が　あはは。男同士の話ですよ。ね、姫さん。その一言で片付けるんだろう。

思考を飛ばしている私に、黄兔と緑兔は何も言わずに使った道具を片付け始めてる。

片付けるに関しては、黄兎と緑兎の方がやるかなあ。

「姫様。白兎や黒兎の荷物がなさ過ぎだから」

「……ん。わかってるよ」

タイミングよく、私の声には出さない言葉に答えるように、黄兎が振り返る。

伝えてないから伝わるはずもないんだけど、まるで会話を交わしている時のような返答が返ってきてね。

やっぱり私の影だよなあ、って笑っちゃった。

「姫様。話し……キリがないみたいだから、遊びに行ってきたもい  
い？」

片付け終わった緑兔が、笑っている私の顔を覗き込むように尋ねてきて、それに反対する理由もない私は迷うことなく頷く。

「いいよ。どれだけ話しても既にどうなるかは決まっている事だもの。寧ろ遊んできちゃっていいよ」

時間を見れば三時間。

話し合いを終えるには十分な時間だと思っし。

それに、私の答えはもう決まってる。他の誰が何を言ってもこれはかわらない。つまり、話し合うだけが無駄な事だね。

これから真面目に話し合います！ って思ってる人たちには言わなかったけど。

それに三時間も待てば十分。

いい加減これの効果も確かめたいし。

「黄兔も行くでしょ？」

緑兎が行くなら黄兎もだよね。

って思ってたんだけど、その瞳が一瞬だけ揺れた。どうやら迷っていたらしい黄兎の背を、私は優しく押す。

「この中で護衛は必要ないでしょ。何かあっても、私は大丈夫だから行ってきた」

迷う素振りを見せる黄兎と、乗り気な緑兎を見送った後、私はソファーに身体を沈めさせるように横になる。

多分黄兎は、やっぱり私を一人にするのが心配だったんだと思うんだけどね。

それは緑兎も一緒だけど、それに関しては緑兎よりは黄兎の方が過保護なのかも。

でも、久しぶりに作ったら疲れたなあ。

もう少し作るようにした方がいいよね。腕も鈍るし。

かといって既に片付けられた研究所を片付けた直後に散らかす気にはなれずに、私は近くにあつた魔道書を手に取り目を通す。

やっぱり最新のものは色々あるなあ、なんて小さく呟きながら、気になったページに付箋を挟んでいく。

付箋を挟みながらも集中出来ないのはきつと、一人が寂しいから。

ここ暫くは本当に影たちと一緒にいたから、やっぱりいないのは落ち着かない。

自覚はあるけど、それを音にだして言う気もない私は書物を棚へと戻した後、部屋から出て廊下を歩いてく。

まあ、当たり前だけど誰もいないよね。ここに来れる人物自体が限られているからさ。居たらそっちの方が大変なだけだね。

散歩でも楽しむかのように、慣れ親しんだ廊下を歩きながらここから見える庭園を眺める。

庭園といっても、薬草園に近いかな。

貴重な薬草が多種多様で生えているから、知られたら結構狙われる場所だろうけど返り討ちに出来るから問題はないんだよね。

そもそも、私が大切にしているものを、私の影たちが他人に触れさせるはずもないんだけどね。

結局は影たちの事を考えてる自分に苦笑いを浮かべながら、私は応接室に続く転送陣を右足で踏む。

悪戯は済んだだろうけどね。

やっぱり効果が発動された後の4人は見なくちゃね。

ニヤリ、に近い笑みを浮かべながら、私は左足も転送陣の中へと  
いれる。

こうして、たどり着いた先にあるもんは応接室。ぽてぽてと、小  
さめの手足を動かして応接室の前へとたどり着いた。

結構疲れたのは、子供の身体だから。歩幅が小さいから中々進ま  
ないんだよね。前に…。

ちよつと虚しくなりながら、私はノックはせずに扉を開けた。

黄兔と緑兔の気配はこの中。しかも隠れてない。

感じる魔力の波動に、私は無意識に笑みを浮かべてた。

うん。あの効果が発動されてたら面白い。

すつごく面白い。

本当に面白いよね。

「あ、姫様」

「こつちまで来たのか」

声をかけてきてくれたのは、先ほど別れたばかりの緑兔。

煙幕に覆われた部屋ではいまいち見づらいけど、近くまで来てくれたから顔を見るのには問題なし。余裕で見れる。

「まあ、こつちに来てくれ助かったよ」

って……ん？ 緑兔が気になることを言っただけ……何??

しかもその表情はまだ、悪戯カオ継続中の表情。

何かおかしいなあ、って思った私は、とりあえず一歩、二歩と後ろに下がってみるけど、何故か背後には黄兔がいた。

背にトンと何か当たった感触に、私はワケが分からずジッと黄兔の瞳を見つめてみた。

こつちで見れば何かしらの反応は返してくれそうだし。

「姫様」



見てたら黄兔が口を開いてくれたけど。

黄兔にしては、大人っぽい声。

何だろう………???

チラッと下に視線を向けてみると、筒状の魔道具。

「成功した？」

無難な話題を振ってみる。

煙幕に覆われてるっていつても、まったく見えないわけじゃない。

大まかなシルエツトぐらいはわかるから、それで確認すれば悪戯が成功した事ぐらいはわかるんだけどね。

「黄兔、緑兔……なあに??」

瞳の奥を輝かせている悪戯っ子2人の言葉を待つ。

待つ…。

待つけど、返事は返ってこない。

「「姫様。悪戯は成功するかな」」

待っていた私に、2人の声が同時に届く。

2人の言葉の意味を問う前に黄兔の腕が動いたかと思うと、部屋に漂っていたものより濃い煙幕で視界が塞がった。

「これ…魔道具の煙幕だよね」

使った直後がこれなら、さっき見た煙幕は直後ではないんだよね。

「ひょっとして三種類作った?？」

一体何時の間について思うけどさ。

私に危害を加えるものじゃない事はわかってるから、聞く事はそれぐらいかなあ。

「あれ…姫様冷静だね」

「もっと慌ててくれるかと思った」

2人の声に反応したのは私じゃなくて、煙幕の中から小さな影がすごい勢いで駆けながら叫ぶ。

「姫さんにまでやったのか!？」

あー。白兔はそっちなんだ。

眩いた私の言葉に、小さな影が揺れた。

「……姫さん……大きいね」

小さな白兔が見上げる私は、何故か視界がいつもより高くて。

思わずジッと自分の手に視線を落としてみる。

指が……長い？

「あ、大きくなっただ」

まったく動揺せずに言った私を見上げる白兔の眼差しが、思いつき揺れてる。

いつもは見れない、慌てまくる白兔は結構新鮮。

「白兔は可愛いよ」

につこりと笑みを浮かべて普段と同じに言っただけで、やっぱり大きい私から言われるのは慣れてないらしく、白兔は口を噤んだまま私に手を伸ばした。

「姫さん、折角だから抱っこしてみます？」

なんて言う割りに、白兔の指先は私の手に触れていて、迷わず抱き上げた。

あ……すつごく新鮮。

「立場が逆転したね。うん。姫さんの視界はこれなんだ」

しみじみと呟く白兔だったけど、見た目が幼い所為か、いつもみたいな余裕は感じない。

悪戯が成功してニンマリと笑う黄兔と緑兔に笑いかけながら、私は残りの3人の姿を確認する為に、煙幕へと視線を向けた。

さて、後の三人はどっちの姿かな？

弾む声に、白兔が嫌そうに顔を顰めたけど、あえて触れずにスル  
ーした。

だって…面白いし楽しみだし。

どうせなら、兄様は小さいのよりもう一つの方がいいなあ、なん  
て私が言ったら、腕の中の白兔の頬が盛大に引きつってた。

「そよ風よ 舞え」

そんな白兔を横目に、私は手っ取り早く煙幕を払う為に魔法を使  
う。

煙幕を取っ払ったほうが早いし見やすいしね。

## 久しぶりの邂逅・6

いつもよりも高い視界。

これは馴染みのあるもので、どちらかというと久しぶりという感覚。

効果のふり幅はソレほどつけてはいないはずだから、多分17歳ぐらいだと思う。私の腕の中の白兔は10歳ぐらいかな。

出会った頃よりも更に小さい身長と、大きな目。

今はすっかり美青年になっちゃったけど、昔は可愛かったんだ。なんて呟いてみる。まあ、腕の中の白兔は私のその思考がイヤみたいで、物申す とばかりの視線を向けてくるんだけど、私はそれを軽く流して部屋の中央を見ていた。

案の定、兄様の身長はあまり変わってない。ただ、全体的に小さくというより、身体のラインに丸みが帯びた後ろ姿。

シーファは多分小さく。

見たいような見たくないような、非常に迷うけれどもこの際怖いもの見たさでしっかりじっくり見てしまおうと思えるリーウエルは、兄様と同じく筋肉質の身体が丸みを帯びたものへとかわっている。

「白兔の小さいのも可愛いんだけどね」

残念そうに私が言うと、白兔はこれでもかという程ぶんぶんと首を横へと振ったかと思うと、私の肩に手を置き真剣な眼差しを向けてきた。



「姫さん。姫さんのお願いは聞きたいけどね、これはダメ。ホントダメ。寧ろダメ」

何処と無く切羽詰ったような光が瞳の奥に宿っているんだけどね。

「効果は持続しないから大丈夫」

「そういう問題じゃないような気がするよね。ね、姫さん？」

いつものように声音を軽いものへと変えてはいるけれど、いつもよりは余裕のない声。付き合いの長さでそれだけはわかるけど、もう一つの効果を心底嫌がってるという事だけはわかった。

やっぱり、お約束とはいえそっち系の悪戯はイヤなのね。

私が残念そうな表情をしている事に気付いたのか、白兔は目を見開いたまま私を凝視しているんだけど、その表情はちょっと怖いかも。と思わなくも無いから、背中をばんぼんと叩いて意志表示を試みる。

「俺の驚愕を表してます。少しはわかってくれました？」

小さな肩を竦める白兔に、私はというとやっぱり残念という表情は崩さない。目を見開いたままの表情は怖いけど、これはこれで珍しいものを見れたからいつか。なんて思わなくもないんだよね。

「レイ」

漸く兄様が現状を把握出来たのか、ダボダボになった衣服を引き摺るように私の前へと立つ。

身長は兄様の方がちょっと高いかな。元々母様も高い人だから、その遺伝だと思っただけだね。

「折角レイと同じぐらいの年になれたのに、これだとちょっと情けないかな」

そこに浮かぶのは苦笑。

「どうやら私たちが企てた悪戯に対しては怒っていないらしく、苦笑以外はいつもの兄様と何ら変わりはない。」

「正直な所、ちょっとつまらないかな。折角の悪戯を軽くっていうわけじゃないけどあっさり流されちゃったら、ね。」

「俺たちより、あっちの2人の方が遊んでくれそうですよ？」

私の思考を的確に感じ取った白兔が、未だに動かない二人に向かって指をさす。

「俺や姫さんの兄辺りはこんな性格ですしね。そこまで動揺はしませんよ。面白っていえばあっちの2人の反応の方が面白いと思うから、ぜひそっちへ」

「……………」

寧ろ、シーファとリーウエルを押し捲る白兔が面白い。

「姫さん…?」

「ん。わかったわかった。あの2人の反応見てくるから、ここで待っててね」

「……………」

口を嚙み、肌に突き刺さるような沈黙を醸し出す白兔を絨毯の上へと下ろすと、私は身を翻して2人の元へと向かった。ステップでも踏めてしまいそうな程軽やかな足取りで。

この効果は本当に短時間だから、こんな話しをしている傍から元に戻ってもおかしくない。

「リーウエル、シーファ」

声を弾ませながら2人の名前を呼ぶと、錆びた機械が動くように、ギギギ…という擬音が聞こえてきそうな程ぎこちなくゆっくりと私に振り向く。

「奥さんは相変わらず奥さんだね」

これはリーウエル。

「文法はおかしい気がするが、それで通じる辺りが面白いな」

これはシーファ。

会話だけ聞くと、陰険宰相と元旦那が話しているようにしか聞かえない。流石子孫。

「俺は兎も角、コイツの女装なんて目の毒だ。何時頃切れるんだ？」

思ったよりシーファの方が冷静で、意外だなんて視線を向けてしまっ

子供の姿じゃいまいち決まらないけど、その辺りは逆にシーファらしいのかもと思えるしね。

「女装じゃないだろ、女装じゃ。そんなもんは俺だっけ見たくないに決まってるだろ」

「でも、見れくないよね。この場合は」

「見れなくていいんだよ。俺は男で、奥さんが女で、それがいいんだから」

私の言葉に、間髪いれずに言葉を返すリーウエルは、白兔や兄様とは違ってちょっと苛立っている感じかな。シーファは予想外に、受け入れ態勢が出来てるのがやっぱり意外というか、急成長した感じが逆にどうしたの???と聞きたくなる。

「折角奥さんのその姿が見れたのに、俺がこんな姿でどうするんだ…」

ぶつぶつと独り言のように言葉を紡ぐリーウエル。内容を聞く限りだと、どうやらこの姿の私と本来の自分の姿で会いたかったのになって思う。

この場合、効果は直ぐきれるからってというのは慰めじゃないよね。

そんな感じで話してたら、四人の体が煙に覆われ始める。

薬の効果が切れるんだよね。やっぱり早い。

「あー…姫さん。結構片手間にささっと作っちゃいましたね?」

効果時間の短さでそれがわかった白兔は、私を呼びながら視線は黄兔と緑兔の方へと向けている。

メインは、あの2人だっけわかってるみたい。

「当たり前だろ。あの短時間で作ったんだから」

「流石にあの時間じゃ無理だよ」

何を当たり前前の事をとばかりに白兔に答える2人。

本腰をいれて作ったら、一ヶ月はこの姿を覚悟しなきゃいけないから、ちよつとした意趣返しにはこれで十分だと思っただけだね。

「じゃ、黄兔、緑兔　　姫さん。これの、本題はなんですか？」

影たちのリーダーである白兔はやっぱり慣れていいのか、これの本題をちゃんと尋ねてくる。兄様は想像がついたのか、ちよつと気まずそうに視線を逸らす辺り、影に負けず劣らず以心伝心は出来るみたい。

本来の姿に戻った私を含める5人は、気を取り直してソファアへと腰を沈める。目の前に並べられるのは、煎れたのでお茶とお菓子。ちなみに黒兔製作。

今回の騒ぎ？でも、黒兔はお菓子を作りながら傍観してたみたい。最終的に私がここに座るのがわかったのか、私の好きなケーキを焼きたての状態でだしてくれた。

戻った戻ったと呟きながら喜びリーウエルと、溜息を落としながらリーウエルの隣に腰掛けるソファ。

兄様と白兔は私の両隣のソファアに陣取りながら、私が口を開くのを待ってる。

「本題はね」

まあ、たいした事でもないんだよ。  
もったいぶって咳いてみたものの。

「私の話しなのに、何で私をのけ者にして話すのかな？」

そう。

最終的にはこれなのよ。

黄兔と緑兔の提案を快く了承したのも、慌てふためく四人を面白く眺めたりしたのも、ちょっと面白くなかったのも。

これが、理由。

確かに、悪戯の発端は2人だったんだけどね。それが面白くなかったから私ものつたんだろうなあって思うんだ。

白兔に聞かれたから、折角だからとこの際本音を話してみたんだけどね。

その瞬間、がっくりと肩を落とした四人の情けないながらも可愛い姿を、私は当分忘れないと思う。

「結論を出すのは私だよ？ その私をのけ者にしちゃダメだよ」

念押しとばかりにある意味トドメをさす私に、何とも言い難い表

情を浮かべる2人。白兔と兄様はある程度予想がついてたのか、やっぱり無言を貫き通してた。

「そういえばそうだったなあ。奥さんはこんな性格だったなあ」

脱力したようにソファーに寄りかかり、天井に視線を向けたまま力なく呟いているリーウエルに、何当たり前の事言ってるんだらう??とばかりの視線を向けておく。

結局、魂は同じだからかわらないんだよね。基本的性格は。

「じゃあ…結論は出てるんだよね？」

本人抜きで話を進めるなってこうして言うぐらいなんだから」

言葉無く頭を垂下げている白兔に変わり、驚異的な精神回復力を見せたシーファが纏めに入る。

どちらかというと、まとめ役というより単にシーファが聞きたいだけって感じもするんだけどね。今更もったいぶる事じゃないから私は勿論、と頷いて見せた。

「この前の器　　つまり前世騒動についてはね…」

そう。

結論は決まってる。

今現在は変えようがない私の結論を、迷う事無く音にのせて響かせた。



## 帰ってきた日常・1

答えを出した私の周りは、今までの喧騒が嘘だったかのように静かになった。漸く帰ってきた私の穏やかな、影や兄様と一緒に過ごす時間。

至福だねって、私は黒兎が煎れてくれたお茶の香りを存分に楽しんだ後、冷める前にカップに口をつけた。やっぱり美味しい。最近じゃ、黒兎に叶わなくなってきたよね。お茶の煎れ方やお菓子作りに関しては。

黄兎以外は手先が器用なんだけど、それでも黒兎のプロの領域には叶わない。一体何時の間にこんなに美味しくなったの？なんて聞けば、黒兎に連れられズラツと並んだ書物の山を見つめていた。勿論、黒兎の部屋である。

小遣いというか給料というか、その辺りの線引きは非常に微妙だけど、まあ、兎に角金額的にはそれなりに渡してると思うのね。

うん。小遣いだと言いがイヤだから給料ね。なんて誰に言うわけでもなく、内心そんな言い訳じみた事を思い浮かべてみるけれど、目の前の黒兎はどうしたんだろうとばかりに首をちよびっとだけ傾げてた。

純粹な瞳がちよつと痛いなんて言わないけれど。

そのまま育ててねって思ったのは、私の超がつく本音だったりもするわけで。

.....。

脱線しかけた思考を、私は意識して戻した。

私もそうだけど、魔法を扱う者ってというのは非常にお金がかかる。

まあ、身一つでどんな風にも出来ちゃうんだけどね、私や影の場合。それでも研究をしたり、書物を買ったり道具を買ったりすると、桁は恐ろしいものになったりするのね。だから、その辺りも考慮して月に1回給料を渡すんだけど…。

黒兔の場合はこっちにも流れていたのね。

と、棚の半分ほどを占領している料理関係の本を上から下まで二往復程視線をさ迷わせた後、黒兔に視線を移した。

どうやら無言の私が不安だったらしくて、その瞳に宿る色は切なげなもの。

「黒兔」

それに気づいた私が両手を黒兔に伸ばせば、黒兔も私を抱き上げる為に腕を伸ばしてくれる。

「本の多さに吃驚しただけ。料理の本がこんなに出てるなんて知らなかったから」

作れば出来るけど、やる気が無いという典型的な性格な私。

料理の本は二・三冊あればいいかと、適当に手を伸ばすだけ。

その割りに興味のある書物に関してはジャンル関係なしに、どんな些細な違いも見逃さないように買ってるから、似たような本が結構ゴロゴロしてる。

ジャンルが違うだけで、黒兔と似たか寄ったかな感じかな。

「本を読むのは黒兔が一番多いよね。白兔はうさちゃんに読ませて、自分の中に戻して知識を吸収しちゃうし、黄兔と緑兔は半分ずつ担当して、やっぱり知識を共有しちゃうし」

まあ、特に何かを言うつもりはないんだけど。  
本好きの私としては、こうして本が並べられてるのは嬉しいのよ  
ね。

「この前に買った料理の本があるから、今度黒兔にあげるね」

いい子いい子と頭を撫でながら言うと、黒兔が嬉しそうに微笑む。  
あまり話さない黒兔だけど、こうして表情を和らげたりと喜怒哀楽  
ははつきりとだしてくれる。

「楽しみに、してる」

ゆっくりと言葉を紡いでくれる黒兔の頭をもう一回撫でた後、抱  
き上げられたまま私の部屋へと戻った。

戻った私たちを出迎えたのは、兄様と白兔。最近、よく2人でい  
るんだけどね。なんでだろう？

「姫さんお帰りー」

「レイ、こっちにおいで」

2人で手招き。

うん。断る理由はないから行くけど…本当にどうしたんだろうと、  
二人の前で足を止めた私は上を見上げる。

上を見上げるのは首が痛くなるからイヤなんだけど、まあ、仕方  
ないかな。

すぐぶる機嫌の良さそうな2人を見上げたまま、言葉を待つ。  
ひたすら待つ。

とりあえずニコニコと笑っている二人に対して何を言っているのか

わからず。かと言ってこんな事で短気を起こしたくないので黙って見上げたままでいたら、兄様の右手がソツと伸びてきた後私の後頭部を支えるように手を当てる。

うん。疲れたけどね。

疲れたけど、会話を始めてくれた方が嬉しいよね。

「ん？」

兄様は優しくいつものように首を少しだけ傾げて、笑みを浮かべただけだよ。その態度、私が早く言ってくれないかなあっていうの、わかってるよね？

何がしたいんだろうなあ、なんて疑問いっぱいであっつと困っていたら、後ろから黒兎の手が伸びてきて、私の身体は宙へと浮く。

さつきもこんな体勢で抱っこされてたよね。

黒兎は無言のまま私を抱えなおすと、少しだけ歩いてソファの上へと腰を下ろさせてくれる。そして目の前に置かれるのは紅茶。多分、リラックス効果のあるもの。

「お前ら、考える。疲れるだろ」

ん。それは私が疲れるって意味だよな。最近白兎より黒兎の方が甘くなってきたかなあ、なんて思いながら、未だに笑っている兄様と白兎を横目で見ながら黒兎の煎れてくれた紅茶を喉へと流し込む。相変わらず美味しいなあ。ってさつきも飲んだよね。今のとは茶葉が違うけど。

「ったく。黒兎は相変わらず姫さん馬鹿だな。俺も人の事は言えないけど…」

「そうだね。レイの影たちはレイを大切にしてるしね。それについ

ては不満はないよ。寧ろ大切にしてって思っただけだね」

何処と無く不満そうな兄様。

私が影たちと居ると、兄様との時間が減るからだろうけどね。

「本題から言うかね。旅行に行かない？ 前回は邪魔されちゃったしね」

「そうだね」

そういえば、シーファに邪魔されて転移で帰ってきたんだよね。それから結構バタバタとしてて、旅行所じゃなかったもんね。あれも名目は偵察だけど。

「今度はゆっくりね、旅行したいなって思って」

「んー。隣国は止めとこうね」

兄様のお誘いに、私は迷わずに言ってみる。

エアルもいいんだけどね。今だったらリーウェルもいるだろうから、楽しいとは思っただけだね。楽しいとは思っていても、久しぶりに戻ってきたレイとしての時間も楽しみたいのね。

どうせ成長すれば、魔力の馴染みが良すぎるこの身体はきっと私の魂に引っ張られるだろうし。そうすれば、今よりもきっと私は刻の賢者に近づいちゃうと思うし。

それを考えると、今の内にレイとしてのんびり過ごそうかなあ、なんて思ったりするわけね。

「姫さん。行ってきなよ。宿はもう手配済みだし」

「手配済み？」

「そそ。手配済み。暫くは表に出ずっぱりだったけど、その間は俺らも影らしくするし。姫さんの兄貴ー。俺たちの仕事はとらないように……な」

闇に潜む発言をする割に、兄様にちゃんと釘をさす事も忘れない。やっぱりイヤだよ。兄様の影に仕事を譲るのは。

「わかってるよ。俺の影に頼みたいけど、今は話してるしね。仕事は残しておくよ」

「……………」

兄様の言葉に、白兔の無言。

やっぱり兄様は何処までいっても兄様で、それに負けずに微笑を浮かべる白兔もやっぱり白兔で。

黒兔はもう慣れてるのか、そんな2人を無視して今度は冷たい飲み物を煎れてくれた。丁度飲みたいと思ってたから嬉しいなあ。

「姫様、ゆっくり楽しんで」

旅行の事だよ。ね。

黒兔はもう承諾済みなんだ。じゃあ後で黄兔と緑兔にも聞かなきゃね。

何となく一段落ついた話しにホッと一息つくと、私は黒兔が良いしてくれた飲み物で喉を潤す。その後は、妙に凝ってしまった肩を

解すように両腕を上へと伸ばした。

あー。でもやっぱり平和な日常はいいなあ、なんて、音にならない声で呟いた。

## 帰ってきた日常・2

まるであの時のやりなおしのように。

私は兄様と手を繋ぎながらゆっくり歩いていく。

そう。ゆっくりね。

所詮10歳。大またで歩いた所で速度なんてたかが知れてるし、体力は持つてかれるので良い事ないし。なのでゆっくりと自分のペースを崩さずに。

兄様は小幅で歩いて、私に合わせてくれてる。年齢差を考えるとそれも仕方ないけれど、やっぱり合せてくれてる兄様には心の中で、そつと感謝の言葉を呟いていた。

それに気づいたのか、兄様は優しく笑うと。

「僕がレイと歩きたいだけだよ」

とね。

だから兄様。人の心の中を読むの止めようよ。

一体どうやって読んでいるのか。それは私にもわからない。寧ろそれは本当にすごい事なんだけど、兄様はやっぱり笑っているだけ。

これ以上は考えても無駄な事かなと、別に不快にも思わなかった私はその件について、ここで思考を放棄した。

表情に出していただけかもしれないし、以心伝心で兄様が慣れただけかもしれない。



ゆつくりと2人で並んで歩いていった所で、一軒の店に視線がいったのね。

それも、兄様と私の視線がほぼ同時に。私と兄様は顔を見合わせた後、進路をそちらに変えて店先に並んでいる商品を端から端までじっくりと見ていく。

そこに売られていたのは、兄様お気に入りの道具。使い心地がすごく良いんだけど、誰が作っているとかは一切不明だった、時々しか流れてこなかったんだけど。今見る限りじゃ時々量ではないよねえ、なんて兄様を見上げてみたら。

目が、爛々と輝いてた。

書類とか色々書き物が多い兄様にとって、紙や筆記用具は必需品。長時間使う道具だけに、使い心地は利き手にとっては死活問題。私も魔道書やらなんやらを作成するから、使い勝手の良い筆記用具は正直、喉から手が出るほど欲しい。

寧ろお抱えで欲しい。

あ、でもお抱えじゃなくていいから、定期的に流して欲しい。この使いやすいペンのインクが終わった後の書類作成なんて、今まで贅沢に慣れた利き手がすぐさま悲鳴をあげて仕方ない。

やっぱり、私より兄様だけだね。必需品として活用するのは。

なのでちらり、と兄様を見上げてみると、ちょっと悩み顔。

ここで大量に購入するかそれとも定期購入にする為に話しをつけるか。私も兄様も、ここにその職人がいる事を一切疑っていない。

まあ、人気の入手困難な品物がここにこれだけある理由は、さほど多くはないと思うけど。

「レイ、ちょっと話し込んでもいい？」

交渉したいんだ、と言う兄様に、私は迷わず頷く。

ここはじっくり一から交渉と思ったけど、兄様と私の視線が再び交わる。

急だったから、手土産を持ってきてない。

「買いに行った方がいいかな？」

「ここに住んでる人に、ここの名産じゃまずいよね？」

2人でうゝむ、と首を傾げると、中から笑い声が聞こえてきた。

声のした方を見てみると、戸口に背をもたれかからせるように立っている男の一人。独自の雰囲気を持っていて、兄様や影たちの存在感にも負けてはいない、恐らく二十代の人。

食えなさそうって思ったのは私の本音。

兄様もそう思ったのか、一瞬身体に緊張が走ったけどすぐに立て直した。

「こんにちは。驚かせたみたいで悪かったね」

優しいな声音を響かせて、男はカウンターへと一歩ずつ近づいてくる。ただ歩いているだけなのに何故かその姿は圧巻されるものがあった、感覚を掴む前に戸惑いを覚えてしまう。

「（ん）…この感覚は」

兄様も気になるけど、とりあえず先にこの戸惑いの原因を掴もうと私の思考は一瞬奥へと潜る。知識を総動員させ、書物を捲るように次々とこれに当てはまるものを探していく。

「こんにちは。一生懸命なのを見られて、ちょっと恥ずかしかった  
だけですから気にしないで下さい」

奥へと潜った私の手を握り、兄様が微笑を浮かべる。兄様の声音も優しいけど、目の前の男はまた違った優しい響きを持つ音を発する。

「そっやって見てくれるっていうのは嬉しいね」

「貴方が製作者の方ですか？」

「そう。俺、作」

「嬉しいです。愛用している品なので、探していたんです」

……。

それは言っちゃっていいのかな？

と、意識を少しだけ浮上させて疑問に思う私に、兄様は1回頷く。

「よければ話しをさせて頂きたいのですが……」

名前は名乗った方がいいけど、ここだと目立つ。

かといって用意した偽名は使いたくない。

そんな兄様の葛藤に気づいたのか、男は手招きするように、店の奥へと私と兄様を誘導してくれる。

どうやら話しは聞いてくれるらしい。

ギョツと力強く兄様に右手を繋がれたまま、私は店の奥の方にある、外からは死角になっている椅子へと腰を下ろした。

隣りには兄様。そして、向かいあうように男が腰掛ける。

「やんごとなき身分の方だね。俺の作った物をここではない場所で入手してるって事は。それで、名乗ってくれるのかな？」

「どうやら男から名乗るつもりはないらしい。」

「僕はライディアス・エレント・アニスメイル・キアレントウライド・ディーファルと言います」

姿勢を正し、真っ直ぐに男を見つめる兄様。

「それはまた…大物がきたね」

男の言葉に私は内心、そうだねと呟く。

兄様の存在ははつきり言って大物過ぎる。私の国が大きいついていうのもあるんだけど、最近では緊張状態にあった隣国との問題も解決され、滞っていた貿易やら何やらが再開されたら一気に注目のになったのね。

そう。うちの国も隣国も資源は豊富だったのよ。

それを生かす技術もあったけど、お互いが緊張状態にあった時には内へ内へと引き籠もりだったものが、外へと向かって動き始めたのね。当然商売だけ。技術も資源も資産だから。

当然、その跡取りである兄様の存在感も権力も追随を許しはしないんだけど…今回に限らず兄様はそれを使うのは嫌がる。

だから偽名を使ったり名乗ったりはしないんだけど。

「貴方の作る道具が使いやすいから、定期的に買わせてほしいんです。僕個人に売ってはもらえないでしょうか？」

私が考え込んでる間に話しが進んでいたらしく、耳に入ってきた言葉は兄様のそれだった。

「独占する気はないの？」

けど、男は面白そうにそんな事を問いかけてくる。

「独占？ なんの為に？」

それに対し、兄様の答えはシンプル。揺さぶる為だったのか反応を見る為だったのかはわからないけど、兄様の反応を楽しみにしていた男は予想外だったのか、ちょっとだけ表情が崩れた。

私は内心へえ、って呟いたけど、兄様はどうでもいいみたい。

真面目な表情を浮かべ、真っ直ぐに男を見ていた。

「こういう王族は初めてだな。いつも自分専属になれって脅されるんだけどね」

男の言葉に、私は改めて部屋の中をぐるっと見回した。

「……」

巧妙に隠された魔道具の数々。発する魔力の構造を分解して探ってみると、効果は身を守るのは十分すぎるものたち。

「穩便に帰ってもらおう為の魔道具…ね」

兄様や私が愛用している、目の前の男が作った筆記用具の意匠も相当なものだったけど、ここにある魔道具の意匠も凝りに凝っている。でも、探ってみれば一人の存在しか感知できない。つまり、筆

記用具もここにある魔道具も、全てこの男が一人で作っていると言  
う事。

「あれは量を減らさないと、一歩間違うと廃人さんになっちゃうよ  
」？」

夢見心地のまま男の存在を忘れて帰ってもらってるんだと思うけ  
ど、量を間違えちゃいけないと思うのね。

まさか言い当てられるとは思ってなかったのか、男の視線は初め  
て私の方へと向いた。男の瞳に私の姿が映し出された瞬間、余裕綽  
々だった男の表情がはじめて崩れる。

それは、驚愕っていいの良いのかな？

兄様が男の心情の変化に気づいて、勢い良く立ち上がり私と男の  
間に身を割り込ませる。私を守るように、庇うように男と対峙した。  
この瞬間、使いやすい道具よりも何よりも、私の身を守るためな  
ら他は切り捨てても仕方ないって考え方なのね。

じゃ、私のやる事は一つかな。

身を守る事もするけれど、兄様の手を守る為にやっぱり男が作っ  
た道具は定期的に入手したいし。

翠と碧の眼差しを男へと向けた後、にこつと微笑を浮かべる。

大よそ10歳児とは思えない程の大人びた表情だつて自覚出来る  
笑み。

「珍しいね。私の魂に気づくなんて …… そんな貴方はだあれ？」

男を解体するかのように、じつくりと観察する視線を向ける。

まあ、途中までね。本気でやったら色々見えちゃうから、流石にそれはイヤだし。

「貴方こそ　…珍しい。その存在は稀過ぎる。自覚はあるの…？」

男の言葉は、私以外は理解出来なかった。

それは、私の影も例外じゃない。

私の知識を共有出来る影と言っても、私本人ではない影には限度があるから。

だから、わからない。

「（ん…でも旅行に行くと必ずこつこついう事が起きるのね）」

今度厄払いに行こうかなあ、なんて。

本物の巫女様の予約を取ろうって、ちょっと本気で考えてみた。





厄払いを本気で考えて思案している私の衣の裾を、兄様がちょっと掴んでゆっくりと引っ張る。私が思考の渦にはまり込んでしまっているから、そこから脱出させて尋ねようって事だと思っただけだね。

兄様なあに？ と視線を上へと向けてみれば、困惑気味の兄様の表情。

やっぱりさっきの会話が不明だったのか。

それとも私と男だけで通じるモノを感じて戸惑ってしまったているのか。

恐らく両方と思いながら、私は何て説明したものかと、少し迷ったように視線をさ迷わせたのね。

男に対しては確実じゃないけれど、ほぼ間違いないだろうという思いがある。正直、数千年生きていて久しぶりに出会う、の久しぶりの桁が違い過ぎる私以外の同種に対して、何をどう言えばいいのか戸惑いがあるのは私自身。

短い間だけドレイとしてゆっくりと生きていこうと思った矢先にこれ？ なんて思わず自分の日頃の行ないを考えてみたけれどね。

数千年かけて構成された私の性格が今更変えられるわけもなく。

まあ、仕方ないかなあ、なんて自己完結を試みるばかり。

でも、と改めて兄様の方を見て、その眼差しの意味には気付いているけれどね、と苦笑してみせる。

教えて、と強烈な光を放つソレには少し圧され気味になるけれど、この疑問を感じるのには兄様だけじゃなくて、私の影たちからも同じものを感じるから尚更圧されちゃうんだと思う。

「んーとね」

私にしては珍しく歯切れは悪くなっちゃうけど、それも仕方ないよね。なんて自分にフオローをいれてみる。

すると、目の前の男から感じる視線が少しだけ緩まった事に気付いた。今まで、兄様以上に熱過ぎる視線を向けられてたのにどうしたのかな。って逆に思って見てみたら、距離が近くて驚いたんだけどね。

「何？ レイに近付かないでくれないかな？」

見事、兄様の私に近付くための境界線に足を踏み入れたらしい男。相手や兄様の機嫌によってかわるから、その境界線は未だに私にはわからない。

「レイ様に　ですか。俺を遠ざけない方がいいと思うよ。だって俺は彼女の、きつと盾になれる存在だから」

男の言葉は私にとっても。ううん。私以上に、兄様には衝撃的だったみたいで一瞬この場が、今までに無い程に冷たく凍えたような気がした。

盾。

うん。盾ね。

なら、矛がいるよね？

盾と矛はセットだから。なんて私が眼差しを向けたら、男はただ笑うだけ。その笑みを真正面に捕らえ、私は静に目を閉じて首を横へと振る。

「いらぬから。うん。必要ない。最強であり理の外にいる私には、必要ないものだ。折角生を受けた貴方の人生なんだから、貴方自身が楽しめばいいと思うけど」

私が生まれて間もない頃。  
宇宙が安定する前の話し。

私は、規格外だったけど人間の範囲で納まっていた。

そんな懐かしすぎる昔話しの、遺物。

「無理ですよ。俺はこうして生まれ、加護を得てしまいましたから」

再び、男は爆弾発言を投下。

加護って言うのは多分、物作りに関して。

出会わなければ。

それ以前に気付かなければ。

役割を思い出す事もなかったはず。

話の急展開に、私以上についていけない兄様と影たち。

さて、どうやって説明しようかな、なんて小首を傾げるといって可愛らしい動きを試してみるけれど、珍しく効果はないみたい。

今はそれよりも、この男と私の関係性に興味があるのかな。

でも今は、兄様たちよりも男との会話を優先させる。

「それは強制じゃないはずだよ？

強い願いであっても…ね」

そんな言葉を相手に言い聞かせるように紡いではみるけれど、多分無理だって思ってる。

既に忘れ去られた過去に拘ってどうするんだろって、今の私は

思っただけだね。前みたいに、矛と盾が必要な時代だったらわかるんだけどさ。と、私が心の中で言葉にすれば、男はそうじゃないとばかりに首を横へと振る。

「理屈じゃないんだと思いますよ。」

素質のある魂に加護を与え、護る。彼らはきっと知っているんです。魂同士の共鳴が起こる時代を。だからこそ、会わなかったですよっ?」

矛と盾に。なんて男が意味ありげに笑みを形作れば、兄様の機嫌が更に急降下。男とすっかりと話したい気もするけれど、とりあえずはやっぱり兄様と影優先かななんて、レイとしての意識が働いた私は男に待てと言わんばかりに手の平を突き出すように見せた。

「今の私は、私の生活が大事なのね。」

レイとしての時間は貴重で、貴重すぎるから…邪魔されたくないの」

そつと兄様の腕を取り、体重を乗せるようにしがみ付く。

すると、私にしがみつかれたままの兄様が真っ直ぐに男を見据えたかと思うと。

「君の作るものに興味はあるけど …… いらないや。今、レイはレイとして生きてるんだ。君の望むレイが遠くない将来、君の前に立つ事は僕でもわかるけど。それでも…甘やかせる時代は僕にとって大切なんだ。邪魔、しないでくれないかな」

兄様には珍しい声音で、淡々と言葉を紡いでいく。

私がレイとして、庇護の下で生きられる時間は少ないとは思っていたけれど。

兄様も感じ取ってたんだねって思えば、表情はなんとも言い難いものへとかわる。」

「…わかりました。ライディアス様、貴方には定期的に送ります。加護を得ている俺の作ったものは、他の追隨を許さない程度には便利なものですからね。」

それとレイ様。貴方の周りで本来ならばありえない事が起こったと思います。…それはきっと予兆ですよ。ありえない事は、恐らく余波を受けての事。」

「さっき気づいたばかりなのに、すごい変わりようだね?。」

初めは話を黙って聞いてただけだね。

さっき気づいたばかりなのに、私の事をわかっているとばかりに言葉を紡ぐ男に、私は薄ら寒い笑みを向けてみた。

男のこの変わりようも、言っている理由もわかるだけだね。

「霞が晴れただけですよ。」

そう男は笑う。

まあ、いいんだけどさ。

この後、兄様や影たちへの説明をするのは私だと思っちゃおうと…。

はあ、と溜息を落としたりくたりながら、男に対して素っ気無い言葉  
を返していた。

とりあえず定期購入の話をしてから、私と兄様は男の元を離れた。

男の名前は、ピーコック。堂々と偽名と言い切る辺りがなんとも言えないんだけど、兄様は突っ込まなかった。既にその気力がなかったのかもしれない。

珍しく、というより普段では考えられない沈黙。

私を守る影たちからも何もなく、守られている感じはするもの。ただそれだけ。今の出来事の疑問などを口にする事なく、ただ空気になっていきますと言わんばかりの態度。

聞きたい。気になると言われるよりもチクチクと説明を請求されている気がして、普段とはかわって繋いでいない右手に視線を落とした。

いつも繋いでいる手は珍しく自由で、それが手持ち無沙汰だと思えば自分の浸りっぷりに笑いたくなるけれど。

なるけど、笑いを零せる状況でもなく、口を固く閉ざしたままひたすら兄様の少し後ろを歩き続ける。

ちょっと、じゃなくてこの空気はかなり嫌かも。

なんて言おうものなら、じゃあ…と話しが続くのは目に見えてい

る。ある程度は話す気ではいても、話しすぎる必要はないと思っっている私のルーツ。地層のように積み重ねられた私の記憶。知識について共有している影といえども、今回の件に関わる記憶の最下層につ



いてはやっぱり、層が多すぎてたどり着けなかった事が判明。

初めて影を持って共有したから気づかなかったけど、私ではないから共有に限度があるらしいとわかったのは今後役にたつのかどうなのか。

そんな、普段は兄様の前では考えないような事を考えてはみたものの、やっぱり手持ち無沙汰なのはかわらない。

そう考えると、私が多少は規格外ではあってもまだ人間だった頃の話が出来る可能性があるピーコックという存在は、過去を懐かしむつもりがあるのなら重宝すべき人になるのかもしれないけれど、やはり戸惑いの感情が先に表に出てくる。

「（後回し後回し）」

まだレイ。兄様に手を繋がれている、レイ。

自身に言い聞かせるように、音には出さずに言葉を紡ぐ。

今のレイに過去を懐かしむ気はさらさらないのだ。

が、ピーコックが話した内容で聞き流せないものがあつたのも事実。それについては後回しにすれば自分が手痛い目に遭いそうな気もするのだが、別の意味で捉えれば楽しみだといえるのかもしれない。

気づかれない程度に兄様を見て、視線をぐるっと一周させ影たちを見る。

内へと隠そうとしているものの、非常に素直な反応に私の口からは漸く私らしい笑みが漏れた。

必要以上に緊張していたのね。

肉体に引つ張られるからか。それとも刻の賢者なんて大それた名前が薄れてきているからなのか。

魂に促されるままに英知を極めた私だけでも、この場所で子供として過ごすのは存外気分がいい。

迷子防止の為に手を繋ぎ、影に見守られながら兄様と歩いてく。

右手は今、お休み中だけど。

でもきつと、明日になれば元通り。

それは私の願いに他ならないんだけどね。

そうは思いながらもやっぱりこの沈黙の中歩き続けるのはちょっとキツイと、前置きもなく足を止めてみた。

いつもよりも私に対する集中が薄いのか、兄様も影も数秒は気付かずに歩き続けている。だけど私の気配が離れていく事に気付いたのか、兄様が足を止めて驚いたように目を見開いて後を振り返った。

影たちも私を凝視するように見つめてるのがわかった。

普段は消している姿。でも、今は空気が揺らいでる。相当動揺したのか、消せるはずの姿も消せないってどんな心境だったんだろう。足を止めたただけなのに。

物言いたげな表情は私に向けるんだけど、口を開く気はないみたいで相変わらず口を噤んだ状態。

どうやって言葉を発するか。

発した瞬間は雪崩のように言葉があふれ出すんじゃないかっていう気持ちから、多分言葉自体を発する事が出来なくなっちゃっただけだとは思っただけだね。

沈黙ばかりじゃちょっとイヤだなって思う私がいる。

そんなに知りたいんだねと、複雑な眼差しを向ける私もいる。

今回の件に限りじゃないけど、刻の賢者については話す必要性を一切感じていない私と、知りたい兄様と影たち。

真っ向から対立所の話じゃなくて、完全な平行線。

私の願いはきつと、私自身の手によって叶えられないんだなって物悲しくなりながら、ここで私は一つの覚悟を決めた。

「ねえ、兄様。私は、まだ、レイで居たいって思ってるんだけど、それには私の過去は今ではあえて不要だと思ってるのね。

でも、兄様たちはそれを知りたいって思ってる。

私は話す気がないから。話す必要性を感じてないから口を閉ざしてる」

ここで一回言葉をきって、スウと酸素を取り込んで次の言葉に備えた。

「でもね、仮に話したとしたら 話せる程記憶の細部を思い出し

たとしたら」

言葉にする事によってあやふやだったものが、明確な形を持つような気がするのね。私の中でだけど。

「私はきつと、私が刻の賢者である事を完全に思い出すと思う」

私の言葉を聞いた面々に困惑の色が浮かぶ。

きつと、意味がわからないんだよね。

私自身ちよつとあやふやなんだけど。ここ一世紀といわず二世紀…三世紀ぐらいかな？ 多少記憶を呼び起こす事はあったとしても、明確に言葉に出した事なんて殆ど無かったのね。

自分が刻の賢者だって自覚は勿論あるんだけど、肉体に引っ張られて魂の本来の姿が薄くなって。という感じで、今のレイみたいな状態になってただけど。

まあ、ここまで魔力を蓄えられる身体は久しぶりだから、この前や更に前と比べるとちよつと違うかもしれないけどさ。

けれどこの肉体だからこそね。

話し出したら思い出せちゃうと思うんだ。

今まで以上に。

だから、私はあえてこの言葉を告げようと、重たくなってしまった口を開いた。

平然なフリをして、微笑さえ浮かべて。

言葉を紡ぐ。

「そうなたらきつと、今のレイではなくなるかもしれない、ね？」

「「「 ツ！?」「」」

私の言葉は、兄様や影たちの表情を一変させた。

うん。そうならなかったら、ちよつとへこむんだけどね。驚愕に見開かれた後、歪められる表情。

人間らしい葛藤の表情。

今の私を、レイを惜しんでくれてるって事だと解釈して…それはちよつと嬉しいねと微笑む。

「私にとっては特に問題視するような過去ではないと思うけど聞きたいなら聞きたいって言って。」

そしたら話すから。思い出せる範囲で包み隠さず、ね」「

呼吸をする事を忘れてしまったかのように、兄様と影たちは動かない。

ううん。動けないんだと思う。

「取りあえず、今日から暫く距離は取るね。  
今は……私も距離をおきたい心境だし」

だから選んでいてね。

と、最後に言葉を残して私は転移を発動させた。

私の影にも追えない様に完璧に気配を消してね。

またね。

と、音にならない声で呟きながら。

消えた。

センタクノトキ・2 (前書き)

主人公の葛藤編。



## セクタクノトキ・2

「それはレイ様が意地悪だよ」

と、にごやかに言っただけなのは、ついさっき別れたばかりのピーコック。

「ちょっとはね、自覚はあるんだけどね」

そう私が言ってみれば、ピーコックは首を横へと振るとやっぱり笑顔を浮かべたまま1回縦に首を振る。この場合は自分の意見を確認。で、やっぱりこっちの意見が正解だねっていう首振りなのかなと思わなくもないけれど。

「ちょっと？　かなり、の間違いだよ。だってレイ様は、生まれながらに刻の賢者だからね。例えば記憶が甦ったとしても、違いは多少で済むだろうに」

改めて言われて、私はそう？　なんて目線を泳がせながら首をちょっとだけ傾げる。

「この身体の資質は近いっていうのは認めるんだけどね」

それはね。認めるよ。というより、認めざるを得ないから認めち

やうただけどさ。さつきから言い訳じみた言葉を口にしてる私は、  
気まずさを誤魔化すように両手を組んでみたり指先を絡めてみたり  
してみた。

それにピーコックは何も言わず、私の前に置かれたのはココア。  
甘い、飲み物。

「単に、口に出せば自覚が生まれます。生まれたらきつと、レイ様  
は刻の賢者としてやるべき事をやると思うよ。」

それを、遅らせてあの兄君たちの近くでのんびりと過ごしたいん  
だよな。」

遠慮がないというか容赦がないというか、ピーコックは私の反応  
など意に介した素振りは一切見せずじぶつ切る。この性格でよく  
兄様と会話が出来たなって思うけど、やっぱり猫を被っていたんだ  
よね。

「良い傾向なんじゃない？ レイ様が、甘える、って事を選択して  
るんだし」

「……基本的に、盾と矛は私に甘いと思うのよね」

ピーコックの言葉に、私は脱力を覚えながら顔を机に突っ伏した  
状態で言葉を吐き出す。レイになってから始めての喧嘩で、正直さ  
つきからものすごく落ち着かないんだけどね。

もう一度溜息を落としてから、指先を動かした時にあたる感触。  
結構熱いそれは、ピーコックが煎れてくれたココア。

糖分をとって落ち着けという事なのか、それとも子供は甘いもの  
が好きだよなと思うているのか。判断に迷うので考えずにとりあえ  
ずココアをいただく事に決めた。

「コクン。と喉を動かす度にココアの甘みが吸収されていく気がする。」

「美味しい」

「私好みの甘さ。ミルクの量。」

「盾ですから」

私の言葉に、あっさりと言う。ピーコックに逆に私が動きを鈍くさせた。それを言ってしまうと全てがそれで済んでしまいそんな気がするから、私自身はあえてそこは触れずに済ませておく。

さっき、その盾と刻の賢者の件であんなに気まづくなっただばっかなのに、こうして本人と会って話すのはどうなんだろうと思わなくもないけれど。

「今回は影を作ったんだね。初めから俺たちを呼べば良かったのに」

ピーコックは遠慮なく、私にとってどうしようもない言葉の数々を降らせてくる。この場合はもう少しオブラートに包んでというべきか、呼んでも無駄とはつきり伝えるべきか。どうなんだろう。

悩んでも結局良い言葉は思い浮かばず、私はココアを飲みきった。

「矛と盾の記憶は受け継がれる。それは刻の賢者であるレイ様を護れる様に。ただ、自身の魂で生まれ変わるレイ様とは違って、矛と盾はその星で相応しい魂が存在しなければ生まれられないから呼ばないのもわかるけど」

「うん」

「力行使する事を嫌うのも、今の俺には理解できませんけどね。王族に生まれて、自分と共に生きてくれる存在と契約を結んだ理由も、わかりますけどね。でも、今回は意地悪をやっちゃいましたね」

にこやかに、本当ににこやかに話すピーコックを、何故か実力行使で黙らせなくなったのはどうしてだろう。

多分、言ってる事は殆ど正解。

それは私にもわかる。けど、自覚が生まれたら兄様の妹としてのんびり過ごす事なんて出来なくなるもの。

そうになった私と、一般人である兄様の時間が噛み合うとも思えない。

そこまで考えて、私は両手で顔を抑え付けた。

「影たちには刻の賢者である私を選んでも不思議じゃないと思うのね。だって、刻の賢者の私だから契約を結べたんだし」

普通の姫君だったら、兄様が選んだ人物と影の契約を結んでた。

「でも…」

言葉を詰まらせる私の頭を、優しく撫でてくれる。

「言わなくていいですよ。俺は、盾ですから」

役割を思い出して自覚した俺には 言わなくても伝わります。

頭を撫でながら穏やかに言葉を紡ぐピーコックに、私は無言のまま顔を伏せた。

本当の意味で選択を迫られているのは私自身だと、気付いてはいたのにそっぽを向いて困らせた。

そんな事は、今更言われるまでもなく自覚はしているんだけど…。

兄様にはレイを選んで欲しいと、もう少し甘えたい私の本音。

それを口に出せたらこんなふうに困らなかつたのかなと、器用そうに見えて実際はただの不器用だった私というモノを自覚しながら、目を伏せると同時に溜息を落とす。

「貴方は、何処までいっても刻の賢者でしか在り得ないですよ」

私の葛藤を他所に、ピーコックは選択した言葉を紡ぐ。

刻の賢者の矛としての言葉に、私はそうだろうね　なんて態と、

他人事のように言葉を返した。

センタクノトキ・3 (前書き)

レイ視点から白兔視点です。

初めは特殊な、だけどただの人だった。

怪我をすれば血を流し、大怪我を負えば死んでしまう。力を行使しすぎれば精神が磨り減って自分を維持するのは難しい。

特殊な力を持っているとはいっても、普通の人間だった。けど、今は人間だった頃にすり減らした命の分だけ魂は強化され刻を渡る。系統的に時間を操るとされる魔法を得意としていたというだけで、いつのまにか人々から刻の賢者と呼ばれただけだったというのに、いつのまにか本当に刻を渡れる存在になった時はつい笑ってしまった。

誰の願いが叶ったのか。

それとも、特殊な魂を持って生まれた自分の稀さを嘆くべきか。

未だに答えは出ない。



「そうですね。食い破られた、というわけではないですよ。元々、同化したという言葉の方が適切かもしれませんね」

ピーコックの話を聞いていたんだけど、やっぱり盾と矛の制度は納得がいかななくて微妙な眼差しを向ける。

すると、私の眼差しに気付いたのか、ピーコックが苦笑を浮かべた。

「傍から見ると、乗っ取られ　と解釈するかもしれませんがね。でも、選べるんですよ？　レイ様は知らないでしょうけど」

「選べる??」

「特典というものには付き物で。俺の場合は作る物に関しては他の追従を許さない程の才能を持っているわけですが、ある意味、加護を得た特典でもありますよね。」

日常生活に支障なく、俺の場合は脳の能力全てを使い切る事が出来ます。それは、レイ様も同じだとは思いますがね」

その言葉に、私は小さく頷く。私自身も、ピーコックと同じく他の追従は許さない魔力を持ってはいるけれど、それを行使できる精神力も兼ね備えている。

人間の容量を一瞬で超えてしまうような力を行使しても、私には何の問題も無い。けれど選べるってなんだろうと、言葉の続きを足してみる。

「…才能を眠らせる事を選べば、自然と盾の力はなくなるんです。」

しかも、開花する前に選べるというか。それまでは寝物語のような感じで頭に入ってくるんですけど、それを見ながらどうするか自分で選んじやうんですよ。だから、相応しい魂がいても、最終的には選択ですね。

単に俺は、貴方の盾になる事を選んだ。ただ、選んだ後も貴方に会える保障はありませんから、出会うまでは眠らせるんです」

出会えなければ、盾の精神は容易に崩れてしまいますから。と当たり前のように言うピーコックに、私の頬が引きつる。

盾や矛に会う事自体、生まれ変わった回数から考えると多くは無いから気にしなかったし、それに押し付けられた役目だと今までは思っていたんだけどね。改めて話を聞くと言葉に詰まるというか……。一体どんな寝物語を聞かされてたんだろうと気にはなるんだけど、内容を聞いた瞬間転げまわりたくなりそうなお内容もありそうで、私は聞く事は諦めた。

寧ろ、自分の為にも。

「レイ様と話して、レイ様の魂を感じて、俺は目覚めたんですよ。今は、頭がすっきりしていますね」

「寝ぼけてたの？」

「ええ。寝ぼけです。今ではこんなにはっきりとした眼差しでレイ様を見ているでしょ？」

「……………」

初めに盾と呼ばれた存在もはっきりしていたと思っただけぞ。ピーコックも何か通じるものがあるというか……。どちらかという性格が似た人が選ばれるんじゃないや？なんていう疑惑の眼差しを向けそ

うになるけど、やめておく。

あえて言わないでいる私に、ピーコックは笑みを零しながらも椅子から立ち上がると。

「今日はお泊りですよね？ お布団準備しますから、一緒に行きませんか？ 見ているだけでいいので」

にっこりとした笑顔は崩さずに私に聞いてくる。

…ああ。起きた後で刻の賢者から離れたくないのね。

私は1回頷くと、席を立ちピーコックの後に続く。今頃兄様と影たちはどうしているんだろうなあ、と、そんな事を思いながら。

姫さんのいない空間。

姫さんの存在を感じ取れない世界。

あの時と同じで、心が迷う。

転移で国に帰って姫さんの兄を部屋へと放り込んだ後、俺たちはそれぞれの部屋へと籠った。黄兔と緑兔も珍しく別々の部屋へと消えていく。

俺：あいつ等の別行動って初めて見るよな。

まあ、そんな事を考えながらソファアへと深く身を沈める。いつもだったら姫さんと話したり姫さんの散歩に付き合ったり、本を読んだりとやりたい事は山ほどあるんだけど　　：珍しくというか、なんというか、何もやる気がしない。

多分、姫さんの話は半分本当。半分は願い。

「当たってると思う。けど、姫さんが選択を迫ったのは、本当だしなあ」

ソファアに深く沈めていた身体を起こし、今度はうつ伏せ状態で横になる。今日は身の置き場所に迷うというか、落ち着かないというか。

忙しなく身体を動かしてみるが、動かし続けていても一向に落ち着く気配は無い。

理由は一つしかなくて、俺は握り拳を作りそれを机へと叩き付けた。

「木っ端微塵にしたら落ち着くか」

そしてそのまま仰向けに転がり、物騒と思われる言葉を一つ音に

して吐き出す。前みたいに、何も考えずに壊すだけだったらきつと、今頃こんな痛みは感じないと笑いが漏れる。

俺の召喚獣になつたはずの兎は、こういう時に限って表に出てこない。それ所か、俺に話しかけようとさえしない。

ある意味俺以上に姫さんとは繋がつた部分がある兎は、俺以上に姫さんの状況を分かつているんだろつとは思うが…。俺に話す気はまったくないんだなと舌打ちをしそうになるが、それを押さえた。後々、根にもたれる。

完全防音になっている俺たちの部屋は、部屋の主が応えない限りその部屋で何が行われているかは一切わからない。

だから、今は俺の部屋で俺の動き音がするぐらいだが、他の影たちはどうしてるんだろつなつて、ちよつと気になつた自分に笑つた。いつのまにか、俺には姫さんだけじゃなくなつていたらしい。まあ、優先すべきは姫さんで、一番大切なのも姫さんで、他は共同戦線を張つてるといふ感じだけどさ。

一頻り笑つた俺は起き上がると、黒兎の部屋のある壁へと手を付き声をかける。

「黒兎… 応えろよ」

俺が手を当ててる部分には、魔法石が埋まっている。外からは干涉不可の空間だが、唯一、これを通しては声をかける事が出来る。中の存在が応えない限り、一方通行でしかないけど。

「…白」

「俺は白兔であってシロじゃないだろ。っていうのは、まあ…置いてくか」

本題は別にあつたよな。

重要な、ヤツ。

油断すると俺の名前を省略してシロと呼ぶのは、黒兔の今更な癖だ。姫さんの前で言わなくなったただけでもマシだしな。

「俺だけじゃ迷う。というより壊したくて仕方ない」

それを言った俺に、黒兔の溜息が聞こえた。

姫さんがいなければ、影長である事自体怪しくなる俺の性格をよく分かっているのは黒兔だけど、今の溜息はどっちだろうな。

迷う俺に、珍しく黒兔が声を出して俺の言葉に応えてくれる。

「俺も、迷う。だが、これは、姫様の、区切りだ」

「ああ。本当の意味で選んで欲しいのは、俺たちじゃないだろうしさ」

「…でも、俺たちも、選ぶ」

黒兔の言葉に、俺の口からは苦笑が漏れた。

「黒兔、俺が茶を煎れる」

で、俺の取りあえずの返答はこれ。真面目な話しを逸らすっていうよりは、顔を見て話したいっていう俺の意思表示。

そつだよな。

黄兎や緑兎に俺は相談はしないが、黒兎は別だな。付き合いが黄兎や緑兎に比べて少しだけ長いっていうのもあるけど、姫さん以外じゃ俺は黒兎とよく話す。

今の俺の心境を考えると、誰かと心底話したいっていうのが根底にあるわけだけど、最終的に選ぶのは黒兎。

だけど。

「菓子は、俺の。部屋に行く。開けている」

「ああ。開けたから、準備が出来たら入ってこいよ」

黒兎だけに扉を開く。

俺の心境がわかったのか、俺を気遣ってくれたのかはわからないけど。俺の部屋に入ってきた黒兎も俺と似たような面だった。

まあ…考える事は同じだよな。

多分さ。

センタクノトキ・4 (前書き)

緑兔視点のお話です。



姫様から貰った部屋は俺にもある。ただ、俺と黄兔はいつも一緒にいて、本来の俺の部屋は荷物を置きに入る程度。自分の部屋だから居心地はいいけれど、黄兔がいないとおかしな感じがすると、何とも言い難い表情を浮かべたまま、俺はだらしがなくソファーへと倒れこんだ。

でも、今日は別々に考える為に、久しぶりに離れた気がした。物心ついた時から一緒にいて、力を合わせて生きてきた。姫様と出会ってなかったらきつと、俺は死んでいるかそれとも光は見れない世界にいたかのどっちか、なんてあっさりと笑みを口元へと貼り付ける。

俺以外の影たちがそうであったように、俺にも力がある。それは人の世では異端とされ、忌み嫌われる類のもの。

黄兔と出会って、姫様が笑いかけてくれたから俺は今笑ってる。

「…はあ。俺は、そうだな。どうなんだろう。姫様が頼るのは主に白兔で、甘えるのは姫様の兄で、俺や黄兔は自由にさせてくれてて

あー、黒兔はなんだかんだいって、白兔が頼ってた」

年齢的には然程変わらないのに。と力のない声で紡いでみるが、誰にも聞かれる事のない音はそのまま空気へと溶けていくだけ。

俺の頭は何から考えていいのかわからない程混乱してるけど、それでも音にして呟いてみる。

「影は、全部伝わらない。姫様の生きてきた年数は、俺たちが考えるよりも遥かに長い。でも、盾ってなんだ？ 盾が必要なのか？」

俺の中に受け継がれた姫様の記憶は、のんびりと過ごしているものばかり。人智を超えた存在である姫様が今回や前回みたいに、人

の世に紛れて暮らしてみたり。後は賢者として研究に没頭したり。

危険な場面の記憶は今の所見た事がない。多分3・400年は記憶を遡って把握は出来てるけど、おそらくそれより前。

考え始めればきりがないと、俺は頭を抱えるように蹲った。

知りたいけど、蒸し返したくないという感情が胸を支配する。

400年前以上の話を蒸し返して、聞き出して、それで俺たちはどうするんだろう。刻の賢者としての役目ってなんだろう。

そもそも、俺たちはそれがわからないし、姫様がこうやって転生を繰り返すようになった理由もわからない。

元々知ろうとも思ってたけど、実際目の前で俺たちの知らない姫様を知っている存在が現れた瞬間知りたくなっただ。

「姫様が刻の賢者か。どっちも姫様じゃないのか？ 数年後には思いつくけど、思いつくまではのんびりと過ごせる」

独り言を重ねる事で俺は、自身の思考を纏めようと試みる。

俺が暗闇から出れたのは姫様が刻の賢者だったから。だからこそ俺たちは影になれた。

なれた、けど。と俺はここで思考を中断させて、黒兎の部屋に向かって話しかけてみる。

「…返事がない」

つまり、白兎の部屋かと俺は向きを変えた。この話は、黄兎とは相談しない方がいいだろうと俺の感が言ってる。

理由は俺の中であやふやな、でも形にはなってるから相談はしない。

おそらく初めての事。黄兎の方からも俺に何も言っていないって事は、きっと俺と同じ考えだと思っし。

「白兎ー。そっちに行ってもいい？」

年はそれほど変わらないはずなのに、白兔や黒兔は俺よりも遥かに大人に感じる。幼さを感じさせない洗練された空気を纏う二人だから、だろつか？ それとも立場の違いだろつか？

もしくは素質？

ゲッバケ  
月白と緋色の眼差しゲッバケの白兔と、漆黒と董色の眼差しゲッバケの黒兔。顔立ちゲッバケは二人とも整いすぎていて、背丈も年齢の割りに高く体軀も無駄なく鍛えられている。

対のような二人は、常に姫様の両脇に控えていて、自由に遊びまわっている俺とは大違い。

はは、と、無意識に笑いが漏れた。

その時視界を掠めた光景は、部屋に一輪挿しの花が時間を早送りしたかのように、変色しながら朽ちていく。

「…漏れた」

久しぶりに見る光景だな、なんて笑いを漏れながら俺は自身から漏れ出した力を影の力で抑えつけた。

それと同時に白兔からの返答が届く。

「ああ。黒兔もいるけど…珍しいな」

しみじみといった声音が届いて、やっぱりそう思うんだと何故か苦笑が滲み出る。俺自身もそう思うぐらいだから、傍から見るとそれはもっと強いのもかもしれない、なんて思いながら白兔が開いてくれた通路を遠慮なく通った。

机の上に並べられたのは、白兔が煎れたであろう紅茶と、黒兔が作ったであろうお菓子。

悩むという表情、じゃなくて、既に答えは出ているような二人の態度。

「もう答え出たんだ」

つい口から出てしまった言葉に、俺は咄嗟にばつが悪そうな表情

を浮かべたけど白兔も黒兔も流してくれる。

二歳しか離れてないのに、と、思った瞬間何故か目の前には黒兔の姿。

「…何？」

「俺と、白兔は、年寄りくさい」

フオーしてるんだか、してないんだかよくわからないけど。きつと黒兔なりに俺の思考を感じ取って言ってくれたんだと思う。

「年寄りくさいって…せめて老成とかそっぴい言葉だろ？」

何となくずれた事を白兔が言いながら、二人は顔を見合わせてそうか？なんて黒兔が首を傾げ、白兔が頷いてる。

頷いていた白兔が何気なしに俺を見て、その端麗な眉を微かに顰めたかと思うと、徐に俺へと手を伸ばしてくる。白兔が俺に何かをするわけもなく、俺は動かずに白兔の手の動きを見ていたら頭をわしゃわしゃと撫でられた。

「……何？」

さっき言ったばかりだけど、今度は白兔へと聞く。

「ちよつと漏れたか？」

けれど白兔の口から紡がれた言葉に、意識せずに俺の肩が揺れた。何でも敏感なんだ？ 影長だからわかるのか、と答えは出るもの、まさか気付かれるとは思っていなかったただけに動揺が広がる。「…たく…いや、仕方ないか。ちよつと静かにしてろよ」

元々抵抗するつもりもなかったけど、俺は白兔の言葉に瞳を閉じた。これは懐かしいのかもしれないと思いながら、白兔の力を受け入れる。

影長をしている白兔は、他の影たちのバランスを整える力がある。これは、俺が影になった当初にはよくやっつけてもらった事。力の調整が出来てないから、外部から白兔が整えてくれてるんだけど、俺を包むほのかに温かい光につい笑みが漏れた。

「漏れそうだったら俺の所に来いって」

多分、白兔にとっては当たり前の言葉。

影長だからとかそんなんじゃないやなくて、白兔自身にとっては当たり前の行動。

「わかってるよ」

まさか漏れるとは思わなかったといえば、眉尻を下げるように白兔たちが表情を歪めた。

姫様の件で俺がゆれていて、力が制御出来なかったというのは今更。

揺れているのは影たち全員だけど、俺が黄兔と離れて一人で膝を抱えているなんて思わなかったんだろうと思う。

それほどに、俺と黄兔は一緒にいたから。

「…白兔や黒兔は決めたわけ？」

ソファに腰を下ろしながら、膝を抱えて蹲る。

聞いた所で答えなんてかわらない。

俺の答えはもう出ているから。

「俺は…お前もか。決めたな」

白兔の言葉を遮り、黒兔が口を動かす。言葉を発する事が珍しい黒兔は、話さなくていい場面だったら一切声を発する事はしない。

口を開く事すら億劫になる瞬間がある黒兔らしいと見ていたら眼が合う。

何か言いたそうだな。でも戸惑っているようなそんな態度。

「俺も決めたよ。だから離れてる」

別に喧嘩をしたわけじゃないといえば、二人からは安心したような息がもれた。本当に俺と黄兔はワンセットなんだな。否定はしないけど。

そして一緒にいないという事が白兔や黒兔にこれだけ心配をかけ

るなんて、今始めて知って。正直驚いた。

二人は俺と違って、全く気にしてないと思ってたし。

生きてさえすれば、見つかる可能性が増えるかもね。

出会ったばかりの頃、姫様に言われた。

黄兔しか大事じゃない。それ以外に出来るはずがないと言えば微笑まれ、そんな言葉を紡がれたのは未だに脳裏に焼きついている。

綺麗事だ。見つかるわけないと否定はしたけれど、姫様は微笑を浮かべて俺から視線を外さなかった。

今となっては懐かしい思い出。

「俺は…姫様は姫様のままでいいと思う。刻の賢者としての役目だかなんだか知らないけど、どうせそうなったら色々な奴等が姫様の周りをうるつくんだろ。」

それなら、少しでもものびた方がいいに決まってる」

俺の本音に、白兔も黒兔も笑みを浮かべる。

でもきつと、アイツ等は違うんだろ。なんて思ったけれど。

## セクタクノトキ・5

僕の生き方は、守られる。だった。  
守られて、守る。

緑兎が僕を懸命に守ってくれて、僕はそれに守られながらも決して緑兎の手は離さない。

僕は緑兎の弟で、守るべき対象。

緑兎が、僕を守る事で生きていこうとしていた事を知ってる。  
僕だけは裏切らないという事を理解していた事をわかってる。

けれど、ずっとずっと思ってたんだ。

僕だって守りたい。共にいるよ、という心の約束だけじゃなく、

緑兎を傷つける全てから守りたかったんだ。

そして願ってた。

他力本願だったけれど、この異能を抱え込めるような人が現れる  
事を …… ずっと願ってたんだ。

緑兎は自分の異能が嫌いで、でも切り離せないものだって理解してた。  
だからこそ、それさえも包み込めるような存在が欲しかった。

勿論、緑兎だけの為じゃなくて…… 僕も、僕のを能力を陵駕出来る  
存在を求めてたんだ。

だからこそ姫様に出会えた時は、柄にも無く神様というヤツを信  
じる気になった。

僕よりも小さな手を伸ばして、綺麗な微笑を浮かべる。

「貴方たちの力は私に比べたら微弱だよ。どこか、異常なの？」

あっさりと言われた言葉は、僕たちが求めていたもの。

普通じゃない。

化け物だ。

殺される。

いつでも畏怖の対象であり、僕たちは恐怖だった。

その僕たちを上回る絶対的な存在。

姫様は、僕が求め続けた存在だったんだ。

「緑兔」

結論なんて出てるけど、一応珍しく緑兔と距離を置いてみた。僕の答えは迷う事無く決まっているけれど、緑兔はこんがらがってたし。

いつも一緒にいる僕たちだけど、少しぐらいは一人の時間を作ってもいいかもね。なんて思ってたから丁度良いきっかけだったんだよね。



けれど石に話しかけても無反応。これは部屋にいないんだろうな  
って思うけど、多分行き先は白兔の部屋。

なんだかんだといって、白兔の所に集まるから。

影たちの長であり、姫様がいなくても僕たちの力を制御出来る白  
兔。姫様という刻の賢者から与えられた力の差か。それとも素質の  
差か。

白兔にとっては有り難くはないんだろうけど、力を使い磨いてい  
た白兔の能力は影たちの中でも一線を画している。

黒兔は声を出さないようにしていたし、緑兔や僕だってなるべく  
人と接しないように生きてきた。だからこそ僕たちの力は、身体  
の中で今にも破裂しそうだった。その力の塊を姫様が昇華してくれ  
たからこうして生きているんだけどね。

「白兔」

僕は呼びかける石を変えて白兔へと声をかける。

白兔の部屋に集まっているならもう答えは出ているんだろうけど  
…。大体予想はつくよね。誰がどう思っているかなんて。

そんな事を考えてたら口から笑みが漏れてた。久しぶりに浮か  
んだ嫌な笑み。緑兔と遊んで、姫様のいる場所が分かっている時は  
絶対こんな気持ちにはならないのね。姫様がいないと不安定にな  
る。

それはきつと、僕だけじゃないはずだけど。

「黄兔か。こつちに来るだろ？」

これで勢ぞろいだ。なんて声が聞こえて、やっぱり、なんて笑っ  
ちやった。

なんだかんだといって、僕たちは一緒に居るのが好きなんだ。

「じゃ、遠慮なく」

お邪魔しまーす。と、現れた扉に手をかけて一人分の隙間を開け  
ると、そこから見えたのは緑兔の姿。何処か気まずそうに右手を上

げちゃってるから、別の意味で笑いが込み上げてくるんだけど…。  
「何笑ってるんだよ」

面白くなさそうに眉間に皺を寄せる緑兔に、僕は軽く手を振ってみせる。

「深い意味はないんだけど、緑兔が気まずそうだから面白くって」  
気にしなくていいのに、って言えば、そうじゃないんだ。なんて  
歯切れ悪く言葉を漏らす。本当に僕と違って真っ直ぐな緑兔は眩しいね。

「浮気がばれた男みたいだよ」

ももごと口籠るんだけど、それもまた面白くてからかう様に言えば、次の瞬間には顔を真っ赤にさせて立ち上がる緑兔。

「なっ。浮気って別に浮気なんかしてないだろ！ 彼女なんていないし姫様好きだし！」

「別に緑兔の熱烈な告白には興味が無いんだけど。僕も姫様が大好きだし。それぐらい皆知ってるよ」

僕の言葉に、緑兔は尚更顔を真っ赤にさせて口をパクパクとさせてる。ご飯を強請ってる池の鯉みたいだね、とは言わないでおく。

これ以上からかったら、緑兔の事だから部屋に戻っちゃうだろうし。それに…。

「黄兔！。そろそろな。で、茶でも飲むか」

やっぱり白兔からストップが入った。止めた白兔自身がニヤケ面で説得力の欠片もないんだけど、それも今更なんだよね。

「黒兔力作のお菓子？ 珍しいね。姫様がないのに出すなんて」  
大体、というよりいつも姫様が一番。当たり前だけど。

「……」

「美味しいうちに食べた方が姫さんも喜ぶ。だつてさ」

「そうだね。姫様は…うん。僕たちの事が大好きだもんね」

いつも通りの白兔の翻訳。僕たちも大体はわかるんだけど、白兔程正確にはわからない。

「じゃ、食べよつか？ 僕はもうお腹ぺこぺこ」

別に今回の事で悩んだわけじゃないから頭は使っていないんだけど、昔を思い出してたら妙にお腹がすいたし。

「いただきます」

両手を合わせて、ぺこん、と頭を軽く下げる。

お菓子を咀嚼しながらも考える事は姫様の事。

姫様。何処にいるのかな。

身の安全は保障されてるだろうけど。寧ろ姫様が害されるなんて思っていないけれど。

でも。やっぱり居所がわからないのは寂しいよ。

黒兎の美味しいはずの力作のお菓子。姫様がいないと味がよくわからないって言えばきつと、姫様の事だからギュツとしてくれるかな…。

「うん。そうだ。今度は僕から姫様に抱きついてちゃんと意思表示しないと」

「ん？」

何の脈絡もなく僕が言った言葉に、緑兎から不思議そうな言葉が返ってくる。声に出さないだけで、白兎と黒兎の反応も似たようなもの。

「だって、姫様わかってないんだもん。

僕達がどれだけ姫様が好きで、大切に、離れられないって事。未だに影だから、って思ってるんじゃない？」

姫様って、そういう所鈍くてちよつとお馬鹿だよ。

いつもは姫様の事をそんな風に言えば白兎に不気味で怖い笑顔を

向けられるんだけど、今回だけは何も言われず無反応。頬が少しだけ引きつってたけど。

「だから、一段落ついたら僕は抱きつくんだ」

抱きしめられるのも好きだけどね。

ギュッとしてほしいけどね。

姫様が大好きって事だけは本当だから、珍しく僕からギュッとしたい。

そう言って笑えば、緑兎の困ったような視線とかち合った。

……。

うん。緑兎なら、そういう答えだと思ってたよ。

## ツナガルモノ・1

くるりくるーりと視界が廻る。

廻る廻る。

記憶が巡る。

「ああ…懐かしい」

本当に懐かしい人たちが、私に笑いかけてくれる。盾と呼ばれる存在と会ったからなのか、久しぶりに見れた笑顔。

記憶の片隅に追いやられてしまった、私の全てだったはずの存在。いつのまにか押し寄せる記憶の積み重ねに、大事にしていたはずなのにおぼろげになっていた。

彼と彼女がいなければ、私は今こうして生きてはいなかった。

「レイ様？」

ピーコックが心配そうに、私の名を呼ぶ。彼と同じ響きを持つピーコック。とても懐かしいけど、彼を見た後だと妙に虚しさだけが募る。

でも、と表には出さずに、私は一応…見えないかもしれないけど、笑おうと目元を和らげ、口元に弧を描く。けれどそれは、ピーコックの手によって阻まれた。

職人らしい大きな手。指先は長くて、骨ばっている。所々ゴツゴツと荒れた感じがするのは、職人ならではのなんだと思う。

「無理に笑わないで。俺と、彼の相違点は盾である俺が一番わかっているから……」

悲しげに微笑まれ、私は言葉に詰まる事しか出来ない。

確かに、違う。

それは別の人間だから、当たり前。仕方ないとかではなく、当たり前なのだ。

……うん。当たり前前で、何でピーコックにこんな悲しそうな表情を浮かべさせなきゃならないんだろう。

年ばっかとする割りに、一度はまりこむと中々脱出出来なくはなっていないんだけどね。それでも、私と比べるまでも無く。比べたら寧ろ可哀想だろうつていうぐらいの年の差のピーコック。そのピーコックに気を使わせ、私は俯いているだけ。

既に甘えて、答えは委ねているのに、いつまでもウジウジと。

なんか。自分にイラツときた。

「……………」

「レイ様？」

歪んだ表情を浮かべた後に押し黙った私を心配して、ピーコックが背を丸め、私の顔を覗き込む。

「ピーコックは…大人びてるね。」

白兎も黒兎もそうだけど……17歳だっけ？」

この時、あえて自分の年齢は考えないでおく。今の肉体年齢は10歳なんだけどね。魂年齢になると、既に数える事を放棄したくなるぐらいには時間が経ってるから。

「そうだけど。突然どうしたの？」

神妙な表情を浮かべていた私から、突然年齢の事を聞かれて驚いたのか、戸惑いながらも答えてくれる。

ピーコックも17歳。影たちも17歳。

元旦那や、シーファも17歳。

真面目な表情を浮かべながら、実際はこんな事を考えてるんだね。ふとね、何かが引つかかったのね。年の差の事を考えたんだけど、そしたら17歳ばっかだなあって。

兄様もそうだしね。大量発生っていうよりも、寧ろ多すぎてそこに星の陰謀を感じてしまう。

最近あんまりにも刻の賢者としての役割を果たしてないから。

…果たしてないわけじゃないんだけどね。

私が星を巡るだけで、ある程度活性化には繋がっているらしいから。私が刻の賢者の称号を得た星はあまりにも酷くなりすぎちゃって、私の生命力を注がなきゃ星の維持が出来なくなっただけ。普通の星だったら私という存在がいると、生命力が巡るらしいから問題なし。

問題なしなんだけど、私と星は切っても切れない間柄。不老不死という存在になったのも、元々は星がソレを望んだから。だから私

は元人間という位置づけになっちゃったんだけど…。

「ひよっとして…17歳ばかり？ レイ様の周りは？」

流石に、盾の記憶を受け継ぐピーコック。これだけの情報で、私  
が何を疑問に思ってるかわかったみたい。考えるように顎に手を持  
つていきながら首を傾げ、膨大な記憶の中から必要なモノだけを取  
り出す作業へと移る。

その様子を見ながら、私は自分の手の平を使って、パンツと小気  
味のいい音が響くぐらいの強さで、自分の両頬を叩いた。

「ッ！？」

記憶の波を漂っていたピーコックは、その音で現実に戻され  
たのか目を見開き、咄嗟に私の手首を掴んでその行為を強制的に止  
めさせる。元々一回のつもりだから問題はないけど、ピーコックが  
これでもかって程眉間に皺を寄せて、痛々しい表情を浮かべて私を  
見下ろしてくる。

「レイ様？」

オドロオドロとした何かを背負ってそうな程、気迫に満ちたピー  
コックは地の底から声を出すように低い音を吐き出す。

「大丈夫。一回だけだから」

「そういう問題じゃなくて」

「いいの。今回は自分に気合を入れたただだから」

「それでも俺たちは、レイ様が傷つく事が嫌なんだ」

捨てられた子犬のような揺れる眼差しで、私を見上げてくる。

さっきまでの地底の底から這い出すような威圧感はどうしたんだ  
ろうね。

この時ばかりは盾という存在の因果を感じずにはいられないんだ  
けど、その辺りはピーコック自身が受け入れたという事と、その前  
に選択肢があったという事が発覚したから考えないでおく。



「次はもうないから、大丈夫。ありがとね」

握力はないから、叩いてもあんまり痛くない所か、既に痛みは引いているんだけど……ピーコックはバタバタと忙しなく奥へと引っ込んだかと思うと、桶に水をはったものと柔らかそうなタオルを持つてきた。

予想はつくから、あえて突っ込まずにやりたいようにさせておいてね。

「痛い？」

「痛くないよ」

「今度やったら、壊すからね」

「…それ、既視感」

盾の力を持つ存在が言うと、この上なく物騒な言葉。

きつと、多分、恐らく実行には移さないと思っただけど、盾に選ばれる傾向を考えると油断は出来ないから、素直に頷いておく。

「兎に角」

「話しを逸らしたみたいだけど、兎に角？」

「……17つていう年齢。すぐく心当たりがない？」

私の言葉に、ピーコックの表情が露骨に曇る。

「勿論、ありますよ？ 彼の記憶は、17で終わってますしね」

改めて音にする事実、私は分かっていた事だけど衝撃を感じながら、もう一度頷く。

盾の記憶は17歳。矛の記憶も17歳。

そして…。

「私の、人間だった頃の記憶も17歳」

私の言葉に、今度こそピーコックは表情を消し、空を睨み付けた。

私とピーコックだけが感じる、星の策略。

好意かもしれないけど。でも、作為的なものを感じずにはいられない現実。

「まったく…影たちを求めたのは私だけだね」

思わず漏れた言葉に、ピーコックは首を横へと振るだけ。多分、選んだのは私だと言いたいんだと思うんだけど、ピーコックの場合は盾の記憶があるから、言葉にならないんだと思う。

「大丈夫だよ。星は 私には甘いから。だから、悪い結果にはならないよ」

「でもっ」

「そもそも、リーウエルが前世の記憶を持つてる時点で、気付くべきだったんだよね。横槍が入ってるってさ」

この分でいくと、どこかで宰相も転生してるんじゃないかなあ。

ああ、なんだかとっても混沌とするような予感がね。  
しなくもないんだけど。

「とりあえず……レイ様。整理しましょ」

「そうだね。とりあえず、ね？」

整理したら、兄様の答えを聞きに行つて…。

この時点で、兄様の答えがどんなんでも、迷うことなく受け入れられるなあ、なんてね。私としては妙な安心感というか精神的安定があつて、つい笑いを漏らしてしまう。ピーコックからは怪訝そうな表情を向けられているんだけどね。

だって、既に、刻の賢者として動く時期が決まっているんだもの。

これを策略と感じるのか。  
それとも愛されていると思つべきなのか。

判断には迷う所だけど。

私は後者を選ぶ事にしておく。

その方が、苦笑で済むよつな気がするしね。

それに、今更だし。と、もう一度笑みが漏れて、やっぱりピーコックは不思議そつな表情を浮かべてた。

## ツナガルモノ・2

思考が定まらない。

何を考えていいかわからない、というより、ただ寂しいという感情に支配されているだけののような気もする。

レイが遠ざかる。

それがひたすらに寂しくて、選んでと言われてもそれしかない自分には選びようが無いのが本音。

可愛い可愛い妹。例えその魂がどうであれ、10年間レイは僕の妹で、それはこれからも変わるとは思えない。

例え、厄介な人間が次から次へと沸いたとしても、レイがレイである事にはかわらない。だから、選ぶも何もないのだ。

ただ、遠いような気がして、それがショックで押し黙っていたという情けない事実を前に、レイが悲しそうな表情を浮かべた事は僕の失敗だと思っている。

この感情を知られたくなくて、レイを避けたのは他ならぬ自身身。

冷静になつて考えて見れば、拒絶と受け取られても仕方ないかもしれない。

レイ自身、拒絶されて当然という考えが根底にある所為か、気になり出すとそれは加速し、止まらないんじゃないかと思う。

だから、僕のした態度はレイにとっては深読みの材料になるだけ。こんなにも大好きで大切なのに、それが伝わってないのは悲しいけれどね。でも、それはこれから何度だって言える。

「答えなんて、やっぱ考えるまでもないね」

ないが、一步部屋の外へと足を踏み出せば、余計なものが纏わり付く。それは嫌だが、部屋の中に閉じこもっているわけにもいかないうという葛藤もある。

一方通行の連絡手段でよければ、手立てが無いわけでもない。本来ならそれは、通信機能を兼ね備えていないわけではなかったが、レイが拒絶している今はただ呼びかける事しか出来ない。

とりあえずは、とばかりに、僕は影の出入口の一つである扉の前へと立つ。

影の部屋には入れないが、こちらでも呼びかける事は出来る。

「白兔」

影長の名を呼ぶと、少し間を空けてから嫌そうな声が耳に届いた。

「…なんででしょうか？ 姫様の兄君さん」

相変わらず、白兔は僕の名前を呼ばない。それについてはお互い様で、特に何かを言うつもりはまったくくない。会話だけ成立すれば問題ないしね。

「レイへ連絡を取るよ。一方通行だけどね」

これだけ伝えれば十分だろうと、僕は身を翻して扉の前を離れる。きつと、白兔の頭の中ではその言葉の意味や、今後の事とか文字の羅列がものすごい事になっているんだろうけど、そんな事まで関与するつもりはない。

「君たちはいいいじゃないか。ずっと、レイと生きられるんだから」

だからこそ、本当はこの情報も伝えたくなかったといえは…。

レイ。

君は笑うだろうか？

懐に忍ばせてあつた宝石が、温かな熱を放つ。控えめに存在感を主張するソレ。本来の用途といえ、通信機能を兼ね備えているんだけど、私が外部からの連絡を拒絶しているから熱を持つ程度まで抑えられていたりもする。

拒絶しても届く理由としては、重要度が高いからなんだけど…。その宝石にジツと視線を落として考え込んだ表情を浮かべていれば、ピーコックが不安そうな眼差しを向けてきた。

確かに、ちよつと情緒不安定だったかもしれないけど。大丈夫だよ？なんて思いながらチラリ、と視線を向けてみれば…。

見なければ良かったと、かなり後悔する羽目になつたよな。

にこやかな笑みながら、心の奥では何を考えているか分からない表情。きつと、物騒な事を考えてはいるんだろうけど。

「ピーコック？」

どうしたの？

とぼけて聞いてみれば、なんでもないよ、と爽やかな声音が返ってくる。

「ただ、まだ未整理なのに連絡がきたのか空気読めよな、なんてまったく思つてないよ？」

「結構無茶な要求だよな」

兄様は知らないわけだし。

「いやあ…所詮盾はレイ様馬鹿だし。親馬鹿の域に達していると思

うね」

「威張って言う事でもないから」

しかも照れるから。

どうしてこんなにオープンな人たちが多いいんだろう。

何でだろう？

首を傾げながら考えてたら、ピーコックがこの時ばかりは妙にさめた眼差しを向けてね。珍しく。

「レイ様がオープンだからだよ。まったく隠さない代表が何を言ってるのかな」

そんな反論たっぷりな事を言ってきたから、咄嗟に首を横に振りながら右手を勢いよく上げてみた。

「はいっ。反論がある！」

「どうぞ」

溜息混じりに言われ、ちよつとムカツときたんだけど、それを言い出すときりがないから流してはおくんだけどね。

「私は結構隠すタイプだと思う！」

本音は隠して隠して、結果だけみれば、隠した分だけ混沌を招く場合もあるという悪循環を發揮するのは否めなくて。

最終的に力づくで解決出来ちゃう力があるから、それに甘えてる所もあるけれど。

やっぱりそんな余計な事。今はね、だけど。それらも端に置いて、ピーコックを真っ直ぐに見つめてみれば、苦笑で返された。

「レイ様は、ただ漏れです。漏れまくり。分かりやすい。隠してない。寧ろ隠せてないから。本人には自覚がないかもしれないけど、他者から見ると分かりやすいからね。今は、だけど」

「つまり、私のこれは昔の名残で、実際今は随分と分かりやすい性格になっているって言いたいのかな？」

「勿論」

言葉少なく返されて、私の肩からガクリ、と力が抜ける。

ものすごくシリアスだったはずなのに、なんでピーコックとこんなお馬鹿な話しをしているんだらうって思ったりもするけど。

「それは、レイ様の切替が済んだからでしょ」

と、言葉に出してないのに、ピーコックから返事が返ってきた。

この辺りは影と似てるかも、というより、影よりも感知出来ちゃうかも。

彼と彼女の影響だとは思っけどね。

「兎に角」

コホン。と顎に手を当て、分かりやすい咳払いを一回。

未だに存在を主張している懐の宝石について、何らかの回答を用意しなきゃいけない。兄様はきつと待っているだらうし。

「私はいつでも良いから、とりあえず返事を返しちゃうね」

少しだけ何うように下から視線を流してみると、今度は裏のないピーコックの笑みを視線がかち合った。

「いいんじゃない？ さっきは未整理って言ったけど、実際は整理する事なんかないだらうし」

「…そうだね」

「刻の賢者であるレイ様には、横槍が入るっていうのは別に珍しい事じゃないし」

「……そうだね」

「後はレイ様の気持ち次第だらうし」

「……そうだね」

何故か耳が痛くて、段々と俯いてくんだけど…。

何でだらう？

ピーコックと話していると、悩む時間が勿体無く思うというか。

「何かね。自分でへこんで沈んで八つ当たりして、言葉が欲しいっ



て我俣言った割にね。一人だけ浮上して元気になって開き直ったりしちやって申し訳ないというかね」

顔から火が出るほど恥ずかしいとばかりに頬を押さえつければ、やっぱり返ってくるのはピーコックの笑顔。

「いいんじゃない？ 放置しておけば」

そして、迷う事なく言われた言葉に、今度こそ私は返す言葉を失い頂垂れた。

うん。分かっていたつもりなだけどさ。

やっぱり、盾も私に異様に甘いよね。

嬉しくないって言ったら嘘になるけど。

「返事は？」

そんな私の思考を現実へと引き戻す声が聞こえた。

「あ…うん。返すよ」

頂垂れてる私に、上から降ってくる冷静な声。

懐から宝石の入った巾着を取り出し、私は右手を翳す。拒絶の意志を解除はせず、一部だけ綻びを作ってそこから兄様に言葉を返す。私はいつでもいいよ、と。

すると、直ぐに返信が届いた。どうやら兄様も対になっている宝石を握ってみたい。

「うん。明日…ね」

兄様の沈んだ声音。

それに淡々と返しながら、通信が切れた後に深々と溜息を落とすた。

「咄嗟の行動って、後で何とも言えないね  
自分の事に関しては。」

今の通信を聞いていて、心底そう思う。

「面白くていいけど？」

「それ、フォローになってないからね」

心の奥底から言っているであろう。ピーコックに、私は何とも言い  
がたい表情と共に即座に切り返す。

ホントにそれ、フォローになっていよね。

### ツナガルモノ・3

久しぶり、というわけではない時間。

永遠に等しい時間を生きる私にとってみたら、瞬き程度の時間なのかもしれない。でも、兄様も影達も私とこんなに長い時間離れるのは初めての事。しかも、一切の連絡を絶つ徹底ぶり。

私としては距離をとってへこんでへこんで、へこみまくってグダグダと考えて。そしたら意外とあっさり浮上したという経緯なんだけど。

それを知らない兄様たちは、神妙な面持ちで私に来るであろう部屋で待っている。ソファーに深く身を沈め俯いていたり、壁に凭れ掛かりながら腕を組み、天井を見上げている姿とか。

これだけで、離れていた間の葛藤が見えてはくるんだけど…。

すう、はあ、と軽く呼吸を整える。

私が本気で隠れた場合、誰にも気付かれないという事ははっきりしているんだけどね。今も空間一つ隔てた場所に立ちながら、出るタイミングを見計らいつつ緊張を解す為に深呼吸を繰り返す。

この神妙な表情を浮かべた面々を前に、何て言っていればいいんだろつ。

本気で悩む私の背を、何かが押した。

「ッ!？」

ふらり、と崩れた体勢。

目の前に迫るのは、何故か亀裂が出来た時空の壁。時空の壁とい

つてもただ単に、気付かれないようにポケットを作っただけのようなもの。つまり、切れ目を作れば簡単に部屋に出れちゃうわけなんだけど。

「ピーコックッ」

体勢が崩れた中、身を擦るように押し込んだ何かを確認する。ズボン、と間抜けな音をたてて綺麗に頭から飛び込んでいくんだけど、その瞬間見えたのは口角を上げたピーコックの姿。

やられた、というか。もう少し心の準備をさせてよ、と怒るべきか。

答えを出すより先に、私の体は亀裂に飲み込まれ、兄様たちがいる部屋の中心にポテリ、という間抜けな音を響かせて落ちた。

そう、落ちたの。

私と会ったら何て言おうか、なんて悩んでいたであろう兄様が口を開け、驚いたように目を見開く。それは兄様だけじゃなくて、私の影たちも同じだったらしく、妙な沈黙が流れる。

言おうと思っていた事が全て抜け落ちたといわんばかりの間抜け面。背中を押したであろう存在を確認する為に身を擦った私も、受身はとれずに顔面から絨毯へと突っ込んだのも原因かもしれない。

正直に言っつて、顔が痛い。

柔らかかでふわふわの絨毯だったし、距離があるわけでもなかったから怪我を負ったわけじゃないけど。

ちょっと赤くなってるかも、なんて右頬を右手の平で触ってみたら、微かな痛みが頬に走る。

「レイッ!?!」

痛みで顔を歪めた私に、兄様が駆け寄りながら右手を優しく掴み、

頬から離すと同時に頬を確認する。顔を打った私以上に、兄様が顔を歪めながら私を見るんだけどね。何か…兄様の方が痛々しい感じがする。

「ああああ赤くなつて。冷やすものを持ってきて！」

すっかり取り乱した兄様が、自分の影に頼んだのは冷やすもの。つまり、桶とタオルなんだろうけど。

「大丈夫だよ？」

「大丈夫じゃないよッ。こんなに腫れて…」

寧ろ、兄様が泣いてしまいそう。

この程度の怪我ってどうか、怪我未満ってどうか、痛いけれども慣れてないわけじゃないのに。

言葉に出す事はしなかったけど、兄様はわかったのか、やっぱり痛そうなの辛そうな表情を浮かべる。んー…こんな表情をさせたいわけじゃなくて、会って話して色々と決着をつけたかっただけなんだけど。

「姫さん。治療魔法かけますよー」

そして、慌てる兄様と私の上から白兔が覗き込むように私の頬を確認しながら手を翳す。

ああ、そっか。魔法があつたよね。私も、兄様も混乱してたのか魔法を思いつかなかつた。

「とりあえずそのまま冷やしといて下さい。その上からかけるんで兄様とは対照的に、淡々としている白兔。でも、瞳の奥に宿るのは苛立ちかな？」

「……姫さん。俺、姫さんが怪我するのは嫌い。へこむのも嫌い。落ち込むのも傷つくのも嫌い。じゃ、この状況は？」

「その苛立ち…ね」  
今更なのね。

最近、前よりも甘やかされているような気がするんだけど、それはきつと気のせいじゃないと思うのね。兄様や白兔たちには言わな

いけど。ピーコックが背中を押したって事は。言ったら最後、ピーコックの気遣いだって言っても闇討ちじゃなくて堂々といきそうだからね。

実力行使気味だったけど、私を落ち着かない気持ちにさせていた顔合わせの瞬間。このおかげで、気まずさも何も感じないまま顔合わせが済んだ。私だけじゃないだろうけど。

「色々と考えてた割りに、あっさり元の感じに戻ったけどね。姫さんはどうしたい？」

癒しの魔法を右手に宿し、私の頬に当てていた白兔がやっぱり淡々と言葉を紡ぐ。私次第で、答えは言わずに元の状態に戻るって事。

「うっん。沢山悩ませただろうし。折角だから聞きたいな」

首を振り、私は部屋をぐるりと見回しながら決めていた言葉を口にする。

「了解」

白兔の苦笑い。

久しぶりに見た気がするけど、気のせいじゃないんだよね。

兄様が俯いてるのが気になるんだけど、私が兄様に伸ばした手を遮るように黒が目の前に立ちふさがる。

「黒兔……」

つまり兄様は後で、という事なのかな。

「姫様。ソファーに座って。沢山、作った」

「新作のお菓子を作ったから、沢山食べてください」

すかさず、白兔が言葉を付け足す。既に癖になっているのかもしれない。

「ありがとう」

頂垂れている兄様を横目で確認してたんだけど、黒兔に抱き上げられて強制的に兄様が見えない位置のソファーへとおろされる。私がない間に何があったんだらうって思うんだけど、聞いた所で答えないんだらうなあって思う。

音をたてないように、いつものように黒兎がホールケーキを机の上に所狭しと並べ、その合間を縫うように白兎がカップを置いていく。

ものすごく気合が入っているであろうケーキの数々。

兄様から私が出る時を聞いてただろうから、それに合せて作ったんだろうけど。

「姫様」

「ん？」

私がケーキに見惚れてたら、黒兎が膝を付き、視線を私に合せながら口を開く。

「ずっと、食べて欲しかった。姫様が食べてくれると、嬉しい」

今日は、黒兎の口数が多い。

ソレは気のせいじゃなくて、ただの事実。

「姫様」

「うん？」

ジッと見つめられ、私も黒兎を見つめる。

「俺は、姫様が刻の賢者だから、生きていられる。姫様と刻の賢者は、俺にとっては同じ存在。違いがわからないけど、俺は、人ではなかったとしても、刻の賢者の姫様が大好きだ」

「……」

あっさり。本当にあっさりと言われた気がする黒兎の答え。これには流石に白兎の動きが止まって、隠れていたはずの黄兎と緑兎が驚いたような表情を浮かべて、姿を現してた。

「ちよつと黒兎!？」

「それはないだろ!？」

あ。久しぶりに聞いた二人の慌てる声。

白兎や黒兎とは別の意味でまったく動じない二人だから、実はこ  
ういう声をあげるのは珍しかったりする。

「…まあ、黒兎はこんなもんだよな」

私の斜め前に立っていた白兎が、妙に達観したような声音を漏ら  
すんだけど、その表情に浮かんでいるのは苦笑。でも、何処か楽し  
げな印象も受けたりする。

「言うつて決めた。だから言った」

「いつ言っても同じだろうって事か。じゃ、姫さん。黒兎の力作で  
も食べながら、前座はサクッと終わらせますか？」

ああ…うん。

影は、私と共に歩ける存在。だからこそ、影よりも兄様の答えを  
一番知りたがってたって……解っているんだね。

その割りに、何となく兄様が置いてけぼりをくらっているような  
感じもするんだけど……気のせいかなあ？



## ツナガルモノ・4 エピローグ

「色々……いろついろと考えてたのに！」

隠す事無く不満を口にする黄兔。その隣りで、緑兔は困ったように頬を掻きながら、黄兔と私を見比べてる。

「僕達が姫様を好きだつて、いまいち信じてないみたいだから、僕からギョツとしようと思つてたんだよ。それなのに姫さんは顔面強打するし、黒兔はあっさり言っちゃうし」

「それはいいから」

顔面強打の事、これからも要所要所で言われそう。流石にそれはちよつと、とストップをかけてみるけど、黄兔は止まらない。

「僕は……僕も刻の賢者の姫様が好きだよ。正直、姫様は姫様だからね。自由に生きていいと思うし、大変だったら手伝うし甘えて貰いたいし。でも、何も知らないレイ様じゃ僕は救われなかったし」

「……」

「僕達影に答えを求めちゃ駄目なんだつて。僕達にとって姫様は姫様で、刻の賢者である人外の力を持った姫様と出会って過ごしたんだから」

「……そうだね」

影達は知つてたよね。

刻の賢者なんていう存在は知らなくても、私が人外の存在だつて事は知つてたよね。黒兔と黄兔の告白のような言葉。その告白に、

緑兎と白兎は苦虫を噛み潰したような表情を浮かべてる。

相変わらず沈黙を守ってる兄様と、白兎と緑兎。

それに、黒兎と黄兎が刻の賢者である私を選ぶっていうのは、何となく想像がついてたから驚かない。

二人は、自分達の力に押し潰されそうだったから。それを抑えてしまえる刻の賢者の存在はきつと、唯一無二の存在に思えたはず。

「……気分は抜け駆けされたっていう感じですけどね。姫さん、黒兎のケーキでも食べましょうか？ 折角入れた紅茶も冷めれば勿体無い」

目の前に差し出されるのは、いつのまにかカットしたケーキ。私の好きなフルーツタルトにカスタードが挟んである。珍しいフルーツに、カスタード。その中にはフルーツのクリームが入ってるのかな。

すごく美味しそう。

感情が高ぶった黄兎は、緑兎が後ろから抱え込むようにして落ちて着かせる。黒兎がケーキ皿を持ち、一口サイズにケーキを切ったらそれを、黄兎の口の中に放り込んでいく。

とりあえず食べさせて落ち着かせようっていう魂胆みたい。

「白兎。ここまできたら俺から先に言うよ？」

白兎はいいじゃん。俺たちよりも姫様にべったりだから、今更改めて言わなくても」

黄兎の後ろから出てきて、私の右斜め前へと立つ緑兎。ケーキを食べだした私の前で白兎と応酬を繰り返す。

「あのなあ。俺も考えた言葉を姫さんに伝えたいわけだ。どうして緑兎に譲らないといけない？」

「白兎の後は嫌だね。全部言われそうだし」

「奇遇だな。俺もお前に言い尽くされそうなのがするんだけどな」  
火花が散りそうな程互いを睨みつけてるんだけど、煎れたての紅

茶とケーキが目に入ってないみたい。甘いものが好きな二人には珍しいんだけどね。

黒兎は黄兎にケーキを食べさせてるし。けれど次の瞬間には、黄兎がお皿をぶんどって自分で食べた。それを見届けた黒兎も自分の皿を持ち、ケーキを口に運び始める。

未だに撃沈している兄様をほっておいていいか解らないんだけどね。

チラリ、と視線を流そうとすれば、気付いた白兎に視界を覆いくすように隠される。どうして兄様を見るのをそんなに嫌がるんだろう。

「姫様。俺は、レイ様のままでいいと思うよ。刻の賢者の仕事がかれば、代わりに俺たちが出来る事は俺たちがするし」

「…つまり、刻の賢者が嫌なら、別に刻の賢者になる必要はないよ。姫さんが一番だから、ね…」

どうやら、二人の意見は同じみたい。

私が刻の賢者であろうとも無力な人間だったとしても、白兎と緑兎には関係ないのか、黒兎や黄兎とは違った笑みを浮かべて私を見る。

白兎と緑兎は、自分たちの力を抑えられる人間よりも、心の拠り所が欲しかった。

黒兎と黄兎は、自分たちの力を圧倒的な力で抑え付ける存在が欲しかった。

今回の答えは、きつとその差。

黒兎や黄兎に言わされたとはかりに懽然とした表情を浮かべるんだけど、その瞳の奥には私を心配する色が宿ってた。

私とピーコックの会話とか、集めた情報とかで刻の賢者が想像以上に特異だという事に気付いたのか、初めて見る類の心配の表情。

心配で心配でたまらない。

そんな感情を一切隠さず、私へと向けてくる。

「ありがとう。皆がいてくれて、本当に良かった」

ピーコックは、影を作るぐらいなら盾を欲しがればいいのって言うってた。けど。

探して良かったと、心底思う。

影は、私が生きてる限り死ねないから。

解放を望むなら解放するけど。

望まない限り、ずっと一緒にいるから。

大切な人が死ぬって、本当に……言葉じゃ言い表せないくらい……怖いもの。

「なんていうかさ……僕も考えたんだけど。いや、考えるまでも無かったのかな。ただ自分に自信がなかっただけで。けれど、白兔たちに殆ど言い尽くされたような気がするよ」

後ろからそつと私を抱きしめてくれるのは兄様。その声音は困ったような響きを持っていて、思わず私の口から笑いが零れた。白兔や緑兔ですら困ってたもんね。黄兔や黒兔に先に言われたって。

「でも……さ。レイは、僕の答えを一番欲しがってたって。自惚れてもいい？」

僕の可愛い妹。僕の、大切な家族」

自信がないっていう兄様。

それはきつと、私も同じ。

だからこそ、ちよつとの事で直ぐ揺れて、自信がなくなって空回る。

「私も同じ。兄様は大事な家族。今の私の帰る家」

拒絶されるのが怖かったといえ、兄様が私を抱きしめて腕に力を込めた。

勝手に勘違いして空回ってた私と、私が妹という存在からかけ離れる事が怖くて、刻の賢者を見ているようで見ていなかった兄様。

「これって…結局は大団円なのかな？」

なんていうか、結果さえ出せば収まる所に収まっただけっていう感じもするんだけど。

「実際は何も解決されてないですけどね。まあ…俺は姫さんが近くにいればいいけど」

確かに、と頷く事しか出来ない白兔の言葉。刻の賢者の事も話してないし。星の事も話してない。

離れる時に言った教えるって事も、なんだかんだといって言うタイミングを逃したような気もするし。

17の意味は、私とピーコックだけが知ってる事実。

「レイは…これからきつと僕の想像がつかないような大変な目に合うかもしれない。」

でも、僕は王になって支えるよ。

邪魔者もきつと、捨石になってくれるだろうし。遠慮なく使おうね」

結局は有耶無耶になった私の辿った道筋。

でも、それよりもたった今兄様が言った言葉がこの上なく物騒な気がして、聞いた方がいいのか聞かない方がいいのか。

判断に迷っている、久しぶりに兄様が蕩けそうな笑みを浮かべ、私の頭を撫でてくれる。

つまりは、聞かなくていいよって事。

「僕も少しずつ教えるよ。レイがいなかった間の事。だからってわけじゃないけど、焦らずにゆっくりと……レイの事を沢山教えてね」

すごく甘やかされているんだと思う。

でも、それが心地よくて、私は小さく頷く。

やっぱり、ライ兄様に甘やかされるのはすごく好き。

ライ兄様に甘やかされる事。

大好きな理由。

あの懐かしい日々と重ね合わせてないか？

そう問われたらきつと私は否定は出来ない。

だって。

彼と彼女は、私の始まりで、私の全てだったから。

「本来ならば在り得ない事。それは、レイ様にとっては日常。だからこそ気がつかない」



廻る廻る。

歯車が廻る。

「それでも、今回の在り得ない事はいつもと違う」

巡る巡る。

刻が巡る。

「そうだね……本来なら貴方は、力と記憶だけなのに」

何とも言い難い表情を浮かべ、目の前の靄を見つめる。

「そうだな。俺は、受け継ぐ存在を見つけては漂うだけ。でも、考えてみればわかるだろ？」

記憶と、力の両方をいつまでも引き継げるか。色あせる事なく、レイと同じ時間を漂い続けられるか」

失われたはずの男が笑う。

「俺はまだ眠るよ。彼女がまだ、眠っているから、ね」

「レイ様が落ち着いたから、の間違いでしょう？」

「それも、正解」

男が、笑った。

「慌てるなよ、ピーコック。今回の件は、星の親馬鹿が発揮されただけ。でも、そのおかげで刻の賢者としての居場所も手に入れた。なら、俺が今すぐやる事なんてないだろ？」

笑ったまま、靄だった男の姿は空気に溶け込むように消えていく。

誰にもいえない秘密だけを押し付けて。

静かに眠る。

夢から覚めるその日まで。

彼が目を開けることは

…無い。

## ツナガルモノ・4 エピローグ（後書き）

界渡りの自由人〜碧い星の物語り〜本編はこれで終了になります。  
読んでくださった方、ありがとうございました。

番外編く刻の賢者とクロウサギ・1 (前書き)

黒兎との出会い編です。

暗いです。

話しの流れで人が死にますので、そういうのが嫌いな方は注意して下さい。

番外編く刻の賢者とクロウサギ・1

自分が異端だと気付いたのは、早かったと思う。

生まれて直ぐにあげた産声。

その時点で既に、それは効果を発揮していたのだから。

両親は、居た。

普通の。何処にでも居そうな親だった。

だが、俺の異端に惚れ込んだ女に殺され、俺は連れ去られ飼われた。

女の柔らかな肢体が俺に絡みつくように、俺を徐々に侵食していく。

女の望むように声を発し、愛の言葉を囁いた。

せめてもの救いは、愛の言葉だけで満足してくれたという事だろうか。

そしてその女も殺された。

俺の声は特異らしく、一種の麻薬のようなものらしい。のめり込んで、のめり込み過ぎて、俺無しじゃ生きられなくなるか、俺を欲した誰かに殺される。

自我が目覚め始めた頃には既に女に飼われていた俺は、胸に渦巻く感情の正体に気づかず、ただ、諦めたような生を過ごしていた。

それなのに、俺の頭には死ぬという選択も、逃げ出すという選択もなかった。既にそれが当たり前になっていた俺は、言われるがままに過ごすだけ。

望むだけ言葉を囁き、一般的にはご主人と呼ばれる存在が殺されるのを見るだけ。

自我というものがあるのかないのかすら、分からない。

「アイシテル」

男にも女にも、俺を飼う存在には愛を囁く。

こんな言葉の羅列の何処に常習性があるかなんてわからず、望まれるがままに寄り添う。

気持ち悪いな。

ある日、ふとそんな感情が過ぎった。

ひょっとしたら、これが自我というものかもしれない。

けれどどうして気持ち悪いなんて思うか分からずに、俺は自分よりも一回りも二回りも年が上であるう女に手を伸ばす。

この女は、俺が腕を伸ばし、その身体を絡めるように抱きしめるのが好きらしい。満足そうに歪んだ笑顔を浮かべ、俺へと口付ける。この行動に意味があるのかどうなのか。

俺には、意味なんて何も無い。

いつその事、壊せるだけの力があつたら良かったのに。

そうすればきっと、全てを壊してた。

この気持ち悪い世界の全てをさら地に変えて、俺は声を発する事なく死んだのに。

ある日女に言ってみた。

「俺と一緒に死ぬか？」

心中というものになるらしいが、一緒に死んだ所でこの女と俺は何一つ繋がっていない。

すると、女は驚いたように目を見開き、身体を震えさせながら小さく首を横へと振り始める。

次第に動きは止まり、女は俺の胸に手を当て優しく押して身体を



離すと、そのまま駆け出し窓の外へと消える。

この屋敷は崖の上へと建っている。俺を奪われない為の特別仕様と女が言っていた。

窓の外は崖。

どうやら、女は一人で死ぬ事を選んだらしい。

その後も何度か試してみたが、誰も俺を殺せずに一人で死ぬ事を選んだ。

どうやら、俺を殺す事は出来ないらしい。

どつりで、誰も俺に傷をつけなかったわけだ。

その理由が分かり、また何とも言い難い感情が浮かび上がる。

「そうか：自分でか」

燃える屋敷を見ながら、俺は溜息混じりに言葉を落とした。

俺を奪いにきた女と、俺を奪われまいとした女が二人仲良く、屋敷の中で眠りについた。

二人がお互いを刺した後、纏れるように倒れ近くのテーブルへと頭をぶつけた。咄嗟に手を伸ばしたのはどちらだったのか。

テーブルクロスを掴み、虚ろな眼差しを俺へと向けてくる女。

燭台が倒れ、部屋へと火が広がる。

何故か、俺を奪いにきた女の衣服に火が移った瞬間、今までになり燃え上がり方を見せた。

何かを仕込んでいたのかもしれないが、女が死んだ今ではわから

ない。

「……崖から落ちれば、死ねるのか？」

普通の人間ならば死ぬ。

俺の特異な体質は、声だけなのだろうか。

疑問はあるが、俺はそのまま崖の淵へと立ち、下を見つめる。

俺を飼いたがる人間は本当に、崖の上に聳え立つ様な屋敷が好きらしい。

手間が省けていいが。

「朽ちれば、いい」

もう、他人の血の赤を見るのはごめんだと思う。

俺が最後であれば、いい。

タンツと地面を蹴り、俺は迷わずに崖下へと飛び降りる。  
めまぐるしく変わる景色。

走馬灯は、両親の涙だった。

ああ……心配を、かけたのか。

心残りだったのか。

呼び起こされた記憶に、俺は顔を顰める。

殺され、俺を奪われ、きっと無念だった。

その俺も、こうして自分の死を願う。

父は、母は死に際に何を思ったのだろうか。

迫り来る岩肌を前に、何故かそんな事を思っていた。

死に際の思考としては悪くはない。

人間の温かさを、思い出したから…。

## 番外編 刻の賢者とクロウサギ・2

目まぐるしく変わる景色。

近づく岩肌。

その瞬間を思い、俺は目を閉じた。

衝撃がくれば、俺が再び目を開ける事はないだろう。

だが、いつまで経ってもその瞬間は訪れない。

怪訝に思いながら目を開けて見れば、目の前には白銀。月を切り取ったかのような銀が、目の前で煌く。

初めて見た。こんな綺麗な色を。

「お兄さん。初めまして、だね」

ふわり、と宙に浮かぶ銀の髪を靡かせる小さな少女。

そして、その横には不機嫌そうな男。深紅を纏った男が、右腕を前へと突き出している。

多分：いや、絶対？

この二人は、モノが違う。見た目も、今まで見てきた人間とは一線を駕しているが、それだけじゃないと俺の中の警鐘が鳴り響く。

「私はレイ。深紅の髪のお兄さんの名前が白兔。貴方は？」

淡い笑みを浮かべたまま、淡々と言葉を紡ぐ少女　レイ？

少女と男の名はわかったが、俺は口を開く気にはなれず、視線を逸らそうとした瞬間……何かの力に引つ張られるように強制的に男の方に顔を向けさせられた。

普通の人間だったら恐怖を感じるのかもしれない。  
だが、俺は死ぬ気の人間だ。

恐怖も何も、今更だろう。

「うわ。可愛くない男ですねー。ね、姫さん」

「……白兔の態度も悪いよね？」

「全然。俺は姫さんに対してはこれ以上ない程温和な態度ですよ？」

「私にじゃなくてね」

少女が、呆れたような溜息と一緒に言葉を吐き出す。男はその態度は予想内なのか、表情一つ変えずに当然とばかりに頷く。

「当たり前じゃないですか。目の前の男はまだ、俺にとっては粹外だ。なら、気に食わない事にはかわらないですよ。ちなみに、この辺りは兎と同意見だったりするわけだけど」

「…兎？」

黙って会話を聞いていたが、気になる言葉に思わず声を発してしまふ。元々音を出す気なんかなかった。

俺の声を聞いた瞬間に顔色が変わる人間。それを、物心ついた頃から数え切れない程見てきた俺は、既に声を発する事自体が恐怖なのかもしれない。

ふと、そんな事を思った。

「へえ…変わった声」

「…なのはわかりますけどね。姫さんの影は俺一人でも十分ですよ」

？」

だが、二人は一瞬だけ目を瞬き、俺を面白そうに見るだけ。

「何故…この声、が、効かない？」

効いてほしいわけじゃない。が、効かなかった人間を見た事が無い。俺の疑問に、少女が考えるように視線を下へと移し、一回だけ頷く。

「声。普通の人間には辛いかもね」

「……普通？」

少女の言う言葉には、所々何かが引つかかる。

まるで、目の前の少女と男が、人間ではないような……人間であったとしても、普通ではないと言い切っている。

その普通ではないという意味は、俺の声が効かないというのがそのうなのだろう。

「そ……」

少女が口を開くことした瞬間を見計らい、男が優しく口元に人差し指を当てる。表情はあくまでも笑みで、優しげなもの。ただし少女だけに見せるもの。俺に対しては探るような、面白いモノを見つけたような、様々な感情が入り混ざったような眼差しを向けている。

「俺と姫さんにアンタ程度の声が効くわけがないだろ」

ニヤリ、という表現が相応しい笑み。口角を上げ、挑発的に見えるような笑みを浮かべ、俺だけを視界に収める。

「俺が姫さんの影をやっているなくても、アンタ程度の力だったら、衝撃波で一蹴できるね」

影。

「……王族、か」

再び男が口にした影という言葉で、この星の王族に伝わる話しを思い出した。王族だけが作れる、自身の魔力を加護として与えた人間以上の存在。

それは口伝のみで伝えられるらしい。

実際は作るのではなく、契約だという話しだが。

だが、影という情報だけで少女の正体が見えてきた。

男が影だというなら、少女は王族でしかない。

「正解。一般市民は知らないはずなんだけどな。結構博識？」

「…さあな」

「どつちでもいいけどさ。飼ってた女が教わらせたって所だろ？」

「……」

暗い。暗い色を宿した男の眼。

少女を見る眼差しとはまったく違う ……馴染みのある色を宿す

男。

多分。俺もこういう眼差しを浮かべているはずだ。

男と俺の視線が交差した瞬間、目の前が銀で埋め尽くされる。

「ッ」

距離を取ろうと足に力を入れ地面を蹴ろうとしたが、肝心の蹴るものが存在しない。スカッと間抜けな音を響かせ、俺の脚が宙をさま迷う。

自分の現状に、この現象を起こしているであろう少女に驚愕の眼

差しを向けるが、少女は気にした素振りさせ見せずに崖上へと俺の身体を浮かばせた。

「まったく。そういうのは、本題が終わってからにしてほしいんだけどな？」

先ほど聞いた少女の声よりも低めの声。何処となく不機嫌さを漂わせた少女に、男は頬を引き攣らせながら膝を付き、少女と目線の高さを合せた。

「ひーめさん。怒ったらイヤだって。ね、機嫌直してくださいよ」  
男の意識から完全に俺という存在は消えたのか。あっさりと俺に背を向けて少女だけを見ながら話し始める。

「……」

結局は、何なんだ？

意味が解らずただ成り行きだけを見守る俺に、少女は燃えかけの屋敷を指差し。

「白兔。あれ……消しちゃっていいよ。あの思念は、好きじゃないから」

あっさりと言ったのけた。

言葉の真偽を確かめるより先に、男は少女から離れ屋敷の前へと立つと、息を1回吐き出す。

そして……。

俺の予想を超えた光景が広がっていた。

男が口を開けたと同時に、辺り一帯に響き渡る風の音。男から放たれたであろう衝撃波は、燃えさかる屋敷を文字通り木っ端微塵に吹き飛ばし、崖上の屋敷は影も形すらもなくなっていた。俺の声



とは違う、直接的な破壊の力。

俺が欲しがっていた力を目の前に、無意識に拳を握り締めていた。

「ははっ。俺と同類かと思ったら、やっぱそうか。俺の場合は壊しきる前に、姫さんに出会っただけだな」

握り拳を見ながら、男が遠慮なく笑う。その光景に、腹の奥から何かが這い出てくるが、ソレが何、なんて俺には解らない。

一つ言える事といえば、この男と俺の性格は合わないのだろう。

この時心底思った考えが数分後にひっくり返される等とは思わず、今の俺は気に食わなさそうにただ、男を見ているだけだった。

番外編く刻の賢者とクロウサギ・3

男と睨み合うように視線を絡ませていた俺の前に、トスン、とこの場には不似合いな音が響き渡る。

黒い塊。

それが何かという事に気付いた俺は、戸惑いの表情を浮かべてしまつ。

黒い塊。

そう。突然。という言葉が相応しい程、何も無い空間から現れた。その理由は、目の前の少女。

「んー…」

ジッと俺を見ながら、唸る少女。  
少女の隣りに立つ男と俺との険悪な雰囲気など一切気にならないのか、俺を見ながら首をほんの少しだけ傾げた後、にこりと笑う。  
俺が見た事のない笑顔。

いつも…いつも俺が見ていたのは、真っ赤な口だった。元の形な

どわからない程分厚く塗られた真っ赤な唇。俺に愛を囁けと、素顔を晒さない女達が強要する。ソレを思い出した俺は、胸の奥に言葉に出来ない想いがわきあがってくるのだが、少女が手を振り上げた瞬間全てが吹き飛んだ。

サツと空気を一閃する少女の右腕。

何をするのだろうという少女に対しての興味と、男が眉を顰めた事による疑問。そして、目の前に現れた黒い兔。

「姫さん」

男が、声を絞り出す。

「また、ですか？」

男。そういえば白兔と呼ばれていた男。

また？

そう問いかける眼差しを向けて見れば、男ではなく白い兔が俺の前へと立ちふさがる。

「コイツはまたっ」

また??

黒い兔よりも随分と目つきの悪い、男を連想させるような白い兔。コイツを見ると、あの黒い兔は随分と大人しい。しかも、蹲って震えている気の弱そうな兔だ。

《未熟者がーっ》

そんな事を考えていたら、兔が喋って跳んだ。飛んだ？

そうか。兎は飛ぶのか。

激しすぎる触れ合いを目の前に俺が動けずにいると、いつのまにか少女が黒い兎を両腕に抱きしめながら俺の隣りへと立つ。

少女も小さいが、兎も小さい。どうやらあの白い兎の大きさが規格外らしい。

「シロウサギと白兎はいつもあんな感じだから、気にしないで」

「……ああ」

シロウサギと、白い兎。

俺の疑問に答えるように、少女が表情全体で笑みを浮かべる。

「はい。この子は貴方のもの。白兎たちを見ていれば解ると思うけど」

「……」

「兎はどうしてか？」

無言のまま少女を見下ろすと、俺の言いたい事を感じ取ったのか少女が口を開きながらもう一度兎を抱きかかえる。

「兎は寂しがりやでしょ？」

「……」

少女の言葉はたった一言で済んだ。つまり、俺も、あの男も寂しいと叫んでいたという事か。

男の事はわからない。でも、俺の事なら……そうだな。寂しい、

と言えるかもしれない。声には出さずに視線で少女に伝えると、少女は首を横へと振る。

「本当に寂しいのは …… 誰でしょう？ …… まあ …… 謎かけにもならないけどね。」

…… もう予想はついてるかもしれないけど、貴方さえ良かったら私の影にならない？ もれなく人外コース。寿命も力も桁外れ。寧ろ常識って何だろうっていう理不尽な存在の、私の影」

曖昧な笑み。

自嘲とも取れる笑みだったが、俺にはその意味が解らない。ただ、解る事といえば少女が俺を影にしたいという事。少女には、俺の声効かない。そして、俺が欲しかった壊せる力が手に入る。それだけ。

遠くの方で男と、地響きのような音が響き渡るが、少女が作り出す空間を侵食する事は出来ないらしい。

音が吸い込まれそうな程静かな空間。

神聖ささえも感じさせるような空気が流れているのに、厳粛なものではない。寧ろ安らげる場所。

「答えは直ぐに出さなくていいよ。とりあえず、このクロウサギと一緒に暮らしてみよっか」

「？」

少女の腕の中から、俺の腕の中へと跳ぶ兎。

少女の腕の中に納まるぐらいの小さな兎。俺の腕の中だと、納まる処が有り余ってしまう程の大きさしかない兎。

疑問を言葉にするよりも先に、少女の身体から解き放たれる何か。それに吞まれ、俺の四肢は自由が聞かずにそのまま黒い霧の中へと吸い込まれていく。

「その兎に聞けよ。小生意気なコイツより、臆病みただけだな」

完全に飲み込まれる前に俺の視界に入った男。後ろでは白い兎が何かを怒っているが、男の言葉を聞く事に精一杯で他の音が一切耳に入ってこなかった。

この兎に聞け？

あの白い兎と同じように喋るんだろうか？

確認するように兎の顔を覗き込めば、黒い兎が口を動かしている事に気付いた。

《 《

口をパクパクと動かす黒い兎。

でも、俺には聞こえない。



番外編く刻の賢者とクロウサギ・4

喋らない俺と、喋れない兎。

あの少女の言葉に従うわけではないが、ここは何もない。今まで俺がいた場所のように、華美な調度品があるわけでもないし、屋敷で働く人間もない。

あるのは、小屋。そして、何処からか現れる食事と、俺と兎。

ここに押し込まれてから日課になってしまった黒い兎を抱き上げ、俺は散歩に行く。

物心ついてから初めて散歩というものをしてみたが、何をするわけでもなく、景色を楽しむ。

澄んだ空気。

俺の声を聞こうとする人間のいない空間。

ああ。

これも悪くない。

兎は、俺の腕の中に慣れたのか、キョロキョロと顔を動かしながら景色を楽しむ余裕まで出てきた。

この小さな温もりに、俺も慣れたのかもしれない。

近い。

そう、近いだ。

この兎は、俺と、同じもの。



自分の事なのに、何をすればいいかわからない。  
何をやっていいのかもわからない。  
人を拒絶したいのに、拒絶の方法さえわからない。  
小さく丸まり、目を閉じているだけ。

「……………」

声を発する事を忘れたかのように、俺は食べられる草を手に取り、  
兎の口元へと寄せる。あのテーブルに湧き出る食事は二人分。兎と、  
俺の分。

この兎は雑食らしい。大よそ兎とは無縁のもので平気で食べて  
しまう。なのに、健康を害した素振りもない。

臆病な兎は、始めのうちは俺の手から食べる事さえ拒絶していた。  
だが、目の前で食べたものを差し出したり、毎日口を動かすだけで  
が話しかけたりするうちに、段々と距離が縮まり、今はこうして目  
の前で食事を口へと運んでいる。

俺が、俺以外に、自分の意思でこうして行動を起こすのは初めて  
だった。それだけでも新鮮なのに、俺は、兎の名を呼びたいと思っ  
て出した。

声の出し方さえ忘れてしまったのに。

それなのに、兎の名を呼びたい。

「……………」

ぱくぱくと口を動かして、兎に尋ねてみる。

お前の名前はクロウサギでいいのか？と。そうすると、兎はキョ  
トン、とただでさえ大きい瞳を瞬き、一回頷いて見せた。

どうやら、クロウサギという名で呼んでいるらしい。あの少女の

趣味なのか。外見そのままに名づけられた兔の名前。

違和感はない。黒い兔のクロウサギ。そういえば、あの男は白兔だったな、と視線を宙へとさ迷わせた。

黒い兔に向かつて、俺は口を動かしながらあの男と白い兔について聞いてみる。兔は、考えるように首を振りながら、俺をジッと見上げてきた。

どうやら知っているらしい。

だが、兔は直ぐに俺から視線を逸らすと、横に置かれた皿から野菜を食べだした。答える気がないのか、答えられないのか。その判断は俺にはつかないが、男の言葉を信用するなら、俺が黒い兔と会話を出来るようになればきっと、わかるのだろう。

そこまで考え、俺は力が抜けたように椅子に背を凭れ掛からせながら息を吐き出す。音を発しようとしても、ヒューヒューという空気が抜ける音だけが響き、肝心の音は出そうにない。

この空間には俺と黒い兔だけだというのに、俺は声を出す事を拒絶している。

わかっている。わかっているが、声を出そうとすると身体が震えてどうしようもないのだ。

俺の意思とは無関係に拒絶する身体。ただ、今の俺にとってみたらそれすら嬉しいのかもしれない。生まれてから拒絶する意思もなかった俺の心は、死んでいた。

諦めて諦めて、俺は自分を殺した。

その俺が、自身の意思で拒絶する。それはやはり嬉しいのだと思えば、そっぽを向いていた黒い兔が、水晶のような丸い瞳に俺を写す。

ジイと見つめられ、絡まる視線。

俺も兔も話さない。

それでも、穏やかな時間が流れ、自然と唇の端が上がる。笑みを浮かべていると思えるのはおそらく、初めての事。

だが、そんな俺と黒い兔の穏やかな時間は、招かれざる来客の手

によってあっさりと壊された。

そう。

変わらないモノなどない。

当たり前前事などない。

少し、この変わらないように見える風景に毒されていたのか、俺は眉間に皺を寄せながら招かれざる客を見下ろす。こっしてみると、身長は俺の方が少しだけ高い。

「見下ろすなよ。っつーか、成長期はこれからだからな」

「……」

不満な声を漏らす男に、そんな事は聞いていない。どうでもいい、とばかりの眼差しを向けた後、俺は視線を俺と男に交互に向いている黒い兎を抱き上げ、隠すように俺の上着の中へといれた。それに、男は面白そうに表情を笑みへとかえる。

「ふうん。やつぱ、ココにいとなんだかんだといって、変わるんだな。俺とシロウサギはそんな可愛い関係じゃなかったけど……うるせえよ。テメエが可愛げがないだけだろうが」

前半は俺に向けて。後半は、俺には見えないが、白い兎に向けてだろう。あの白い兎は、男の中にいる。

俺とこの黒い兎が同じであるように、きっと。そんな事を考えていると、男が俺をジッと見ていた。

深紅。濃い、深い紅。その色を宿した眼差しが、無遠慮に俺を写しこむ。

だが、次の瞬間には、俺がまったく想像していなかった言葉を、男が迷う事無く口にした。思わず目を見張り、信じられないような言葉を聞いたとばかりの表情を浮かべれば、ソレに気付いた男がさ

も当然とばかりに口角を上げ、笑みを形作る。

「俺にとっての一番は姫さん。姫さんが幸せならそれでいい。その為の盾は、多い方がいいだろう？」

まあ…アンタが姫さんを悲しませるってなら、俺はアンタを消す事を迷わないけどな」

何処か狂気を孕んだ眼差しと声音。

「……わかりたくない。でも、似てる」

男 白兔、と少女に呼ばれた男と俺は言いたくはないし自覚しなくもないが、似た部分が多いんだろう。狂気を目の当たりにすればそうとしか思えない。

「ああ。ここがイカレタからだろ？俺も、アンタも、な」

俺の言葉に、男はあっさりと肯定の言葉を吐き出す。やはり瞳の奥に宿るのは暗い色。

あの少女には見せない闇の部分。

「だから、俺がマジだって事……わかるよな？」

「……………」

少女の影にならないなら消えてしまえと、男はこの場には不似合いな程穏やかな表情を浮かべ笑う。

そんな男を見ながら、俺はただ口を固く閉ざすだけだった。



番外編く刻の賢者とクロウサギ・5

目の前の男　白兔という名を持つ、印象的な男。

妙に大人びていて、おそらく本来の年齢は俺と大差はないだろう。けれど、目の前の男も俺も、時を奪われてしまったかのように、幼い時間を何処かに置いてきてしまった。

けれど、今の男は何処か幼くもあり、危なっかしさもある。

だからといって、特に何をやるというわけでも言うわけでもなく、俺は口を噤んだまま男を見つめていた。

どれぐらいの時間が経ったのか。

ほんの一瞬であり、永い時間であったような気がする。

それは男も同じだったのか、交わっていた視線が外れた瞬間、どちらからともなく息を吐き出した。

实力は男の方が上。

今の俺では手も足も出ないだろう。

「……………それも、いい。選択か」

だが、それでもいいのかもしれないと、俺は僅かに表情の筋肉を緩めた。元々、自分を殺せる相手を探していたのだ。

生に興味がない。生きていたくない。

それが、俺の全てだったはずだ。

男がそれを叶えてくれるのならば、俺の方に問題があるわけない。暫くの間、体験した事もないような穏やかな時間を身に纏っていたからなのか、そうだった当たり前だった感覚が何処かにいつてしまっていたらしい。

二人同時に逸らした視線。

俺は、逸らせたはずの視線をもう一度合わせ、俺は男をジッと見つめる。

殺すなら殺せばいいと。

この時の俺は何故か、影になる、という選択肢を脳裏から消し去っていた。

「……………」

男は、俺の視線に応えるように合わせ、不機嫌そうに眉間に皺を寄せたまま俺を見下ろす。

「俺は姫さんを殺そうとしたけど…………お前は、自分を殺すヤツか」

吐き捨てる。という表現が相応しい程、男は忌々しげに俺から視線を外しながら口から音を吐き出すと、俺ではなく、俺の腕の中へと目を向けた。

そこには、小さな黒い兎がいる。

「面倒くせえヤツ。自分で生きる気も死ぬ気もないなら、姫さんの盾になって死ねよ」

「……………」

「そうすれば、俺が骨ぐらいは拾ってやるぞ」

何故か、男は穏やかな雰囲気を瞬時に身に纏っていた。先ほどのギャップに対応出来ず、俺は驚いたように目を見ひらいて男を見つめるだけ。

「姫さんが勧誘した相手を俺が殺せるわけないだろ。姫さんが悲しむし」

「……本当に、少女だけか」

気になる言葉も聞いたが、それでも、今の男にはあの少女だけなのだろう。

「ああ。姫さんだけだ。俺は、姫さんがいればいい。姫さんだけしかいらぬ。でも、姫さんが影を選ぶのなら、守ってやる。ついでにな」

男の言葉に嘘はないのだろう。

俺は、俺の腕の中でおとなしく丸まっている黒い兎と共に、男を目に映しこんでいた。

印象的な人間。

華やかな人間。

声だけの俺とは違い、その場を支配するに相応しいであろう人間。

「……馬鹿じゃねえ？ いや、馬鹿だろお前」

すると、目の前の男が心底あきれ果てたと言わんばかりの態度と口調で、俺との距離を一步分縮めた。

「お前ね」



更に一步。

「十分華やかだぜ？　っつーか、この表現をあんまり野郎に使いたくないけどな」

一歩ずつ距離を縮めていたら、いつのまにか男の顔が手の届く範囲にあった。

黒い兎も不思議そうに男を見上げている。

「俺の場合は一目をひく色を持つだけだ。というか、白い兎とは違ってお前のも生意気だな」

腕を伸ばす男を、黒い兎が威嚇していた。

まるで、俺をいじめるな、と言わんばかりに小さな身体を膨らませて、俺の腕の中から出たと思ったなら迷わずに男に飛びかかる。

宙に躍り出た黒い兎に、咄嗟に腕を伸ばしていた。

このままでは地面に叩きつけられる。

そう思ったからだ。

だが、俺の予想は大きく外れる事になる。

地面に叩きつけられるはずだった兎は、男に飛びかかると同時にその形を変えた。平べったい……大きな黒い布へと変化する。

そのまま男を包もうとするが、男が手の平を翳すと同時に、兎の動きも止まる。

「へえ。形状を変えられるのか。面白いけど、俺に齒向かうにはまだだろ」

見ていたら、ひよこり、と黒い耳が生える。

布の形を残したまま、そこから黒い兎が生まれ、背中から重力に逆らう事無く落ちていこうとしていた兎を、俺は両手を使って受け止めた。

兎は分離したが、元は兎だった黒い大きな布は未だに、男を包み込もうと奮起している。

「白い兎は凶体がかくて生意気で可愛げも何もないが、その小さいの特殊能力は中々なんじゃないか」

まだ、出来る事は少ないけどな。

黒い布を見つめたまま、何処か楽しげに言葉を紡ぐ男の声を、俺は聞いているようで聞いていなかった。

目の前で起こった、黒い兎の変化に目を奪われていた。

無力だった。

小さかった。

何も出来ないはずだった。

俺と同じで、ただ蹲って震えているだけのはずだった小さな黒い兎は、小さな体軀からは想像も出来ない程の質量のある布に変化し、その名残を残したまま黒い兎へと戻る。

男の力をもつてすれば、黒い兎が残した大きな布など、一瞬で灰燼と化す事が可能なだろう。でも、男はただ動きを止めただけ。

そして、突き出していた右腕はそのままに、左腕をゆっくりと一閃させた。無駄のない動きで、思わず見惚れてしまう。

「丈夫だな。折角だ。姫さんのマントでも作るか」

姫さんなら喜ぶだろうと、男は笑った。

「これだけ出来るなら上等だろ。行くぞ。姫さんを一人つきりにし

ておくのは好きじゃない。呆けた表情<sup>カオ</sup>をしてもいいけど足を動か  
せ。仲間にしてくれるのかもなにも、姫さんが誘ったんだろ」

無言のままの俺に向かって、男は一方的に言葉を連ねる。

俺に話す隙も与えず。

元々喋りたくない俺は、頷くだけのこの形は気楽でいいのかもしれないが。

でも。

男は今、俺の心情を読み取った返事を返した。

不思議そうに男を見上げていると、男は呆れたように半眼にし、  
これ見よがしに溜息を落とす。

「解りやすいんだよ。テメエの表情は」

「……」

不可思議な言葉を聞いた俺は思わず、男をただ凝視した。

俺の表情は変わらない。

顔の筋肉が動かない自覚もある。

それでも、目の前の男はわかりやすい、と迷わずに言い切った。

この男がいて、俺の声が効かないと言い切った少女がいるなら、  
影、というのも悪くないのかもしれない。

ただ、今の俺に選択肢がない事には気付かずに、俺は男の後ろに

ついで黒い兎と共に歩き出した。

震えてた黒い兎は、いつのまにか俺を背に庇う。

声を出す事を恐れていた俺は、声を出す事を願いだす。

これが、俺と白兎と姫様の、始まり。

## 番外編く静かなる攻防

地雷。

爆弾。

超高性能魔道具。

人類全滅級魔法。寧ろ神の領域。

例えるならば、そんな感じ。

その日は、朝から晴天だった。久しぶりに空は青色を覗かせ、気持ちの良い陽射しが窓から差し込んでくる。

洗濯物干し日和だとか、森林浴には持って来いだとか。

兎に角、気持ちの良い陽射しから始まった1日だった。

だが、もし仮に、晴天ではなく暗雲だったのなら、納得していただろう。今日は朝からこんな天気で、こんな事が起こっても不思議ではないかもしれない。

そう思えていただろう。

だがしかし、今日は晴天だった。

気持ち良かった。

気分も晴れ晴れだった。

なのに、何故こんな目に合うのだろうかと、城で勤めているものならば全員が全員思っていただろう。

ちなみに、普段は快適すぎる職場だったりもする。勿論そんな城勤めは国で一番の人気の職業。コネ、よりも性格と能力重視を前面に押し出す陛下。天才児と名高い時期陛下である殿下。性格も温厚。ある一点だけ過ぎた所もあるが、それはあの姫君ならば仕方ないだろうという事で黙認されている。

殿下も姫も、性格は穏やか。身分を笠にきて、などという事は一度も見た事のない人格者。他国の支配者の話を聞くだけで、心底この国に生まれて良かったと思えてしまう。

おまけに、見目は大変麗しい血筋。話してよし。見てよし。住んでよし。という文句の付け場所がわからない国の王宮なのだが、この時ばかりは例外だった。

だがしかし、女官や騎士はまだマシだった。

女官は早々に避難し、騎士も警護を除いてその場所から離れられたからだ。一部の騎士については不運としか言いようがないのだが、後々同僚から労いの会が行われる予定だ。

この状況において、誰一人として逃げられない者たちがいたのだから、殆どが逃げられた騎士などはものすごくマシ、というレベルなのだろう。

逃げ遅れではなく、逃げられなかった者たち。つまり、ライの影である。ライの影は当事者として前面に押し出ている為、カウントしなくても良いだろう。

王家に伝わる秘術で、普通の人間よりも強くて回復力も高くて魔力も相当なライの影たちだが、あくまでも人間よりも、という範囲なのだ。

ライの人外と同列で考えるという哀れな事はやめてほしいと、嘆願書が出された程だ。

その影たちだが、元々人間の中でも強い者たちであつたが為に影になれたわけだが、勿論主はライだ。ライの傍を離れるわけにはいかない。

身を盾に、刃にかえてライを護る事を誓つた影たちが、逃げれるはずがない。例えライが当事者であり、レイの影と並ぶ位置にいても、すぐさま盾になれる場所に控えていなければならないのだ。

ピリピリ、と空気が凍りつく。

比喻でもその状況を表しただけの言葉ではなく、実際に凍り付いていた。

気分そのままに、魔力を具現させたら空間が凍りだしたのだろう。ライは高い魔力を誇る為、この程度の現象ならば髪の毛一つも凍りつかない。

それはレイも、レイの影たちも、これを引き起こした客人もそうだった。

レイの過去の旦那。リーウエル。その片腕の子孫であるシーファ。シーファは二歩程下がった場所に陣取り、様子見を決め込んでいるが、リーウエルはそうはいかなかった。

勿論最前線でレイの影たちと当たり前のように睨み合うように視線を合わせ、口元には余裕の笑みを浮かべている。

影たちもライもリーウエルもシーファも、現時点での年齢は同じ17だが、リーウエルの場合はそれに過去がつく。

一つの国を栄えさせ、賢王と呼ばれた実績を持つのだ。同時に、狸という意味合いも含みそうな気がするが、気のせいではないのだろう。

時期に目から光線が飛び出るんじゃないかと思える程の鋭い眼差し。

実際、魔力が具現化してる時点で被害は増大されているのだが、その辺りはレイの匙加減で中和していたりもする。

「また来たんだね。同盟だかなんだか知らないけど、ロリコンは見たくないんだよね。帰ってきてくれない？ 同盟なら結んであげてるよね？」

にっこりと微笑を浮かべながら、凍えそうな冷気を漂わせてライが言い切る。口調は穏やかなのに、何故こんなにも背筋が寒くなるのだろうか。

「いつでも人間ってというのは、自分の事が一番わからないものなんだな」

それに人好きのする笑顔を浮かべ対応するリーウエル。

「そろそろ妹離れをしたらどうだい？ 時期国王殿」

つまり、ライの場合は世継ぎを産んでくれる女性が必要だろうか？  
迷わず妹離れをしゃがれと二十音声で伝える。  
瞬間、更に気温が下がった気がした。

「姫さんの兄の妹離れ云々よりも、変態がこの国に入れる事の方が問題だろ？」

そこに白兔が上から見下ろすように言葉をつけたし。

「小姑も多いんだな」

と、観戦していたはずのシーファがあっさりと会話に入り込む。  
当初の予定通り、泥沼である。



これ以上ない程の泥沼でしかない。

ライの影の一人と言わず全員がこっそりと泣いているのだが、誰一人それには気付かない。仮に気付いたとしても、さらりと流していただろう。

そんな事は些細な問題にもならないのだ。この現象を引き起こしている人物たちにとっては、だが。

「あは。身の程を知らない人間ってイヤだよな。ねー、緑兔」

「確かに。空気が読めないって辛いよな」

密かに、黄兔と緑兔が援護射撃に入る。援護、という割りに直接的なのは今更だろう。

二人の参戦で、ライの影全員が胃の辺りを押さえつけたのだが、やはり、この場にそれを気にしてくれるような存在はいなかった。

「空気が読めていたらここまでこれるわけがないしね」

にっこりと、極上の蕩けそうな笑みを浮かべ、ライが黄兔と緑兔を見ないまま言葉を紡ぐ。ライの言葉を受け、確かにー、何てあっさりと言つてのける二人なのだが、そのまま白兔が外套を翻し。

「とりあえず強制退去でいいんじゃないですか？」

と、やる気満々の態度を隠すこともせず、口元に弧を描かせる。だがしかし、目はまったく笑っていないのが怖いのだが、白兔の笑みを怖がるような神経の細い人間がこの場に立ってるわけがなく。

「強制退去ねえ。いーんじゃない？ 君に出来るなら。出来ない」と

思っけどねー」

「へえ。すごい自信だよなあ」

「こつちも色々と裏技があるからねー。そりゃ、君たちみたいな強さはないけどね。強かさはあるんだよ？」

リーウエルの表情から真意を読む事は出来ないが、はったりとも思えずに判断に迷う。確かに、リーウエルがこうして転生した事を考えれば、何かしら手持ちのカードはあるような気もするし、あつても不思議ではないのだ。

だが、白兔はソレには怯まずに、あっさりと言文を発動させた。空気を切り裂くような音と、上からの重みに身体に負荷がかかる。念入りな準備はなし。相手の事を気遣うつもりもない。

その状況で発動した転移の呪文。  
寧ろちよつと潰れてろ、と言わんばかりに放たれた。

レイの影の長である白兔の呪文。

本来ならば、防げるのは主であるレイか、白兔以上の力を持つ者だけ。リーウエルもシーファも弱くはないが、白兔を上回る事は生涯ないだろう。言い切れてしまう程の実力の差。  
だからこそ、防げるはずのない力の奔流。

しかし、現実は違った。

リーウエルに届く前に力の塊は霧散し、残りとして身体に掛かる負荷をほんの少しだけ感じる程度。

「……………」

思わず口を噤む白兔と、相変わらざる笑みを浮かべるリーウエル。状況を把握しようと、全員が全員破壊された呪文の痕跡を辿ろうとした瞬間、自分が起こした本来ならばありえない現象などまったく興味のないリーウエルが肩を竦め、遠慮なく場の雰囲気凍らせた。

「わかった？ コレが俺の、奥さんを想う愛の力だって」

「」「」  
「……………」

色々と、何かを含んだ沈黙が重なり合う。

「しいて何か言葉を当てはめるといふならば、嵐の前の静けさ、というヤツだろう。」

「アンタホントに馬鹿だろう！」

「これが俺の先祖が使えてた賢王かよ嘘だろ！」

「うわ。ウザ」

「わー。消えてくれないかなあ」

「つつーか、痕跡も残さず消える、だよな」

「……………」

「あ？ 消滅させよう？ 勿論賛成に決まってるだろ」

と、全員が全員、同時に口を開く。

リーウエルサイドだったはずのシーファまであの言葉を境に、ライと影たちの横に立っていたのだが、それらを全て向けられてもなお、リーウエルの表情は変わらない。

「奥さん。待っててねー」

それ所か、ライたちの後にいるレイに、暢気に手を振り出す。

煽るという意図はなく、リーウエルの素だったりもする。そんなリーウエルの性格をわかっているレイはそつと溜息を落とし、既にノンストップ状態に突入した兄と影たちを見ながら、この惨状をどうしたものかと密かに頭を悩ませる。

はつきり言って堂々巡りでしかない。

これに突入するとなると、流石のレイでも無理だろう。力づくならば問題なくあっさりと解決出来るが、その都度力技で解決するのかな、と思うと多少面倒だったりもする。

「（うん。放置しとこ。それより…）」

ちらり、とライの影を見つめ、レイは人差し指で円を描いたまま共に戦線離脱を試みる。

「兄様。白兔。後はお願いね」

一応離脱する直前に、ライと白兔の名前だけは出す。

白兔は影長で、ライはレイの兄だ。この際、リーウエルとシーファの名前は呼ばなくてもいいだろう。

「勿論だよ。レイはゆっくりと休んでていいからね」

「勿論ですよ姫さん。害虫駆除が済んだら迎えに行くんで、休んで下さいね」

「まあ…程ほどにね？」

後の方で、酷いな奥さんー、なんてリーウエルが笑っているのだが、この際無視していても問題はないだろう。

「（とりあえず、今の兄様は護らなくていいから。私の影たちに任せといて）」

その場から離れた後、こっそりとライの影たちに伝え、一般人の枠から超える事は出来ないであろう神経を持つライの影たちを、本当にこっそりと労う。

咽び泣くように崩れ落ちた影たちに、もう少し早く助けてあげれば良かったかも、なんて思ったりもしたのだが、まだ精神は壊れてないから大丈夫だろう。

そんな事を思う辺り、レイの神経も一般人の枠組みからは外れていたりもするのだが、その事には誰も突っ込まず、やはり気にする人間はいなかった。

後日。

レイは天使のように優しく慈悲深いなどと噂が流れたのだが、そ

れを流したのは……言うまでもないだろう。

番外編〜目覚め時には（前書き）

宰相の独白？です。

## 番外編〜目覚めの時には

自分はどんな形をしていたらだろうか？

髪の色は？

眼の色は？

鼻の形は？

唇の形は？

全てが曖昧で不確か。

記憶に霞がかかったようで、あやふや。

自分はこんなにも記憶力がなかっただろうか。

陛下の最強の懐刀と呼ばれ、宰相としてその智を思うが俤にふるってきた。

だが。と言葉を区切る。

そう、ふるってきた、だ。それは既に過去の事。

ならばいつして漂う意識はなんだろうか、そこで再び首を傾げる。



段々と、あやふやで曖昧だったものが形になってくるが、その中でただ一つ。たった一つだけ色鮮やかなものがある。

例え自身を忘れたとしても、決して失いたくなかったモノ。

綺麗だった。

陳腐な言葉だが、それしか言いようがなかった。

色鮮やかな色彩。

それにも目を奪われるが、それだけじゃなかった。

俺が心惹かれたのは、内から溢れる光だ。目を奪われ、一瞬で虜にされた。

しかし、その相手は俺が仕えるべき陛下の、奥方になる女だった。

女は身体が弱かったがそれでも、幸せな家庭だと思えた。

俺は宰相として城に勤め、女と陛下とその二人の子供を見守った。

素直ではない俺と、淑やかではない女。内から溢れ出す光に身体を蝕まれ、少ない寿命を更に削る。

だが、光は衰えない。

肉体の死が近付くにつれ、女の輝きは増すだけ。

眩しくて、目を細めずにはいられない。

最期の時。

俺は漸く本音を口にした。

必ず探し出す。

女はきつと、生まれ変わる。

女はきつと、人の理からは外れた存在なのだろう。

だからこそ眩しく。

だからこそこんなに欲しい。

俺は女を娶った。

銀の髪だけが似ている、何の特徴もない女だった。

だが、女を俺を大切にし、俺も女を大切にした。

俺も女も、身代わりだったのだ。

女は好いた男を死という形で永遠に失い、俺も失った。

傷を舐めあうように俺と女は、理想の家族という欲しかった未来を描き、夢に浸る。

俺が、女を看取る事はなかった。

俺が、先に死んだからだ。

リーウエルは多分、長生きしただろう。アイツはしぶとい。俺に

そう言わせる程、アイツはしぶといんだ。  
だから、その辺りは心配していない。

だが、俺が死んだのは寿命ではない。  
まだ生命力に溢れるうちに、自身の魂を縛りつけ、この身体から  
離す。

俺の前には、箱に納められた女の髪。

死んでから数十年。今もなお輝かしいばかりの魔力を放つ女の髪。  
それに、俺は自身を縛り付けた。

女が再びこの星に生れ落ちたとき、俺も共に在れるようにとしっ  
かりと楔を打つ。

準備は全て済んだ。

残りは、俺の子孫が終わらせてくれるだろう。

手筈は整え、それだけの知性を称えた子供が生まれ成長した。

次生れ落ちる時は、俺は宰相でもなく、リーウエルの親友でもな  
い。

この国を手に入れた子孫は女を捜し、俺は網を張る。

そして今度こそ、女を手に入れる。

鉛のように重たい瞼をゆっくりと開けてみれば、目に飛び込んできたのは一面の銀世界。この色は好きな色だ。中々趣味がいいと辺りを見回せば何も無い。

あるのは、この身一つだけ。

自由の利かない手足を苛立ちを含めて動かしてみれば、視界に収まるのは小さな手の平。

ああ。漸く目が覚めた。

ああ。漸く女がこの星に生れ落ちたのか。

よくよく見れば、籠にいれられ温かな毛布に包まれている。そして、母親と思しき女が駆け寄ってきた。

どうやら、俺は連れ去られたらしい。

まったくくずらない俺に、母親らしき女は父親らしき男に賢明に何かを訴えかける。ショックがどうだこうだと。

馬鹿らしい。

俺が目覚めてしまえば、この身に宿る魔力でどうとでもなるといふものを。

だが、あの女はきっと、この身の両親を大切にしない俺を諫めるだろう。

ならば仮初といえど、俺はこの二人の子を演じ、大切にしよう。

俺の身体が成長するまで。

ちょっとした退屈しのぎだと思えばそれ程苦にはならない。

今頃、あの女もこの景色を見ているのだろうか、そう思えば心の中は温かいもので満たされた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5037/>

---

界渡りの自由人～碧い星の物語り～

2011年4月23日14時05分発行